

張籍詩訳注(18)

——「遠別離」「楚宮行」「江南曲」——

畑村 学
橘 英範
佐藤 大志

The Translation and Annotation of the Verses Which Zhang Ji Wrote (18)

Manabu HATAMURA
Hidenori TACHIBANA
Takeshi SATO

要旨 本稿は、中唐の詩人・張籍の詩の訳注(18)である。本篇には、36「遠別離」・37「楚宮行」・38「江南曲」(ともに中華書局『張籍詩集』巻一に載録)の訳注を掲載する。

訳注

36 遠別離

【題解】

遠い別れ。『樂府詩集』巻七二に、雜曲歌辞の一つとして載録される。同じ雜曲歌辞である類似した樂府題に、「古別離」「古別離」「長別離」「久別離」などがあり、張籍14「別離曲」(巻一)も載録される。

『樂府詩集』巻七一「雜曲歌辞」十一所載「古別離」の解題に以下のよう
に言う。

『楚辞』曰、「悲莫悲兮生別離」。「古詩」曰、「行行重行行、与君生別離」。

相去万余里、各在天一涯」。後蘇武使匈奴、李陵与之詩曰、「良時不可再、離別在須臾」。故後人擬之為「古別離」。梁簡文帝又為「生別離」。宋吳邁遠有「長別離」、唐李白有「遠別離」、亦皆類此。

『楚辞』に曰く、「悲しきは生別離より悲しきは莫し」と。「古詩」に曰く、「行き行きて 重ねて行き行きて、君と生きながら別離す。相去ること万余里、各おの天の一涯に在り」と。後 蘇武 匈奴に使ひし、李陵 之に詩

二〇〇九年十二月二十五日(受理)

畑村 学 宇部工業高等専門学校一般科准教授
橘 英範 岡山大学文学部言語文科学科准教授
佐藤 大志 広島大学大学院教育学研究科准教授

を与えて曰く、「良時は再びすべからず、離別は須臾に在り」と。故に後人
之に擬して「古別離」を為る。梁の簡文帝 又「生別離」を為る。宋の呉
邁遠に「長別離」有り、唐の李白に「遠別離」有るも、亦た皆此に類す。

『楚辞』（九歌「少司命」）や「古詩十九首」（其一）がそのなかで生き別
れ（生別離）を詠じたのを初めとして、李陵がその後蘇武に贈った詩で離別
を詠じて以降、これに倣って「古別離」が作られた。「生別離」「長別離」等
の楽府もこれと同類である、と言う。

先行する同題楽府には李白のもの（雑言古詩）があり、同時代では令狐楚
に二首（いずれも五言絶句）がある。李白の詩は堯帝の二人の娘である娥皇と
女英の死を作者である李白が悼む内容である（ただし、何らかの寓意が詩に
込められているとされる）。張籍の詩は内容的には李白の詩の影響を受けて
いないが、末尾の表現において類似する点が見られる。これについては【補】
で触れることにしたい。令狐楚の二首は、消息の途絶えた男性の帰りを待つ
女性を詠じている点で張籍に類似する。ただし、様々な理由で遠く旅に出て
戻ってこない男性とその帰りを待つ女性を詠ずるのは、「遠別離」に限らず
「古別離」等その他の同類の楽府に共通する特徴であり、このことで両者に
影響関係があるとは断定できないであろう。

なお、「遠別離」の三字が詩句で用いられた例としては、張華「情詩二首」
其二（『文選』卷一九）に「不曾遠別離、安知慕儔侶」（曾て遠く別離せずん
ば、安んぞ儔侶を慕うを知らんや）とあり、謝朓等の聯句「阻雪」（『校注』
卷五）の謝朓の句に「九達密如繡、何為遠別離」（九達 密なること繡の如
きに、何為れぞ 遠く別離するや）とある。前者は遠い旅に出た夫を思う妻
の心情を詠い、後者は近くににいるのに雪のために遠く離ればなれになったと
詠う。なお、漢の秦嘉「贈婦詩三首」其三（『玉臺新詠』卷一）に「念当遠
離別、思念叙款曲」（念う 当に遠く離別すべきを、思念す 款曲を叙せん
ことを）と、「遠離別」の並びで見える。この場合、夫婦の別れを言う。唐
詩には一例、字句に異同の問題があるが、張籍自身の 31「賈客樂」（『樂府詩
集』卷四八所載。『張籍詩集』は別の文字で作る）に「停杯共說遠行期、入
蜀經蚕遠別離」（杯を停めて共に説く 遠行の期、蜀に入り蚕を経て 遠く
別離す）とある。また、「遠離別」の語が、王昌齡「次汝中寄河南陳贊府」（『全
唐詩』卷一四〇）に「紛然馳夢想、不謂遠離別」（紛然として夢想を馳せ、
遠離別を謂わず）とあり、韋応物「寄盧庾」（『校注』卷二）に「悠悠遠離別、
分此歡會難」（悠悠として遠く離別し、此に分かれて 歡會難し）とある。

【本文・書き下し文】

- 1 蓮葉團団荇葉拆 蓮葉団団だんだんとして 荇葉こうよう折くも
- 2 長江鯉魚鱗鱗赤 長江の鯉魚 鱗鱗きりょう赤し
- 3 念君年少棄親戚 念う 君が年少にして親戚を棄て
- 4 千里萬里獨爲客 千里万里 独り客と爲るを
- 5 誰言遠別心不易 誰か言う 遠く別るるも心易かならずと
- 6 天星墜地能爲石 天星も 地に墜ちて能く石と爲る
- 7 幾時斷得城南陌 幾時か 城南の陌みちを断じ得て
- 8 勿使居人有行役 居人をして行役有らしむること勿なからん

【押韻】

拆―『広韻』には掲載されていない。『平水韻』では入声一一陌。
赤・易・石・役―入声二二昔、戚―入声二三錫、客・陌―入声二〇陌（古詩
通押）

入声二〇陌・二二昔は『広韻』では同用。入声二三錫は独用であるが、古
詩では通押する。「拆」は韻尾が「―ㄝ」であり、他の句末の文字と共通す
ることから、この詩は一韻通底であると考えられる。

【口語訳】

- 1 ハスの葉はまん丸に開き アサザの葉も開いたというのに
- 2 長江の鯉は 疲れて背びれ胸びれが赤くなっています
- 3 あなたが年若くして身内である私を棄て
- 4 千里も万里も彼方へ独り旅に出ていることを心配しています
- 5 誰が言ったでしょう 遠く別れても心は変わらぬと
- 6 夜空に輝くあの星でさえも 地上に墜ちて石ころとなることがあるのに
- 7 いつになったら 城南の街路を寸断して
- 8 家にいるべき人を旅立たせることのないようにすることができるとはしよ
うか

【語釈】

- 1・2 蓮葉団団荇葉拆、長江鯉魚鱗鱗赤
「蓮葉団団」蓮の葉が丸い形をしていることを言う。

「蓮葉」は、樂府「江南」古辞(『宋書』樂志三)に「江南可采蓮、蓮葉何田田」(江南 蓮を采るべし、蓮葉 何ぞ田田たる)とあり、水面に広がる江南の蓮が詠われている。これに続く二句には「魚戲蓮葉間、魚戲蓮葉東」(魚は戯る 蓮葉の間に、魚は戯る 蓮葉の東に)とあり、蓮の側を泳ぐ魚が詠われている。その後、詩語としては齊の謝朓まで用例を見ない。謝朓「江上曲」(『校注』卷二)に「蓮葉尚田田、淇水不可渡」(蓮葉 尚お田田とし、淇水 渡るべからず)とあり、同じく謝朓の「往敬亭路中」(同卷五)に「山中芳杜緑、江南蓮葉紫」(山中 芳杜は緑に、江南 蓮葉は紫なり)とある。前者は先の「江南」を踏まえ、恋人の男性が向かう南方の様子を詠う。「淇水 渡るべからず」とは、女性と一緒に歩いて行くことを願うがそれがかなわないことを言う。後者は江南(宣城郡)の風景を詠するなかに見える。

唐詩では盛唐から多くの用例が見え始める。王維「納涼」(趙注本卷四)に「貪餌凡幾許、徒思蓮葉東」(餌を貪る 凡そ幾許ぞ、徒らに思う 蓮葉の東)とあり、李白「姑孰十詠・丹陽湖」(王琦注本卷二二)に「龜遊蓮葉上、鳥宿蘆花裏」(龜は遊ぶ 蓮葉の上、鳥は宿る 蘆花の裏)とある。前者は前掲樂府「江南」古辞を踏まえた表現であり、後者は丹陽湖(唐代に宣州当塗県と溧水県の境界にあつた湖)の様子を詠じたなかに見える。

杜甫には用例がない。張籍にはこの他に一例、379「春別曲」(卷六)に「長江春水緑堪染、蓮葉出水大如錢」(長江の春水 緑染むるに堪え、蓮葉 水より出でて大なること錢の如し)とある。長江の川面に浮かぶ蓮を詠じている点、男女の別れを主題としている点でこの詩と共通する。「団団」は丸いさま。水面に浮いている蓮の葉の形状を言う。

古い用例は見当たらず、張衡「思玄賦」(『後漢書』張衡伝)に「志団団以応懸兮、誠心固其如結」(志 団団として以て懸くるに応じ、誠心は固くして其れ結ぶが如し)とあるのが早い例の一つ。李善注は『毛詩』(松風「素冠」)に「勞心団団」(勞心団団たり)とあるのを引くが、心の憂えるさまを言い、張籍と意味が異なる(なお、『文選』所収の「思玄賦」は「搏搏」に作り、「十三經注疏本」の『毛詩』は「搏搏」に作る。意味は同じ)。

このことと同じく丸い形状を表現する例としては、班婕妤「怨歌行」(『文選』卷二七)に「裁為合歡扇、団団似明月」(裁ちて合歡の扇を為り、団団として明月に似る)とあり、謝惠連「七月七日夜詠牛女五言」(『文選』卷三〇)に「団団滿葉露、析析振條風」(団団たり 葉に満つる露、析析たり 條を振る風)とある。前者は扇の丸い形を満月に喩えてたものであり、後者は葉の上の丸い露の様子を言う。陳注引く梁簡文帝「賦得詠當壚」(『玉臺新詠』卷七)に「十五正団団、流光滿上蘭」(十五 正に団団、流光 満ちて蘭に上る)とあるのは、満月の形状を言う。

唐詩では初唐から用例が見えるが、多くは唐以前の用例と同じく月や露を形容するか、夕日や太陽の形状を表すものである。張籍と同じく植物を形容する例としては、李白「古朗月行」(王琦注本卷四)に「仙人垂兩足、桂樹何団団」(仙人 兩足を垂れ、桂樹 何ぞ団団たる)とあり、月に生えている桂樹がこんもりと茂るさまを言う。中唐になると「団団」の形容する対象に広がりが見え、蚕の繭の形状を表現したり(王建「簇蚕辞」、激流に翻弄される舟から見上げた空を表現したり(韓愈「送靈師」)、点在する小山を形容したりする例(劉禹錫「畚田行」)が見られるようになる。この詩と同じく蓮の葉を形容した例としては、張籍と交流のあつた王建「主人故池」(『王建詩集』卷二)に「深池高閣相連起、荷葉団団蓋秋水」(深池 高閣 相連なり起り、荷葉団団として秋水を蓋う)とある。蓮の丸い葉が水面を覆う様子を表現する。

杜甫には一例、「薄游」(『詳注』卷一二)に「浙浙風生砌、団団日隱牆」(浙浙として 風は砌に生じ、団団として 日は牆に隱る)とあり、垣根に隠れる丸い太陽を形容する。張籍にはもう一例、40「促促詞」(卷一)に「願教牛蹄団団一角直、君身常在応不得」(牛蹄をして団団と 一角をして直からしめんことを願うも、君が身 常在に在るは 応に得ざるべし)とあり、現実にはあり得ないことの喩えとして、先端が二つに割れている牛の蹄が丸くなることを表現している。

「蓮葉団団」は、樂府「江南」の古辞にある「田田」(蓮の葉が水面に広がるさま)を「団団」に変えたものである。この二句が「江南」古辞を踏まえていることは先に記した通りだが、市川桃子氏「樂府詩『採蓮曲』の誕生」(『東方学』第八七輯、一九九四年。のち同氏『中国古典詩における植物描写の研究―蓮の文化誌―』汲古書院、二〇〇七年)によれば、「田田」は「魚戲」「江南」「採蓮」と並んで樂府「江南」古辞のキーワードということである。「田田」を「団団」に変えることで、春になり蓮の葉が丸く開いたことを表現するとともに、後に述べるように美しい女性を象徴させる意図や、男女が団円の良き時を迎えていることを暗示させる意図があつたと考えられる。

「荇葉拆」荇の葉が開く。「荇」は水草で、和名はアサザ。「拆」は葉が開くこと。「荇」は、古く『毛詩』周南「閟離」に「參差荇菜、左右流之」(參差たる荇菜は、左右に之を流む)と詠われている。毛伝に「荇、接余也」(荇は、接余なり)と言ひ、正義に引く陸機の疏(『毛詩草木鳥獸魚疏』)には「接余、白荇、葉紫赤色。正円径寸餘、浮在水上。根在水底、与水深淺等。大如釵股、上青下白」(接余は、白荇、葉は紫赤色。正円にして径は寸餘、浮かびて水

上に在り。根は水底に在りて、水の深淺と等し。大なること釵の股の如く、上は青く下は白し」とある。「閑睡」の続く二句には「窈窕淑女、寤寐求之」（窈窕たる淑女は、寤寐に之を求む）とあり、苜蓿が美しい女性の比喩として用いられていることがわかる。

「苜蓿」二字の熟語としては、唐以前では古い用例が見当たらず、梁の簡文帝「雍州曲三首」南湖（『玉臺新詠』卷七）に「南湖苜蓿浮、復有佳期遊」（南湖 苜蓿浮かび、復た佳期有りて遊ぶ）が見えるのみである。南湖の湖面の様子を言うなかに見える。唐詩にも「苜蓿」の用例はあまり多くはない。そうしたなか、盛唐の儲光羲「江南曲四首」其二（『全唐詩』卷一三九）に「逐流牽苜蓿、綠岸摘蘆苗」（流れを逐いて苜蓿を牽き、綠岸に蘆苗を摘む）とあり、鮑防「狀江南・孟春」（『全唐詩』卷三〇七）に「江南孟春天、苜蓿大如錢」（江南 孟春の天、苜蓿 大なること錢の如し）とあるのは、いずれも江南の風景を詠じたなかに見える。張籍と同時代の白居易「吳中好風景二首」其一（二二一九）にも「水苜蓿仍香、木蓮花未歇」（水苜蓿 葉は仍お香り、木蓮 花は未だ歇けず）とある。この句の前に「吳中好風景、八月如三月」（吳中 好風景、八月 三月の如し）とあるように、仲秋の江南の美しい風景として、良い香りを放つアサザが詠われている。

この詩と同じく苜蓿が蓮と一緒に用いられた例としては、謝朓「出下館」（『校注』卷三）に「紅蓮揺弱苜、丹藤繞新竹」（紅蓮 弱苜を揺らし、丹藤 新竹を繞る）とあり、阮研「擢歌行」（『樂府詩集』卷四〇）に「芙蓉始出水、綠苜葉初鮮」（芙蓉 始めて水より出で、綠苜 葉初めて鮮かなり）とある。前者は紅い蓮の花が動いたことで水面のアサザが揺れる様子を言い、後者は蓮と対比して瑞々しいアサザの葉を詠じている。

また、次句に詠われる魚と一緒に用いられる例として、梁の丘遲「侍宴樂游苑送張徐州序詔」（『文選』卷二〇）に「巢空初鳥飛、苜蓿亂新魚戲」（巢は空しくして 初鳥飛び、苜蓿 亂れて 新魚戯むる）とあり、樂游苑の池の様子を詠うなかに見える。唐詩でも、崔湜「唐都尉山池」（『全唐詩』卷五四）に「雁翻蒲葉起、魚撥苜蓿遊」（雁は翻りて 蒲葉に起ち、魚は撥ねて 苜蓿に遊ぶ）とあり、魚が花を付けたアサザのところで飛び跳ねる様子を詠っている。

「苜蓿」は梁代に入ってから多く詩中で用いられるようになる。江南を代表する風物の一つとして認識されていたようだ。

杜甫には「水苜蓿」が二例見えるが「苜蓿」はない。張籍の用例もこの一例のみであるが、「苜蓿」の例が259「送友人盧處士遊吳越」（卷四）に「試問漁舟看雪浪、幾多江燕苜蓿開」（試みに問う 漁舟より雪浪を看、幾多の江燕か 苜蓿開くとき）とあり、旅立つ友人が舟から見るであろう吳越の風景の

一つとして苜蓿の黄色い花が詠われている。

なお、テキストである『張籍詩集』（中華書局）は「苜蓿折」に作り、百家集本は「苜蓿折」に作る。「折」（折れる）であれば意味が通じにくく、かつこの文字だけ他の句末の文字と古詩通押の範囲を越えてしまう。ここでは字体が類似することから誤って書き記されたものと判断し、「折」（ひらく）で解釈した。

また、『樂府詩集』卷七一・『全唐詩』卷二六・卷三八二は「杏花折」（杏花 折く）に作り、静嘉堂本は「杏花折」に作る。

「杏花」はあんのずの花。樹木や果実としての杏は古くから經書の中にも登場するが、「杏花」の熟語としては古い用例が見当たらない。唐以前では王融「永明九年策秀才文」（『文選』卷三六）に「將使杏花苜蓿、耕種不愆、清冷風、述遵無廢」（將に杏花苜蓿をして、耕種 愆らず、清冷風、述べ遵いて廢する無からしめんとす）とある。杏の花が苜蓿の葉と並んで農耕の時期を知らせる植物として記される。詩の用例もほとんどなく、庾信「奉和永豐殿下言志詩十首」其六（『集注』卷四）に「興雲榆莢晚、燒薙杏花初」（興雲 榆莢の晩れ、燒薙 杏花の初め）とあるのは、杏の花の咲く二月に草を刈って焼く（燒薙）と、農作業を始める時期を詠っている。

唐詩では初唐から用例が見え、杜審言「晦日宴遊」（『全唐詩』卷六二）に「日晦隨萸莢、春情著杏花」（日晦 萸莢に隨い、春情 杏花に著く）とあり、王維「春中田園作」（趙注本卷三）に「屋上春鳩鳴、村邊杏花白」（屋上 春鳩鳴き、村邊 杏花白し）とある。前者は詩題に言う通り、晦日（旧暦で各月の最後の一日。この詩の場合、正月三十日）の宴遊を詠う中に見え、対比される萸莢も杏花と同じく時節や日にちを表す植物である。後者も農村の春の訪れを詠じるなかで杏花が詠われている。なお、同類の樂府である戴叔倫「新別離」（『樂府詩集』卷七二）に「手把杏花枝、未曾經別離」（手に杏花の枝を把りしは、未だ曾て別離を経ず）とあり、杏花の咲く二月の頃は、まだ恋人と別れてはいなかったのにと、次の二句に続く。

杜甫には「杏花」二字の熟語では用例がない。張籍には詩題も含めて五例見え、うち297「哭孟寂」（卷六）に「今日春光君不見、杏花零落寺門前」（今日の春光 君 見ず、杏花零落す 寺門の前）とあるのは、孟寂の死と杏花が散ることを重ねて表現している。この前の二句に「曲江院裏題名處、十九人中最少年」（曲江院裏 題名の處、十九人中 最も少年）と、孟寂が科擧の進士科の試験で最年少で登第したこととあることから、杏花は季節を表すとともに、合格者のために祝宴が開かれる曲江池の杏園の杏花のことを言っているであろう。

「杏花拆」の三字の並びでは、韋忠物「因省風俗訪道士怪不見題壁」(『校注』卷五)に「去年澗水今亦流、去年杏花今又拆」(去年の澗水 今亦た流れ、去年の杏花 今又拆く)とあり、沈千運「感懷弟妹」(『全唐詩』卷二五九)に「今日春暖、東風杏花拆」(今日 春暖かく、東風に 杏花拆く)とある。いずれも春景色として杏の開花が詠われている。

ここでは「荇葉拆」で解釈した。その根拠は、冒頭の二句が長江流域の風景を詠じている点で統一されていること、そしてそれら描かれる風物(蓮、荇、鯉魚)が、いずれも男女の恋愛に関係することの二点である。「杏」に作るテキストは、恐らくは「荇」と「杏」の音が同じであることで誤写され、それに基づいて「葉」が「花」に変化したものと考えられる。

〔長江〕言うまでもなく黄河と並んで中国を代表する川。しかし、二字の並びでは経書や先秦の諸子には見えない。

史書では『三国志』「魏書」護臻伝に「(孫)権恃長江、未敢抗衡」(孫)権は長江を恃み、未だ敢えて抗衡せず)とあり、堅固な自然の守りとして記される。文学作品では、陸機「漢高祖功臣頌」(『文選』卷四七)に「乗風藉響、高歩長江」(風に乗じ響きに藉り、長江に高く歩む)とある。漢の高祖の功臣・灌嬰の鋭敏さを記すなかに見える。

唐以前の詩の用例はあまり多くない。阮籍「詠懷詩十七首」其一七(『文選』卷二三)に「湛湛長江水、上有楓樹林」(湛湛たり 長江の水、上に楓樹の林有り)とあり、夏侯湛「江上泛歌」(『類聚』卷八)に「南荊兮臨長江、臨長江兮討不庭」(南荊 長江に臨み、長江に臨んで不庭を討つ)とあるのが古い用例である。前者は長江の水がゆったりと流れる様子を言い、後者は遠征して長江に臨み、朝廷に刃向かう輩を征伐すると言うなかに見える。

唐詩では初唐から多くの用例が見える。この詩と同じく魚と関連する例として、韋忠物「送張侍御秘書江左觀省」(『校注』卷四)に「沃野収紅稻、長江釣白魚」(沃野に紅稻を収め、長江に白魚を釣る)とあり、陳注引く李白「贈昇州王使君忠臣」(王琦注本卷一〇)に「巨海一辺静、長江万里清」(巨海 一辺静かに、長江 万里清し)とある。前者は江左の地に帰省する張某の帰省後の様子を詠うなかに見え、後者は詩題にある王忠臣が昇州(唐代は江南道に属した。今の南京の辺り)の刺史として当地をよく治めたことをこのように表現する。

晩年に長江流域を放浪した杜甫には多くの用例があり、一例として「登高」(『詳注』卷二〇)に「無辺落木蕭蕭下、不尽長江滾滾來」(無辺の落木 蕭蕭として下り、不尽の長江滾滾として來たる)とあるのは、杜甫が夔州に滞在していた時の作としてよく知られている。張籍にはこの他一例、379「春別曲」

(前掲)に「長江春水綠堪染、蓮葉出水大如錢」(長江の春水 緑 染むるに堪え、蓮葉 水より出でて 大なること錢の如し)とあり、この詩と同様「蓮葉」と一緒に用いられている。

〔鯉魚〕鯉。

この詩と同じく楽府作品に登場する例として、「飲馬長城窟行」(『文選』卷二七)に「客從遠方來、遺我雙鯉魚」(客 遠方より來たり、我に雙鯉魚を遺る)とある。鯉魚を煮ようとして腹を割いたところ夫からの愛情の籠もった手紙(尺素の書)が入っていたという有名な内容である。これ以降、唐以前の詩にもいくつか用例はあるが、必ずしも長江と関係があるわけではないようだ。

唐詩では盛唐から多くの用例があり、楽府「飲馬長城窟行」を踏まえて真心がこもった贈り物、或いは手紙の喩えとして詠われる例が多い。一例として、孟浩然「送王大校書」(『全唐詩』卷一六〇)に「尺書能不吝、時望鯉魚伝」(尺書 能く吝まされ、時に鯉魚の伝えんことを望む)とあり、別れた後に手紙をたびたび寄越すよう望むと詠っている。

杜甫には二例、いずれも手紙の意味で用いられている。一例として「寄高三十五詹事」(『詳注』卷六)に「天上多鴻雁、池中足鯉魚」(天上 鴻雁多く、池中 鯉魚足る)とある。上句の「鴻雁」も「雁書」の語があるように手紙の代名詞。張籍にはこの他にもう一例、426「泗水行」(卷七)に「泗水流急石纂纂、鯉魚上下紅尾短」(泗水 流急にして 石纂纂、鯉魚上下して 紅尾短し)とあり、泗水の鯉を詠じており、水が澄んでいるため尾の赤い色が見えることを表現している。

〔鰭鱗赤〕「鰭」は魚の背びれ、「鱗」は本来魚名であるが、ここでは「鬣」と同じ意味で用いられていると考えられ、その場合、魚のあごのそばにある小びれ。胸びれを言うのであろう。「赤」は、その色を言う。「鰭鱗」を『全唐詩』卷二六は「鰭鱗」、『全唐詩』卷三八二・百名家集本は「鬣鱗」に作るが意味はいずれも同じであろう。

二字の熟語としては古い用例が見当たらず、唐以前の詩にも用例がない。唐詩では張籍以外に三例あり、陳注引く李白「酬中都小吏攜斗酒双鱼於逆旅見贈」(王琦注本卷一九)には「雙鯉呀呷鰭鱗張、跋刺銀盤欲飛去」(雙鯉呀呷 鰭鱗張り、跋刺銀盤 飛び去らんと欲す)とある。皿の上に乗せられた生きた魚の様子を言うなかに見える。この他の二例は張籍と同時代の元稹と劉禹錫の用例であり、元稹「競渡」(『元稹集』卷二六)に「赤鱗化時至、唐突鰭鱗掀」(赤鱗 化して時に至り、唐突として 鰭鱗掀ぐ)とあり、劉禹

錫「競渡曲」(『箋証』卷二六)に「蛟龍得雨鬢鬣動、蟬蝻飲河形影聯」(蛟龍雨を得て 鬢鬣動き、蟬蝻河に飲みて 形影聯なる)とある。どちらも古代の楚の地方で風俗である競渡(競艇)を詠じており、前者は龍門の故事を踏まえて赤い鯉が龍に変化することを言い、後者は龍の飾りをつけた舟が水しぶきを上げて進む様子を詠じたものと思われる。

なお、鯉の色に関しては「赤鯉」という言葉があり、その多くが琴高の故事を踏まえる。琴高が冀州に浮遊すること二百余年、後に碣水に入り、赤鯉魚に乗ってやってきたが、一月して再び水の中に去っていったという内容である。『列仙伝』(琴高)に見える。左思「魏都賦」(『文選』卷六)に「琴高沈水而不濡、時乘赤鯉而周旋」(琴高水に沈んで濡れず、時に赤鯉に乗じて周旋す)とあるのはその故事を踏まえる。

杜甫「観打魚歌」(『詳注』卷一一)に「衆魚常才尽却棄、赤鯉騰出如有神」(衆魚は常才にして 尽く却棄し、赤鯉は騰出して 神有るが如し)とあるのは、直接琴高の故事を踏まえるわけではないが、漁師の網から抜け出す不思議な力がある(神有るが如し)というのは、赤い鯉の神秘的なイメージを踏まえていよう。張籍には426「泗水行」(前掲)に「泗水流急石纂纂、鯉魚上下紅尾短」(泗水流れ急にして 石纂纂、鯉魚上下して 紅尾短し)とあった。この場合、鯉魚に神秘的なイメージはなく、泗水の澄んだ流れを表現するために「紅」の字が用いられているようだ。

陳注は『毛詩』周南「汝墳」に「魴魚赭尾、王室如燬」(魴魚赭尾、王室燬くが如し)とあるのを引き、「蓋魚勞則尾赤。人勞役則顔色變。此師其意者」(蓋し魚勞れば則ち尾赤し。人 役に勞れば則ち顔色變ず。此れ其の意を師とする者なり)と述べて、張籍のこの詩句が「汝墳」を手本にしていると説明する。毛伝に「赭、赤也。魚勞則尾赤」(赭は、赤なり。魚勞るれば則ち尾赤し)とあり、鄭箋に「君子仕於乱世、其顔色瘦病、如魚勞則尾赤。所以然者、畏王室之酷烈。是時紂存」(君子 乱世に仕えて、其の顔色瘦病するは、魚勞すれば則ち尾赤きが如し。然る所以は、王室の酷烈なるを畏る。是の時 紂存す)とある。陳注では、冒頭の二句を「比語なり」(比喻である)と言い、それを受けて李建崑注も「起首は、比興の語」と述べる。2句が、旅に出た夫の疲弊ぶりを喩えたものと解釈している。

ここでは、体全体が赤い鯉(緋鯉)ではなく、やはり「汝墳」詩を踏まえて体の一部である鰭が赤くなった鯉を詠っていると解釈した。

以上、冒頭の二句は、次句以降に詠われている若い夫婦の置かれる何らかの状況を蓮葉、荇葉、鯉に重ねているのであろうが、それが具体的に何を表しているのか明確には定めがたい。ここでは1句の蓮の葉や荇の葉が若く美

しい女性(妻)を象徴し、鰭の赤くなった鯉が、苦勞しながら旅を続ける男性(夫)を象徴していると解釈した。季節は春が想定されているのであろう。男女が楽しく過ごす一年で最も良い季節であるにもかかわらず、若妻は夫と離ればなれに暮らしている。

この二句を解釈する上で参考になるのは、邱遲「敬酬柳僕射征怨詩」(『玉臺新詠』卷五)に見える「魚戲雖南北、終還荷葉辺」(魚は戯る 南北すと雖も、終に荷葉の辺りに還る)である。南へ北へと泳いで回る魚も、最後は蓮の葉の周りに戻ってくるのと詠っており、この後に続く二句に「惟見君行久、新年非故年」(惟だ見る 君が行の久しきを、新年は故年に非ず)とあることからわかるように、前二句は出征して久しく戻らない夫を魚に、家で帰りを待つ妻を荷(蓮)の葉に喩えて、出征からの夫の帰還を願う妻の思いを詠じている。「魚戲」「荷葉」とあるのは、明らかに樂府「江南」の古辞(前掲)を踏まえている。六朝期、「江南」の「魚戲蓮葉間、魚戲蓮葉東」(魚は戯むる 蓮葉の間、魚は戯むる蓮葉の東)が、仲の良いカップルが睦まじく遊ぶ様子を象徴していると解釈されていたということであろう。張籍の二句も、夫婦関係にある若い男女を象徴していると考えられる。

なお、この詩と同じく冒頭の二句に詩中の女性の境遇や心情を象徴するような風景が詠われる例として、張籍3「雜怨」(卷一)に「切切重切切、秋風桂枝折」(切切 重ねて切切、秋風に 桂枝折る)とあった。旅に出た夫から嫁ぎ先に取り残された妻が、帰るあてのない夫を待つて舅・姑と暮らす悲劇を詠っており、吹きすさぶ秋風に女性の置かれた厳しい現実が、風に折られる桂枝に女性自身が重ねられている。

3・4 念君年少棄親戚、千里万里独為客

〔念君年少棄親戚〕「念君」は樂府作品に頻出する言葉であり、これまで見てきた張籍の詩にも見えた。一例として、33「車遥遥」(卷一)に「山川無処不歸路、念君長作万里行」(山川 処として歸路ならざるは無し、念う君が長く万里の行を作すを)とあった。その【語釈】を参照。

「年少棄親戚」は、年若くして身内である私を棄てて、の意。「年少」は若者で、年齢が若いことを言う。詩文に常見の語。詩に限っていくつか用例を挙げれば、唐以前では、漢代の樂府「相逢行」古辞(『樂府詩集』卷三四)に「不知何年少、夾轂問君家」(知らず 何れの年少ぞ、轂を夾んで君が家を問う)とあるのを初めとして、樂府作品に多く用いられるようだ。唐詩の用例も初盛唐の頃から多く見え、李白「少年行二首」其二(王琦注本卷六)に「五陵年少金市東、銀鞍白馬度春風」(五陵の年少 金市の東、銀鞍

馬 春風を度る^{わた}とある。

杜甫にも七例見え、うち「少年行二首」其二(『詳注』巻一〇)に「黄衫年少来宜数、不見堂前东逝波」(黄衫の年少 来たること宜しく数しばすべし、見ずや 堂前 東逝の波を)とあるのは楽府作品で用いられた例。貴族の子弟を指して言う。張籍にはここを含めて四例あり、13「猛虎行」(巻一)に「五陵年少不敢射、空来林下看行迹」(五陵の年少 敢えて射ず、空しく林下に来たりて行迹を見る)とあった。

「親戚」は血縁あるいは婚姻関係を結んだ者。この詩の場合後者で、この詩の語り手である妻自身を直接には指している。張籍24「傷歌行」(巻一)に「出門無復部曲随、親戚相逢不容語」(門を出るに 復た部曲の随う無く、親戚 相逢うも 語るを容れず)とあった。その【語釈】を参照。またそこで挙げた用例以外では、王粲「從軍詩五首」其二(『文選』巻二七)に「征夫懐親戚、誰能無恋情」(征夫 親戚を懐う、誰か能く恋情無からんや)とあり、出征兵士が故郷の家族を懐かしく思う気持ちを詠うなかに見える。

「棄」は、何の未練も抱かずに妻である自分を棄てて旅立っていくこと。このこと類似した表現に、「古詩八首」其七(『玉臺新詠』巻一)に「念子棄我去、新心有所歡」(念う 子が我を棄てて去り、新心 歡ぶ所有らんこと)とある。この場合、男女の別れではなく親友との別れを言うようである。男性からの愛を失うことをこの字で表現した例としては、これまでの張籍の詩にも見えた。張籍25「吳宮怨」(巻一)に「白日在天光在地、君今那得長相棄」(白日 天に在りて 光 地に在り、君 今 那ぞ長えに相棄つるを得んや)とあり、29「白頭吟」(巻一)に「春天百草秋始衰、棄我不待白頭時」(春天の百草 秋 始めて衰うるに、我を棄つること 白頭の時を待たず)とある。二首とも寵愛を失った宮女の嘆きを詠ずる。また、442「離婦」(前掲)に「念君終棄捐、誰能強在茲」(君が終に棄捐するを念う、誰か能く強いて茲に在らんや)とあるのは、詩題に言うように離縁された妻の嘆きを詠じた詩に用いられている。

このこと類似した表現に、同類の楽府である吳邁遠「長別離」(『玉臺新詠』巻四)に「如何与君別、当我盛年時」(如何ぞ 君と別るる、我が盛年の時に当たるを)とあり、盛りの年でありながら夫と別れなければならぬ妻が詠われている。張籍の場合、それよりもまだ若い年少の時に夫から棄てられることを詠う。年若い妻が棄てられるという設定は、張籍の3「雜怨」(前掲)に「人当少年嫁、我当少年別」(人 少年に当たりて嫁するに、我 少年に当たりて別る)とあり、29「白頭吟」(前掲)の二句「春天百草秋始衰、棄我不待白頭時」(春天の百草 秋 始めて衰うるに、我を棄つること 白

頭の時を待たず)とあった。

「千里万里」千里、万里のかなた。夫の遠方への旅を表現する。

「千里」「万里」別々の熟語としてはそれぞれ古くから用例がある。男女の別れに限って用例を挙げれば、柳惲「擣衣詩」(『玉臺新詠』巻五)に「不怨杼軸苦、所悲千里分」(杼軸の苦しみを怨まず、悲しむ所は千里分かるを)とあり、機織りは苦にならないが、千里の別れは悲しいと詠われている。

梁武帝「織婦詩」(『玉臺新詠』巻七)に「良人在万里、誰与共成匹」(良人万里に在り、誰と与にか共に匹を成さん)とあるのは、夫が万里の彼方にいる以上、機織りをする必要はないと詠っている。

四字の並びでは盛唐の頃から用例が見え始めるようだ。王維「榆林郡歌」(『趙注本卷六』)に「千里万里春草色、黄河東流不息」(千里万里 春草の色、黄河東流して 流れ息まず)とあり、韋応物「送馮著受李広州署為録事」(『校注』巻四)に「如何從此去、千里万里期」(如何せん 此従り去りて、千里 万里に期するを)とある。前者は榆林郡全体に春が訪れたことを言い、後者は広州に去っていく馮著と再会が難しいことを言う。

四字の並びでは杜甫に用例はない。張籍の用例もこの一例のみであるが、類似した表現に196「喜王起侍郎放牒」(巻四)に「二十八人初上牒、百千里尽伝名」(二十八人 初めて牒に上り、百千里 尽く名を伝う)とある。官職を授与する文書がはるか遠くに在る者にまで届くことをこのように表現する。

「独為客」一人で旅をする。

三字の並びでは唐代以前の用例が見当たらない。魏文帝「陌上桑」(『宋書』樂志)に「棄故郷、離室宅、遠從軍旅万里客」(故郷を棄て、室宅を離れ、遠く軍旅に従いて万里の客たり)とあるのは、三句に見えた「棄」、先に見た「万里」の語が「客」とともに使われている例である。

三字の並びでは、唐詩では張籍以外では李白「淮南臥病書懷、寄蜀中趙徵君蕤」(王琦注本卷一三)の冒頭二句に「万里無主人、一身独為客」(万里 主人無く、一身 独り客と為る)とあるのが唯一の例であり、「万里」という言葉とともに用いられている(ただし、この二句は一作として伝わる異文である)。張籍にはもう一例、450「別段生」(巻七)に「幼年独為客、挙動難為宜」(幼年 独り客と為り、挙動 宜しきを無し難し)とある。詩題の段生が幼年で故郷を離れたことを言う。

以上、この二句は、年若くして妻である自分を棄てて遠く旅に出る夫を怨

めしく思う気持ちを詠じている。夫が若いと言うことは妻も同じように若いことを意味しており、そのことが女性の境遇の悲劇性をさらに強める効果をもたらしている。

5・6 誰言遠別心不易、天星墜地能為石

〔遠別〕遠く別れる。

蘇武の作として伝わる「詩四首」其二(『文選』卷二九)に「黄鵠一遠別、千里顧徘徊」(黄鵠 一たび遠く別れ、千里 顧みて徘徊す)とあり、また同詩の其四には「良友遠離別、各在天一方」(良友 遠く離別し、各おの天の一方に在り)と、「遠離別」の語が見える。いずれも李陵との別れを詠っている。【題解】に挙げた張華「情詩二首」其二(前掲)に「不曾遠別離、安知慕儔侶」(曾て遠く別離せずんば、安んぞ儔侶を慕うを知らんや)とあるのは、遠い旅に出た夫を思う妻の心情を詠い、張籍の詩と共通する。

唐詩にも初唐から多くの用例が見える。張九齡「送使広州」(『全唐詩』卷四八)に「因声謝遠別、縁義不縁名」(声に因りて 遠別に謝す、義に縁りて名に縁らず)とある。

杜甫には一例、「遠懷舍弟穎觀等」(『詳注』卷二一)に「積年仍遠別、多難不安居」(積年 仍お遠く別れ、多難 居に安んぜず)とあるのは、弟の穎や觀と遠く離ればなれになっていることを言う。

〔遠別離〕三字の並びについては【題解】を参照。

〔心不易〕心変わりしない。

〔易心〕の語が、三国魏の曹冏「六代論」(『文選』卷五二)に「天下所以不能傾動、百姓所以不易心者……」(天下の傾動する能わざる所以、百姓の心を易えざる所以は……)とあり、また、張華「女史箴」(『文選』卷五六)に「志厲義高、而二主易心」(志厲しく義高くして、二主は心を易う)とある。前者は民衆の信頼を失わないという文脈で使われており、後者は夫人の徳によって君主の心を改めさせたと述べる。唐以前の詩の用例としては、呉隱之「酌貪泉賦詩」(『世説新語』德行篇注所引「晋安帝紀」)に「試使夷齊飲、終当不易心」(試みに夷齊をして飲ましむるも、終に当に心を易えざるべし)とあるのが唯一の例であり、飲めば貪欲になると言う貪泉の水であっても、清廉潔白な自分の心は変わらないと詠う。

唐詩では「心易々」(心がしやす)の用例は多いが、「易」を動詞「かわる」の意味で用いる例はほとんどない。「易心」は、唐詩に一例、皎然「桃花石枕歌、贈康從事」(『全唐詩』卷八二二)に「更有堅貞不易心、与君天下

為士則」(更に堅貞の心を易えざる有り、君と天下に士則を為さん)とあり、堅固な貞節の心を変えないと詠われる。

〔天星墜地能為石〕天上に輝くあの星も、地上に落ちてただの石ころとなることもある。永遠を誓った愛も、時がたてば変わってしまうと、男性の心変わりの可能性を喩えた奇抜な表現である。

男女の恋愛の喩えとして天上の星が詠われる場合、北極星が、決して変わることはない真心の喩えとして用いられる。陸雲「為顧彦先贈婦往返詩四首」其三(『玉臺新詠』卷三)に「何用結中款、仰指北辰星」(何を用てか 中款を結ばん、仰ぎて指す 北辰星)とあり、「子夜歌四十二首」其三六(『樂府詩集』卷四四)に「儂作北辰星、千年無轉移」(儂は作す 北辰星、千年 転移すること無し)とある。いずれも変わらぬ心を北辰星(北極星)に重ねている。張籍の表現は、こうした六朝期に見られる表現を踏まえつつ、新奇性を出すために、星を「男性の心変わり」を表現する意味で使っている。

なお、天上の星が地上に落ちて石となるという話は古くから史書に記載があり、それらは地上で起こる出来事の予兆として考えられていたようだ。例えば、『春秋』僖公十六年の「左伝」に「十六年春、隕石于宋五、隕星也」(十六年春、宋に隕石あり 五つ)とは、隕星なり)とあり、『史記』秦始皇本紀にも「有墜星下東郡。至地為石。黔首或刻其石曰、「始皇帝死而地分」(墜星の東郡に下る有り。地に至りて石と為る。黔首 或ひと其の石に刻みて曰く、「始皇帝死して地分かたる」と)とある。張籍の場合、そうした予兆としての意味はなく、およそ変わるはずのないものでさえも変化するという意味の例として用いているのであろう。

〔天星〕は夜空にかかる星。古く『周礼』春官「保章氏」に「保章氏、掌天星。以志星辰日月之變動、以觀天下之遷、辨其吉凶」(保章氏は、天星を掌る。以て星辰日月の變動を志し、以て天下の遷を觀、其の吉凶を辨ず)とあり、日月星辰の動きを見て地上の変化を予測する保章氏という官職があったことを記す。また、『漢書』天文志には、「元光中、天星尽揺。上以問候星者。对曰、「星揺者、民勞也」。後伐四夷、百姓勞于兵革」(元光中、天星 尽く揺れたり。上 以て星を候う者に問う。对えて曰く、「星揺るるは、民勞るるなり」と。後 四夷を伐ち、百姓 兵革に勞る)とあり、保章氏と同様に星の動きを見て人界の變動を予測する役人がいたことが記される。

文学作品では、唐以前にあまり用例がない。揚雄「羽獵賦」(『文選』卷八)に「渙若天星之羅、浩如瀟水之波」(渙たること天星の羅なるが若く、浩たること瀟水の波の如し)とあるのは、狩獵を行う兵士たちの様子を天上の星に喩えた例。唐以前の詩の用例はほとんどないが、庾信「和張侍中述懷詩」

〔集注〕卷三には「成群海水飛、如雨天星落」(群を成して 海水は飛び、雨の如く 天星は落つ)とあるのは、梁国を襲った侯景の乱や西魏の侵攻の予兆として天上の星が雨のように落ちてきたと詠っている。

唐詩では初唐から用例が見え、駱賓王「從軍行」(『全唐詩』卷七八)に「野日分戈影、天星合劍文」(野日 戈の影を分かち、天星 劍の文に合す)とあり、李白「上皇西巡南京歌十首」其七(王琦注本卷八)に「錦水東流繞錦城、星橋北挂象天星」(錦水東流して 錦城を繞り、星橋北に挂かりて 天星に象る)とある。前者は天上の星の光が兵士の劍に映って紋様のように見えることを言い、後者は昔、蜀の地にあつた七星橋が天上の七つの星に象っていることを言う。

杜甫には用例がない。張籍もこの一例のみ。

以上この二句は、天上の星も地上に落ちてただの石となることもあると奇抜な表現を用いて、男性の心変わりを心配する妻の切ない心情が詠われている。

7・8 幾時断得城南陌、勿使居人有行役

〔幾時〕いつ。詩文に常見の語。一例として、漢の武帝「秋風辞」(『文選』卷四五)に「少壯幾時兮奈老何」(少壯幾時ぞ 老いを奈何せん)とあるのは、若く盛んな時間(期間)を尋ねている。唐以前の詩の用例では「どれくらい」と時間の長さを尋ねる用例がほとんどのようだが、唐詩では「いつ」の意味でも多く用いられるようになる。張籍14「別離曲」(卷一)に「行人結束出門去、幾時更踏門前路」(行人結束して 門を出でて去る、幾時か更に踏む 門前の路)とあるのは「いつ」の意味であり、出征した夫の帰りを待つ妻の言葉のなか見えこの詩と類似する。

〔断得〕断ち切ることができる。

二字の並びでは、唐以前の詩文に用例が未見。唐詩には中唐からいくつかが用例が見える。王建「太和公主和蕃」(『王建詩集』卷九)に「琵琶淚湿行声小、断得人腸不在多」(琵琶 涙湿いて 行くゆく声は小なるも、人の腸を断じ得るは 多に在らず)とあるのは、回紇(ウイグル)に嫁した太和公主の悲しみが琵琶の音に重ねられている様子を言う。

〔城南陌〕街の南を通る街道。ここでは次句の内容から、夫が旅に出ていく時に通る道として詠われている。

〔城南〕は街の南。楽府系の作品や閨怨詩においては「美人・思婦のいる場所」というイメージがある。漢代の楽府「艶歌羅敷行」(『宋書』樂志。一名「陌上桑」)に「羅敷喜蚕桑、采桑城南隅」(羅敷 蚕桑を喜び、桑を采る 城南の隅に)とあるのは、州の長官に誘惑される美女・羅敷を詠ったものであり、また、曹植「美女篇」(『文選』卷二七)に「借問女安居、乃在城南端」(借問す 女 安にか居ると、乃ち城南端に在り)とあるのは、結婚相手を探しているものなかなか意中の男性に巡り会えない美人が住む場所として詠われている。傅玄「艶歌行」(『樂府詩集』卷二八)は「艶歌羅敷行」を踏まえて羅敷が登場するが、「問女居安在、堂在城南居」(女に問う 居は安く在るか、堂は城南に在りて居る)とあるように、ここでも羅敷の住む場所として城南が詠われている。また、梁の柳惲「起夜来」(『玉臺新詠』卷五)には「城南断車騎、閨道覆清埃」(城南 車騎を断ち、閨道 清埃に覆わる)とあり、劉孝威「都兕遇見人織率爾寄婦詩」(『玉臺新詠』卷八)に「城南稍可期、想子亦劳思」(城南 稍く期有り、想う 子が亦思いを劳せんことを)とある。前者は妻が夫の帰りを待っている夜の様子を詠うなかに「城南」の語が見え、後者は城南で自分の帰りを心配しながら待つ妻を思い詠うなかに見える。

唐詩の用例も非常に多い。そのなかで美女や思婦と結びつく用例を挙げると、宋之問「江南曲」(『全唐詩』卷五二)に「妾住越城南、離居不自堪」(妾は住む 越城南に、離居 自ら堪えず)とあり、吳少微「怨歌行」(『全唐詩』卷九四)に「城南有怨婦、含情傍芳叢」(城南に怨婦有り、情を含んで 芳叢に傍う)とある。喬知之「下山逢故夫」(『全唐詩』卷八一)に「妾身本薄命、輕棄城南隅」(妾身 本薄命、輕く城南の隅に棄てらる)とあるのは、夫に棄てられた女性を詠っている。また、令狐楚の同題樂府二首其二(『全唐詩』卷三三四)に「畏人相問著、不擬到城南」(人の相問い著くを畏れ、城南に到るを擬らず)とあるのは、「艶歌羅敷行」の使君が羅敷に声を掛けた故事を踏まえて、人に誘われるのをおそれて「城南」に行こうと思わないと詠う。

張籍の8句には旅に出る女性の夫(居人)が詠われているが、高適「燕歌行」(『全唐詩』卷二二三)に「少婦城南欲断腸、征人薊北空回首」(少婦 城南 腸を断たんと欲し、征人 薊北 空しく首を回らす)とあり、杜甫「洗兵馬」(『詳注』卷六)に「淇上健兒歸莫懶、城南思婦愁多夢」(淇上の健兒 帰るに懶ること莫かれ、城南の思婦 愁いて夢多し)とあるのは、いずれも戦地に出かけた夫と、夫を待つ城南の思婦を対比して詠っている。

〔城南陌〕の三字の並びでは、唐以前に用例は見当たらない。唐詩では、崔顥「渭城少年行」(『全唐詩』卷一三〇)に「揚鞭走馬城南陌、朝逢駛使秦

川客」（鞭を揚げ馬を走らす 城南の陌、朝に馭使に逢う 秦川の客）とあり、戴叔倫「奉天酬別鄭諫議盧拾遺景亮見別之作」（『全唐詩』卷二七三）に「昔去城南陌、各為天際客」（昔 城南の陌を去り、各おの天際の客と為る）とある。前者は洛陽城南の道を馬で疾走する様子を詠い、後者は鄭雲達・盧景亮の二人が、朱泚の乱により徳宗のいる奉天にやってきていることを詠っている。この二例の場合、女性の居場所という意味はないようだ。

〔居人〕家の住人。ここでは夫を指す。

張籍2「西州」（卷一）に「胡騎来無時、居人常震驚」（胡騎 来るに時無く、居人 常に震驚す）とあり、吐蕃の騎兵の侵入におびえる西州の住民の姿が詠われていた。その【語釈】を参照。ここでも用例として挙げたが、古く『毛詩』鄭風「叔于田」に「叔于田、巷無居人」（叔 于きて田す、巷に居人無し）とあり、詩序によれば、国君の弟が軍勢を率いて狩りに出かけ、国中の人がそれに付き従うのを批判した内容である。本来家にいるべき人が狩猟の場に連れ出されるというニュアンスがあるようだ。

唐以前の詩では、陸機「於承明作、与士龍」（『文選』卷二四）に「婉嬖居人思、紆鬱遊子情」（婉嬖たり 居人の思い、紆鬱たり 遊子の情）とあり、鮑照「東門行」（『文選』卷二八）では「居人掩閨臥、行子夜中飯」（居人は閨を掩いて臥すも、行子は夜中に飯う）とある。いずれも家に残る者と旅人を対比して詠っている。また、江淹「別賦」（『文選』卷一二）にも「居人愁臥、惘若有亡」（居人 愁い臥し、惘として亡う有るが如し）とあり、別れに際して旅人を見送る者を指して言う。以上の例からわかるように、旅人と対比される居人は本来家にいるべき人であり、張籍の場合、その人が旅に出ると言うことによって、女性にとつてそうした事実が極めて不自然で不条理であることを表現する。

唐詩の用例も初唐から見え、楊炯「送鄭州周司空」（『全唐詩』五〇）に「居人下珠淚、賓御促驪歌」（居人 珠の涙を下し、賓御 驪歌を促す）とあり、王維「桃源行」（趙注本卷六）に「樵客初伝漢姓名、居人未改秦衣服」（樵客 初めて伝う 漢の姓名、居人 未だ改めず 秦の衣服）とある。前者は見送る側の楊炯を指して言い、後者は桃源郷の住人を指している。

杜甫には四例、一例として「送樊二十三侍御赴漢中判官」（『詳注』卷五）に「居人莽牢落、遊子方迢遞」（居人 莽として牢落とし、遊子 方に迢遞たり）とあるのは、旅立つ樊某に対して居残る杜甫自身を対比して言う。張籍には先の2「西州」以外にもう一例、175「徐州試反舌無声」（卷三）に「居人宜寂寞、深院益凄清」（居人 宜しく寂寞たるべし、深院 益ます凄清たり）とあり、林の奥深くの建物に住む人を指して言う。

〔行役〕兵役による出征や公務による旅、あるいは一般の旅を指す。

古く陳注も引く『毛詩』魏風「陟岵」に「嗟予子、行役夙夜無已」（嗟予が子、役に行きて夙夜已むこと無けん）とあるのは、戦争のために出征することを言う。唐以前の詩の用例としては、蘇武「詩四首」其三（『文選』卷二九）に「行役在戰場、相見未有期」（行役して戰場に在り、相見ること未だ期有らず）とあり、陶淵明「庚子歲五月中從都還阻風於規林詩二首」其二（四部叢刊本卷三）に「自古歎行役、我今始知之」（古より行役を歎ずるも、我 今始めて之を知る）とある。前者は出征の意味で用いられており、後者は単なる旅を指している。また、柳惲「搗衣詩」（『玉臺新詠』卷五）に「行役滯風波、遊人淹不歸」（行役 風波に滞り、遊人 淹しく歸らず）とあるのは、理由はわからないが、旅に出て長い間帰ってこない夫のことを詠うなかに見える。

唐詩の用例も初唐から多く見える。張九齡「南陽道中作」（『全唐詩』卷四七）に「眇默遵岐路、辛勤弊行役」（眇默として 岐路に遵い、辛勤して行役に弊る）とあり、李白「擬古十二首」其一（王琦注本卷二四）に「閨人理紈素、遊子悲行役」（閨人 紈素を理め、遊子 行役を悲しむ）とあり、前者は公務による張九齡自身の旅を言い、後者は事情はわからないが苦しい旅を続ける男を詠っている。

杜甫には四例あり、一例として「發同谷界」（『詳注』卷九）に「奈何迫物累、一歲四行役」（奈何ぞ 物累に迫られて、一歲に四たび行役するや）とあるのは、妻子のために一年で四度も旅をすることになったと詠う。張籍にはこの他二例、448「懷友」（卷七）に「人生有行役、誰能如草木」（人生に行役有り、誰か能く草木の如からん）とあり、450「別段生」（前掲）に「行役多疾病、頼此相扶持」（行役 疾病多きも、此に頼りて 相扶持せよ）とある。いずれも出征や公務による旅ではなく、一般の旅を指すようである。この詩との表現の類似が見られる3「雜怨」（前掲）に「念君非征行、年年長遠途」（念う 君が征行するに非ざるに、年年 長遠の途にあるを）とあるのは、出征でもないのに長旅をする夫をなじる気持ちで詠われている。この詩の場合も、冒頭の二句で旅に疲れる夫を心配する気持ちを詠いながら、帰ってこない夫をなじる複雑な若妻の気持ちが詠われている。

なお、静嘉堂本は誤って「役行」に作っている。

この詩は、同題楽府や同類の楽府と同じように、男女が遠く別れた後の状況を詠っているのか、それとも「いつになったら（幾時）城南の街路を断絶できるのか」と未来のことを詠うこの末二句を根拠として、別れる前のこと

を詠っているのか、厳密に判断することが難しい。詩の前半四句は普通に読めば別後のことを詠っていると解釈でき、そうすると末二句と時間的に矛盾してしまう。このことは、夫がどのような理由で旅に出るのが具体的に詠われていないことも関係していよう。

張籍の主眼は、夫を旅に行かせたくない妻の強い思いを詠うことにあり、その結果として夫の立場や二人の状況が厳密には解釈できないことにつながる。その結果としてはなからうか。そして夫の旅の状況や詠われている時間（いつの時点で場面が設定されているのか）が曖昧にされることよって、この詩の若妻の強い思いが、若妻個人の思いから同様の境遇にある女性全体の悲しみへと普遍化されているように思う。

なお、陳注は、前述の通り『毛詩』魏風「陟岵」を引いており、「行役」を出征のための旅の意味で解釈したと考えられる。「城南陌」の【語釈】で示したように、「城南」には採桑の美女や、採桑に限らず美女のいる場所としてのイメージ、出征やその他の旅に出た夫を待つ女性のいる場所、さらには男性が出征する場所といったイメージがあり、この詩の夫も出征のために旅出していくという意味で解釈することも可能であろう。ただし、この夫は妻を「棄」てて「独り客と為」って旅に出るわけであるから、強制的にその他の兵士とともに戦地に連行されるわけではなく、自ら進んで戦地に赴く若者ということになる。

その場合、恐らくは「少年行」に出てくるような、功績を上げるためにあちこちの戦場に駆けつける若者がイメージされるであろう。「行役」を出征の意味で解釈する場合、末二句はひっきりなしに戦地に赴く夫を、次に戻ってきた時には二度と行かせたくないという妻の心情を表現しているものと考えられる。そのように考えると、4句「千里万里」とあるのは、直線的にどんどん進んでいくというよりは、「この前は千里のあなたに戦争に出かけ、その次は万里のあなたに戦争に出かけ」というようなニュアンスとなるであろうか。

なお、この詩のように、愛する人が遠く旅立つのを阻止しようとする非現実的な願いを詠う例は、張籍以前の同題および同類の楽府には見ることほくきず、ほとんどは男性の不在を嘆くか、帰りをじっと待ち続けるだけの受け身の女性である。そうしたなか、異なる楽府題であるが劉宋の武帝「丁督護歌二首」其一（『玉臺新詠』巻一〇）に「願作石尤風、四面断行旅」（願わくは石尤の風と作りて、四面 行旅を断たん）とあるのは、大風となつて四方に旅立つのを阻止しようとする女性の思いが詠われており、この詩とやや類似する。ただ、張籍の詩のように、街路を寸断するという強烈な発想ではなく、類似したテーマで詠われた六朝期の詩から大きく外れるものではない。

むしろこうした女性の思いの激しさは、古い民歌を意識したものと思われる。これについては【補】で詳しく述べたい。

以上、末尾のこの二句は、いつになつたら夫が出征する際に通る街道を断絶できるのかという非現実的で誇張された表現を用いることで、夫を是が非でも旅に行かせたくないという妻の強い思いを表現し詩を結んでいる。

【補】

一 張籍「遠別離」の構成

この詩は毎句押韻となつており、途中換韻はない。内容的にも一篇を通じて女性の独白であり、途中に場面の転換などはないが、歌い出しの二句だけは他の句とやや異なり、この詩の男女の関係を長江流域の春景色を用いて象徴的に詠っているようである。

- 1・2 夫婦の状態を象徴する長江の春景色
- 3・8 妻の切実な思い
- ① 3・4 自分を棄てて旅に出る夫
- ② 5・6 夫の心変わりに対する心配
- ③ 7・8 夫を行かせたくない強い願い

二 張籍「遠別離」の特徴

張籍「遠別離」の最も大きな特徴は、旅に出ればかりで自分を顧みようとしない夫をなじる気持ちが強烈に表現されている点であろう。その表現の特徴とは、①奇抜な比喻と、②非現実的な誇張の二点にある。

①奇抜な比喻

奇抜な比喻は、夫の心変わりを心配する女性の心情を詠った5・6句に見える。恐らくは旅立つときに夫が、旅に出てもお前のことを忘れないよと女性に向かつて言ったのだろう。しかし、女性はいくら固い愛を約束してもそれが現実的には難しいことを、天上に輝くあの星でさえも地上に落ちてたまたまの石ころとなることもある、という喩えを用いて表現している。

【語釈】にも記したように、詩のなかで夜空の星が男女の恋愛を表現する場合は、他の星と異なり時間が経過してもその位置を変えない北極星（北辰星）が、変わらぬ愛情の喩えとして使われるのが一般的であった。張籍はそうした従来からある表現を念頭に置きつつ、それとは正反対に、男性の心変わりを表現する意味で夜空の星を用いている。

男性の心変わりを表現するならば、それこそ他にも様々な表現が可能であつたろうが、それを新奇性の強い比喩表現を用いて詠っている点が張籍の特徴であろう。こうした特徴は、これまで見てきた張籍のその他の楽府にも見られた特徴で、同じく寵愛を失った女性（宮女）の嘆きを詠じた29「白頭吟」（巻一）では、二度と戻らない君恩（寵愛）を菖蒲の花を用いた新奇な比喩を用いて表現していた。それが女性の悲哀に個別性をもたらし、リアリティを感じさせる効果を挙げていることについては【補】で詳述した。

②非現実的な誇張

非現実的な誇張表現は、結びの7・8句に見える。いつになったら城南の街路を寸断できるのかと詠う箇所には、是が非でも夫を旅立たせたくない妻の強烈な思いが表現されている。

この二句は、直接的には李白「遠別離」の結びに「蒼梧山崩湘水絶、竹上之淚乃可滅」（蒼梧山崩れて 湘水絶えなば、竹上の涙 乃ち滅すべし）とあるのを参照して詠われていると考えられる。李白「遠別離」は、【題解】に記した通り、堯の二人の娘である娥皇と女英の死を悼む内容であり、全編に渡って堯・舜や二妃にまつわる故事が用いられている。「蒼梧の山が崩れ、湘水が干涸らびたならば、竹の上に残る涙の跡はやつと消えるだろう」とは、要するに現実にはあり得ない自然現象を想定することで、二妃が舜帝の死を恨めしく思う気持ちが非常に強いことを詠う。張籍の誇張表現もこれを参考にして詠われたのであろう。

現実的には起こり得ないことを敢えて想定する発想は、実は古い民歌に見られる手法である。例えば、漢の短簫鏡歌の一篇である有名な「上邪」（『宋書』樂志所収のものは「上邪曲」に作る）は、漢代の民歌の影響が強く現れているが、愛する男性との永遠の愛を願う強い思いが、非現実的な誇張表現によって詠われている。

上邪

上邪

我欲与君相知

我君と相知り

長命無絶衰

長命 絶え衰うること無からしめんと欲す

山無陵 山に陵わか無く
 江水為竭 江水 竭つくるを為し
 冬雷震震 冬雷 震震とし
 夏雨雪 夏には雪雨り
 天地合 天地合し
 乃敢与君絶 乃ち敢えて君と絶わかれん

山が平地になり、長江の水が干上がり、冬に雷がなり、夏に雪が降り、天と地が一つになる時が来たら、はじめてあなたと別れるというのは、何があつても別れないという女性の強い愛情の表れである。

非現実的な表現ではないが、男性の裏切りが発覚した時の女性の怒りを誇張した表現で詠った例としては、同じく漢代の短簫鏡歌の一篇である「有所思」（同上）がある。

聞君有它心 聞く 君に它心有り
 拉雜摧燒之 拉くだき雜まぜて 之を摧くだき燒かん
 摧燒之 之を摧くだきて燒き
 当風揚其灰 風に当たりて其の灰を揚げん
 従今以往 今より以往
 勿復相思 復た相思うこと勿わかからん
 相思与君絶 相思 君と絶わかれん

男性に二心があることを知ったことで、プレゼントするつもりだった鼈甲のかんざしを、引きちぎり、交ぜくつて、粉々に砕き、焼いて灰にし、風に向かってまくと、これでもかと畳みかけるように詠う手法は、先の「上邪」に類似する。二つの詩はいずれも民歌の影響にある作品であり、女性の強い愛情が強烈に吐露されている。

こうした特徴は、例えば『玉臺新詠』に掲載される文人によって書かれた閨怨詩や楽府にはほとんど見られないものである。張籍の詩は六朝期の同類楽府や同テーマで書かれた作品を跳び越えて民歌と通じ合っていると見える。なお、民歌の影響という点では、この詩の冒頭二句が楽府古辞「江南」を踏まえることについては【語釈】で指摘した。

最後に影響関係を指摘した李白「遠別離」の末二句との違いを述べておきたい。前述の通り、張籍の末二句は、李白「遠別離」の末二句と同じく非現

実的な誇張表現が見られる点で共通する。しかし、李白の樂府が、何か裏に寓意があるにせよ、表面的には全編故事を用いて舜帝の二妃の悲哀を詠っているのに対し、張籍の場合は、ある生身の女性の苦悩が詠われる。さらに李白の「蒼梧山崩れ 湘水絶えなば」が、「上邪」の「山に陵無く、江水竭くるを為し」を語彙のレベルでも踏まえる直接の典拠となっているのに対し、張籍の「城南の陌を寸断する」は、女性の強い思いを表現していることでは一致していても、用例のない極めて新奇な表現であると言える。全編故事を用い、語彙でも明らかな典拠のある李白に対し、張籍の場合は女性の苦悩の吐露では漢代の民歌と共通するけれども、その表現では典型から外れて新奇性が強い。そのことがこの詩の女性の悲哀にリアリティを感じる要因となっている。

(畑村)

37 楚宮行

【題解】

楚の宮殿のうた。『樂府詩集』では卷九五「新樂府辭六」の部分に収め、他の作者の作品は収められない。

張修蓉『中唐樂府詩研究』では、「新題新意」の部分に分類し、「写君王夜返宮室、在宮娥侍奉下、杯酒宴樂的情景」といい、君王が夜に宮殿に帰って、宮女たちの侍奉のもとで、酒を飲み宴會して楽しむ情景を描いた作とする。

「楚宮」の語は古く経書に見える。

『毛詩』鄘風「定之方中」に「定之方中、作于楚宮」(定の方に中するや、楚宮を作る)という例は、詩序に「定之方中、美衛文公也」(定之方中は、衛の文公を美むるなり)というように、衛の文公が齊の桓公の助けを借りて築いた宮殿である(そのことは『左伝』閔公二年の条に詳しい)。楚というのは楚丘という衛の地名によるもの。

また、『春秋』襄公三十一年の経文に「夏、六月辛巳、公薨于楚宮」(夏、六月辛巳、公 楚宮に薨ず)と見える。これはその『左伝』に「公作楚宮」(公 楚宮を作る)というように、魯の襄公が築いた宮殿である。『左伝』の続く部分に載せられるそれを築いた時の穆叔のことばに、「君欲楚也夫、故作其宮。若不復適楚、必死是宮也」(君 楚を欲するかな、故に其の宮を作る。若し復た楚に適かずんば、必ず是の宮に死せん)というように、楚を好んだ襄公が建てた楚風の宮殿である。

以上の経書の例はいずれも楚以外の地の宮殿であり、この詩が明らかに楚の国を舞台にしているのとは異なっている。

唐までの詩においては、詩題に用いる例はないようだが、詩中にはいくつかの用例がある。謝靈運の「白石巖下径行田」(『古詩紀』卷五七)に「雖非楚宮化、荒闕亦黎萌」(楚宮の化に非ずと雖も、荒闕も亦た黎萌あり)という例は、衛の文公の故事を用いて、永嘉太守としての自分の治績がそれに及ばないことを述べたもので、楚の宮殿ではない。

梁の蕭子頤の「日出東南隅行」(『玉臺新詠』卷八)に「逶迤梁家髻、冉冉楚宮腰」(逶迤たり 梁家の髻、冉冉たり 楚宮の腰)という例は、楚王(晏子春秋)・『韓非子』二柄等は楚の靈王とし、『荀子』君道・『尹文子』等は楚の莊王とする)が細い腰の女性を好んだために宮中に餓死するものが出たという有名な故事を踏まえたもので、これは楚の宮殿に関する例。

唐詩においては、楊師道の闕題の詩(『全唐詩』卷三四)に「燕趙蛾眉傾国、楚宮腰細本伝名」(燕趙の蛾眉 旧と国を傾け、楚宮の腰細 本と名を伝う)という例がある。これは、楚王細腰の故事を用いた例。その他、薛奇童に「楚宮詞」(『全唐詩』卷二〇二)という宮怨の作が見えるが、『樂府詩集』卷四二は「怨詩」と題しており、其二(『樂府詩集』では其一)に「月懸三雀觀、霜度万秋門」(月は懸かる 三雀觀、霜は度る 万秋門)と、漢の上林苑にあつた三雀觀や長安城の万秋門の名が見え、漢の長安の宮中を舞台にした作となっており、張籍の先例とはいえないようである。盛唐までの詩では、高適の「聽張立本女吟」(『全唐詩』卷二一四)にも例が見えるが、高適の詩ではなく、後の小説中の例のようである。陳貽熾主編『増訂注釈全唐詩』(文化芸術出版社、二〇〇一年)に詳しい(第一冊一七九三頁)。

以上のように、盛唐までの詩には「楚宮」の語はあまり用例が見られないのだが、そのような状況の中、杜甫には七例と用例が多い。いずれも夔州(重慶市奉節県)時代の作のようで、例えば「雨」(『詳註』卷一五)に「楚宮久已滅、幽佩為誰哀」(楚宮 久しく已に滅し、幽佩 誰が為にか哀しむ)という例は、直後の句に「侍臣書王夢」(侍臣 王の夢を書す)の句があるように、宋玉の「高唐賦」・「神女賦」を踏まえた作で、楚の懷王煥襄王の宮殿を指した例。同じ故事を踏まえた「詠懷古跡五首」其二(『詳註』卷一七)に「最是楚宮俱泯滅、舟人指点到今疑」(最も是れ 楚宮 俱に泯滅し、舟人 指点して 今に到りて疑う)という例は、その宮殿が荒廢して場所も分からなくなっていることを詠ずる。

張籍の「楚宮行」は以上のような流れの中で生まれたものであるが、その主題とその後展開については、【補】の部分で改めて考えることとしたい。なお、張籍の「楚宮」の例はこの詩題のみ。ただし、楚のことを詠じた437「楚妃怨」(卷七)の詩があり、共通する語彙も多い。これについては【語釈】の中でその都度触れるとともに、全文を【補】に掲げることとする。

【本文・書き下し文】

- 1 章華宮中九月時 章華宮中 九月の時
- 2 桂花半落紅橋垂 桂花半ば落ち 紅橋垂る
- 3 江頭騎火照輦道 江頭の騎火 輦道を照らし
- 4 君王夜從雲夢歸 君王 夜 雲夢より帰る
- 5 霓旌鳳蓋到雙闕 霓旌 鳳蓋 雙闕に到り
- 6 臺上重歌吹發 臺上 重 重として 歌吹発す
- 7 千門萬戸開相當 千門万戸 開きて相い当たり
- 8 燭籠左右列成行 燭籠 左右 列びて行を成す
- 9 下輦更衣入洞房 輦より下り 衣を更えて 洞房に入れば
- 10 洞房侍女盡焚香 洞房の侍女 尽く香を焚く
- 11 玉階羅幃微有霜 玉階 羅幃 微かに霜有り
- 12 齊言此夕樂未央 齊しく言う 此の夕べ 樂しみ未だ央きずと
- 13 玉酒湛湛盈華觴 玉酒 湛湛として 華觴に盈ち
- 14 絲竹次第鳴中堂 糸竹 次第に 中堂に鳴る
- 15 巴姬起舞向君王 巴姬 起ちて舞い 君王に向かい
- 16 迴身垂手結明璫 身を迴らし 垂手して 明璫を結ぶ
- 17 願君千年萬年壽 願わくは 君が千年万年の寿にして
- 18 朝出射麋夜飲酒 朝には出でて 麋を射 夜には酒を飲まんことを

【押韻】

時—上平七之・垂—上平五支・歸—上平八微（古詩通押）
 闕・發—入声一〇月
 當・行・堂・璫—下平一一唐、房・香・霜・央・觴・王—下平一〇陽（同用）
 壽・酒—上声四〇有

【口語訳】

- 1 章華の宮殿の中 九月の時期
- 2 桂の花は半分散り 赤い橋が実を垂れている
- 3 川のほとりでは 馬上の灯りが王の道を照らし
- 4 楚王が 夜に 雲夢の沢からお帰りになる
- 5 五色の旗と鳳凰の車蓋が 宮門に達すると
- 6 楼台の上では 繰り返し歌曲が演奏される
- 7 幾千幾万の扉が 開いて王を迎え
- 8 灯火が左右に並んで 列を成している

- 9 王が車を降り 着替えて 奥の間に入ると
- 10 奥の間の侍女たちは みな香を焚いている
- 11 玉の階段に薄絹のとばりがおり 微かに霜が降りる中
- 12 みな口をそろえる「今夜の楽しみは まだ終わっておりません」
- 13 旨酒が 美しい杯に なみなみとつがれ
- 14 管弦の調べが 順序よく 宮殿の中央で演奏される
- 15 巴の美女が立ち上がって 王に向かつて舞う
- 16 身体を回し 手を垂れて「垂手」を踊れば 耳飾りが揺れる
- 17 願わくば 王が千年万もの長寿を得られて
- 18 朝には鹿狩りに出かけ 夜には酒を飲む日々を 続けられますように

【語釈】

1・2 章華宮中九月時、桂花半落紅橋垂
 「章華宮中」楚の靈王が建設した宮殿の名。「章華」は楚の地名という。
 そのことは諸注も引く『春秋』昭公七年の『左伝』に「（楚子）及即位、為章華之宮、納亡人以実之」（即位するに及び、章華の宮を為り、亡人を納れて以て之を実たす）、あるいは「楚子成章華之臺、願与諸侯落之」（楚子章華の臺を成し、諸侯と之を落せんことを願う）と記されている。楚子は靈王をいう。
 また、『国語』楚語上には、「靈王為章華之臺、与伍举升焉曰、臺美夫」（靈王 章華の臺を為り、伍举と与に焉に升りて曰く、臺美なるかな、と）とあり、その奢侈を伍举に諫められた話が見える。さらに呉語には、申胥が呉王夫差を諫めるのに、楚の靈王のことを例に挙げ、「昔楚靈王不君、其臣箴諫以不入。乃築臺於章華之上、闕為石郭、陂漢以象帝舜、罷弊楚国」（昔楚の靈王は君たらず、其の臣 箴諫するも以て入れず。乃ち臺を章華の上に築き、闕ちて石郭を為し、漢を陂ぎて以て帝舜に象り、楚国を罷弊す）云々と述べたことが記される。

『史記』楚世家の「太史公曰」にも「楚靈王方会諸侯於申、誅齊慶封、作章華臺、求周九鼎之時、志小天下。及餓死于申亥之家、為天下笑。操行之不得、悲夫」（楚の靈王 方に諸侯を申に会し、齊の慶封を誅し、章華臺を作り、周に九鼎を求むるの時、志は天下を小とす。申亥の家に餓死するに及んで、天下の笑いと為る）という。

『晏子春秋』篇諫下に、遊獵に出かける景公を諫めた晏子のことばに「楚靈王不廢乾溪之役、起章華之臺、而民叛之」（楚の靈王 乾溪の役を廢せず、章華の臺を起こして、民 之に叛く）という。

文学作品においては、『楚辞』王逸の九思「傷時」の末尾に「願章華兮太

息、志恋恋兮依依」(章華を顧みて 太息す、志は恋恋として 依依たり) という。懷王に放逐された屈原の心情を、章華台を振り返るといふ形で表現したものである。

ほかに、張衡「東京賦」(『文選』卷三)に「是時也、七雄並争競、高以奢麗、楚築章華於前、趙建叢臺於後」(是の時や、七雄並びに争競し、高ぶるに奢麗を以てし、楚は章華を前に築き、趙は叢臺を後に建つ)といふ、揚雄の「羽獵賦」(『文選』卷八)に「奢雲夢、侈孟諸、非章華、是靈臺」(雲夢を奢とし、孟諸を侈とし、章華を非とし、靈臺を是とす)といふ例は、ともに奢侈の例として用いているといえよう。

唐までの詩においても用例は多く、謝朓の「奉和随王殿下詩十六首」其十(『校注』卷五)に「還顧昭陽闕、超遠章華臺」(還顧す 昭陽の闕、超遠なり 章華の臺)といふ、梁の宗夬の「荊州樂歌」二首其一(『初学記』卷八)に「章華遊獵去、紀郢從禽歸」(章華 遊獵し去り、紀郢 禽に従いて歸る)といふ、梁の元帝の「詠池中燭影詩」(『藝文類聚』卷八〇)に「章華終宴所、飛蓋且相追」(章華 宴を終る所、飛蓋 且く相追う)といふなどの用例がある。謝朓の例は、随王の宮殿を章華台に喩えたもの。宗夬の例は狩獵とともに詠じ、元帝の例は宴会の場所として詠じており、この詩と共通しているといえよう。

唐詩にも用例は多い中、李百葉の「郢城懷古」(『全唐詩』卷四三)に「大蒐雲夢掩、壯觀章華築」(大蒐 雲夢を掩い、壯觀 章華を築く)といふ、陶翰の「南楚懷古」(『全唐詩』卷一四六。一四九は劉長卿の作とする)に「君看章華宮、処処生黃蒿」(君看よ 章華の宮、処処 黃蒿を生ずるを)といふのは、往時をしのぶ懷古の作に用いられた例である。

また、陳子昂の「感遇詩三十八首」其二八(『全唐詩』卷八三)に「昔日章華宴、荊王樂荒淫」(昔日 章華の宴、荊王 荒淫を樂しむ)といふ、李頎の「絶纓歌」(『全唐詩』卷一三三)に「楚王宴客章華臺、章華美人善歌舞」(楚王 客を宴す 章華の臺、章華の美人 歌舞を善くす)といふなどの例は、宴会の開かれる場所として描くもの。

以上見たように、『左伝』では亡命者をかくまった場所とされているが、後の例ではよくも悪しくも、楚の王の豪華や盛宴と結びついた場所として描かれている。

杜甫には用例がない。張籍にはもう一例、題材を共通とする437「楚妃怨」(卷七)に「章華殿前朝下国、君心独自無終極」(章華殿前 下国朝するも、君心 独自 終極無し)といふ句がある。

〔九月時〕舞台が九月に設定されている。

この三字の並びで、范燈の「憶長安・九月」(『全唐詩』卷三〇七)に「憶長安、九月時、登高望見昆池」(長安を憶う、九月の時、高きに登り 昆池を望見す)といふ一例が見える。

〔桂花半落〕桂は潘富俊「唐詩植物図鑑」(貓頭鷹出版、二〇〇一年)によれば、肉桂(シナモンの類)のことを指し、またモクセイの類のことを指すともいう。モクセイの類は秋に花が咲くが、肉桂の開花時期は五く六月といふことなので、ここではモクセイの類をいうのであろう。

「桂花」は唐以前の詩にも用例が散見する。梁の簡文帝の「望月詩」(『藝文類聚』卷一)に「桂花那不落、团扇与誰粧」(桂花 那ぞ落ちざる、团扇 誰と与にか粧う)といふ例は月の中の桂を詠する例。「那不落」と表現しているが、落ちやすい花というイメージがあつたのだろうか。

陳の張正見の「山家閨怨詩」(『藝文類聚』卷三二)に「山中桂花晚、勿為俗人留」(山中 桂花の晚れ、俗人の為に留まる勿かれ)といふ例は、実際の桂花を詠する例。前に「別路已経秋」(別路 已に秋を経たり)といふ句がある。

唐に入り、高宗皇帝の「九月九日」(『全唐詩』卷二)に「砌蘭虧半影、巖桂發全香」(砌蘭 半影を虧き、巖桂 全香を發す)といふ例は、「桂花」の語は用いていないが、九月の桂を詠じた例。その香りが詠じられている。

先の簡文帝の詩にも見えた「落」の文字とともに詠じた例としては、王維の「皇甫岳雲谿雜題五首」其一「鳥鳴澗」(趙本横三)に「人間桂花落、夜静春山空」(人間 桂花落ち、夜静かにして 春山空し)の句があるが、これは春の詩であり、肉桂を指すか。

他に、劉長卿の「長沙贈衡岳祝融峰般若禪師」(『全唐詩』卷一五一)に「桂花寥寥閑自落、流水無心西復東」(桂花 寥寥として 閑かに自ら落ち、流水 無心 西し復た東す)といふ例は季節がよく分らない。「落」ではないが、銭起の「送万兵曹赴広陵」(『全唐詩』卷二二七)に「山晚桂花老、江寒蘋葉衰」(山晚れて 桂花老い、江寒くして 蘋葉衰う)といふ例は、「江寒」句の表現からも分かるが、詩全体の表現からして秋の例で、桂花について「老」と表現している。

また、皇甫冉の「廬山歌、送至弘法師、兼呈薛江州」(『全唐詩』卷二五〇)に「連湘接楚饒桂花、事久年深無杏樹」(湘に連なり 楚に接して 桂花饒く、事久しく 年深くして 杏樹無し)といふ例は、楚と関連して桂花を用いた例。

同時代の王建には「江南雜体二首」其一(尹占華校注本卷三)に「日夜桂花落、行人去悠悠」(日夜 桂花落ち、行人 去ること悠悠たり)といふ例

は、後に「虫声陰雨秋」（虫声 陰雨の秋）の句があるように、秋に桂花が落ちる例で江南（楚）を舞台としている。

孟郊の「和薛先輩送獨孤秀才上都赴嘉會、得青字」（『孟郊詩集校注』卷八）に「秦雲攀窈窕、楚桂攀芳馨」（秦雲 窈窕たるに攀じ、楚桂 芳馨を攀る）という例は、科擧の合格を表す「折桂」の故事を用いた例ではあるが、「楚桂」という詩語を作り出している。

杜甫には「桂花」の用例がなく、張籍の例はこれのみ。

「半落」という表現、唐以前の詩には用例が見えない。唐に入って用例が増える中で、王維の「寒食城東即事」（趙注本卷六）に「溪上人家凡幾家、落花半落東流水」（溪上の人家 凡幾家ぞ、落花 半ば落つ 東流の水）という例は花に關して用いた、先行する唯一の例。

同時代には、元稹の「使東川」二十二首其十五「江花落」（『元稹集』卷一七）に「江花何処最腸斷、半落江流半在空」（江花 何れの処か 最も腸斷ゆる、半ばは江流に落ち 半ばは空に在り）といい、白居易の「初与元九別後、忽夢見之、及寤而書適至、兼寄桐花詩、悵然感懷、因以此寄」（○四二一）に「桐花半落時、復道正相思」（桐花 半ば落つる時、復た道う 正に相思うと）というなどの例がある。

杜甫に一例は、「復陰」（『詳註』卷二一）に「君不見夔子之國杜陵翁、牙齒半落左耳聾」（君見ずや 夔子の國の杜陵の翁、牙齒は半ば落ちて 左耳は聾なり）と、年をとって衰えたことを齒が抜けることによって表現した例。張籍には他に用例がない。

「半落」、静嘉堂本・四庫全書本は「未落」に作る。
花について「未落」という例は古くからあり、『楚辭』離騷に「及榮華之未落兮、相下女之可詒」（榮華の未だ落ちざるに及び、下女の詒るべきを相ん）という句がある。

唐以前の詩においては、梁の蕭鈞の「晚景遊泛懷友」（『初學記』卷一八）に「風花転未落、巖泉咽不流」（風花 転じて未だ落ちず、巖泉 咽びて流れず）といい、沈約の「早發定山」（『文選』卷二七）に「野棠開未落、山桜發欲然」（野棠 開きて未だ落ちず、山桜 發きて然えんと欲す）というなどの例がある。

唐に入つて、孫逖の「和登会稽山」（『全唐詩』卷一八）に「仙花寒未落、古蔓柔堪引」（仙花 寒くして未だ落ちず、古蔓 柔らかにして引くに堪えたり）といい、張漸の「朗月行」（『全唐詩』卷一二）に「今年花未落、誰分生別離」（今年 花未だ落ちず、誰か 生別離を分とせん）というなどの例がある。

杜甫に一例、これも花についていうもので「入奏行、贈西山檢察使竇侍御」

（『詳註』卷一〇）に「省郎京尹必俯拾、江花未落還成都」（省郎 京尹 必ず俯して拾い、江花 未だ落ちずして 成都に還らん）という句がある。張籍には用例がない。

「紅橘垂」赤いみかんが垂れている。

「橘」は柑橘の類、『尚書』禹貢の揚州の部分に「厥包橘柚」（厥の包は橘柚）と見える、古くから知られた果実である。また、「晏子春秋」内篇雜下には「景公使晏子于楚、楚王進橘」（景公 晏子を楚に使わし、楚王 橘を進む）とあるように、楚とも関わりが深い果物で、『楚辭』九章にも「后皇嘉樹、橘徕服兮。受命不遷、生南国兮」（后皇の嘉樹、橘徕り服す。命を受けて遷らず、南国に生ず）と歌い起こされ、橘の徳を称える「橘頌」がある。

「紅橘」という語の用例は張籍以前には見当たらないようだが、実の色に關しては、『藝文類聚』卷八六橘の条に引く『異物志』に「橘、白華赤実」（橘は、白華にして赤実）といい、曹植の「橘賦」（『藝文類聚』同）には「有朱橘之珍樹」（朱橘の珍樹有り）というなど、「赤」「朱」などの文字で表現されている。

唐までの詩においては、「古詩」（『藝文類聚』同）に「橘柚垂嘉実、乃在深山側」（橘柚 嘉実を垂れ、乃ち 深山の側に在り）という例は「垂」とともに用い、鮑照の「紹古辭七首」其一（『鮑參軍集注』卷六）に「橘生湘水側、菲陋人莫伝」（橘は生ず 湘水の側、菲陋にして 人伝うる莫し）という例は楚の地（湘水のほとり）に生ずることが詠じられ、隋の李元操（孝貞）の「園中雜詠橘樹詩」（『初學記』卷二八）に「白華如散雪、朱実似懸金」（白華 雪を散らすが如く、朱実 金を懸くるに似たり）という例は実の色を「朱」と表現する。

唐に入り、張九齡の「感遇十二首」其七（『全唐詩』卷四七）に「江南有丹橘、經冬猶綠林」（江南に丹橘有り、冬を経て 猶お綠林）といい、王昌齡の「送李擢遊江東」（『全唐詩』卷一四二）に「楚國橙橘暗、吳門煙雨愁」（楚國 橙橘暗く、吳門 煙雨愁う）というなどの用例がある。前者は色を「丹」と表現し、後者は楚の地と関連させて詠じている。また、皎然の「洞庭山維諒上人院階前孤生橘樹歌」（『全唐詩』卷八二二）に「九月十月爭破顔、金実離離色殷殷」（九月十月 争つて破顔し、金実離離として 色殷殷たり）という例は、「九月」と関連させて詠じた唯一の先例。

杜甫には固有名詞も含めると詩中に二十例ほどの「橘」の用例がある。そのうち、「寒雨朝行視園樹」（『詳註』卷二〇）に「柴門擁樹向千株、丹橘黃甘此地無」（柴門 樹を擁すること 千株に 向とし、丹橘 黄甘 此の地無し）という例は、自らの果樹園の橘を詠じた例で、「丹」と表現している。

張籍は他に四首の詩で橋を詠じている。そのうち、38「江南曲」(巻二)に「江南人家多橋樹、吳姬舟上織白苧」(江南の人家 橋樹多く、吳姫 舟上 白苧を織る)という例は、江南の果実として詠じた例。

冒頭の二句、次の二句と二韻でひとまとまりになっている。前の句で時間と場所をし、後の句で季節感を添える。桂花と橋は視覚的な美しさを表現するとともに、どちらも香りのよいものであり、嗅覚表現ともなっている。

3・4 江頭騎火照輦道、君王夜從雲夢歸

「江頭」川のほとり。5「寄遠曲」(巻一)に見えた。その【語釈】も参照。

「江頭」は唐以前の詩には用例の見えないことばで、唐詩においては、「○江の頭」の例を除けば、樊晃の「南中感懷」(『全唐詩』巻二一四)に「四時不変江頭草、十月先開嶺上梅」(四時 変ぜず 江頭の草、十月 先ず開く 嶺上の梅)といい、王昌齡の「采蓮曲二首」其一(『全唐詩』巻一四三)に「采時浦口花迎入、采罷江頭月送歸」(采たる時 浦口 花は入るを迎え、采り罷んで 江頭 月は帰るを送る)というなどの用例がある。

杜甫には詩題の「哀江頭」(『詳註』巻四)の有名な例のほか、成都の錦江を舞台にした「江頭五詠」(同巻一〇)の連作があり、詩中においても、「村夜」(同巻九)に「風色蕭蕭暮、江頭人行」(風色 蕭蕭として暮れ、江頭 人行かず)というなど五例の用例があつて(「曲江の頭」の例を除く)、盛唐までの詩人の中で突出している。あるいは気に入った題材だったのかもしれない。

張籍には詩題に一例、詩中に五例のうち、379「春別曲」(巻六)に「江頭橋樹君自種、那不长繫木蘭船」(江頭の橋樹 君自ら種うるに、那ぞ長く繫がざる 木蘭の船)という例は橋とともに用いた例、46「江陵孝女」(巻二)に「江頭聞哭処、寂寂楚花春」(江頭 哭するを聞く処、寂寂として 楚花春なり)という例は、楚の地方を舞台とした詩に用いた例。

「騎火」諸注のいうように、馬上で灯火を持ち夜道を照らす従者またはその捧げる灯火のことをいうのであろう。

古い用例は見当たらず、唐詩にも中唐詩に八例が見えるのみ。大曆期の詩人の例を挙げれば、竇牟の「早入朝書事」(『全唐詩』巻二七一)に「列星沈騎火、残月暗車塵」(列星 騎火に沈み、残月 車塵に暗し)といい、司空曙の「和耿拾遺元日觀早朝」(『全唐詩』巻二九三)に「路塵和薄霧、騎火接低星」(路塵 薄霧に和し、騎火 低星に接す)という。これらはいずれも

払暁に朝廷に参内する時の灯火の例。

同時代では、張籍の師である韓愈と友人である白居易にそれぞれ二例あるうち、韓愈の「同李二十八夜次襄城」(『繫年集釈』巻一〇)に「欲知迎候盛、騎火万星攢」(迎候の盛んなるを知らんと欲せば、騎火 万星攢まる)という例などは夜の例である。張籍にはこれのみ。

「照輦道」「輦」は天子の乗る車。「輦道」は天子の車の通る道といい、また、車に乗ったまま通れる宮中の通路をいう。

古く司馬相如の「上林賦」(『文選』巻八)に「華榭壁瑤、輦道纏屬」(華榭 壁瑤にして、輦道 纏屬す)という例は、上林苑中の離宮を結ぶ道という例。

唐以前の詩においては、庾肩吾の「奉使北徐州参丞御」(『文苑英華』巻二九六)に「迴天随輦道、駐日逐戈鋒」(天を迴らして 輦道に随い、日を駐めて 戈鋒を逐う)といい、徐陵の「長安道」(『文苑英華』巻一九二)に「輦道乘双闕、豪雄被五都」(輦道 双闕に乘じ、豪雄 五都を被う)というなどの例がある。

唐に入っても多くの用例があるうち、韋元旦の「興慶池侍宴忘制」(『全唐詩』巻六九)に「夾岸旌旗疏輦道、中流簫鼓振樓船」(岸を夾む旌旗 輦道を疏ち、中流の簫鼓 樓船を振るう)という例は「遠道」に作るテキストもあるようだが、この形で『唐詩選』に収められて名高い例。また、祖詠の「扈從御宿池」(『全唐詩』巻一三二)に「君王既巡狩、輦道入秦京」(君王 既に巡狩し、輦道 秦京に入る)という例は、ことごとく狩獵のために通る道を「輦道」と表現した例。

陳注は李白の「效古二首」其一(王琦注本巻二四)に「青山映輦道、碧樹揺蒼空」(青山 輦道に映じ、碧樹 蒼空に揺る)というのを引く。

「君王」天子。君主。ここでは楚王を指す。

28「少年行」(巻一)に「独到輦前射双虎、君王手賜黄金璫」(独り輦前に到りて 双虎を射、君王 手づから賜う 黄金の璫)の句が見えた。その【語釈】も参照。なお、437「楚妃怨」(前出)にも「湘雲初起江沈沈、君王遙在雲夢林」(湘雲 初めて起り 江は沈沈たり、君王 遙かに在り 雲夢の林)の句があり、楚王を指して「君王」の語を用いている。

「夜從雲夢歸」夜、雲夢の沢から帰ってきた。

「雲夢」は古代の楚にあった巨大な湿地帯の名。古く『爾雅』積地に「宋有孟諸、楚有雲夢」(宋に孟諸有り、楚に雲夢有り)と見えている。また『墨

子』公輸に「荊有雲夢、犀兕麋鹿滿之」（荊に雲夢有り、犀兕麋鹿 之に満つ）というように、多くの動物が棲息する場所としても知られていた（荊は楚をいう）。狩猟に格好の場所であり、司馬相如の「子虚賦」（『文選』巻七）も、冒頭近くに「僕（子虚） 樂齊王之欲夸僕以車騎之衆、而僕対以雲夢之事也」（僕 齊王の僕に夸るに車騎の衆きを以てせんと欲し、僕対するに雲夢の事を以てせしを樂しむなり）というように、子虚が齊王に向かって雲夢の狩猟の様子を自慢したのに対し、烏有先生が反駁を加えるという設定になっている。

実際に楚王がこの地で狩りをしたことに関する故事も多く、『呂氏春秋』仲冬紀には「荊莊哀王獵於雲夢、射随兕、中之」（荊の莊哀王 雲夢に獵し、随兕を射て、之に中つ）と始まる逸話が記される。申公の子培は、楚（荊は楚をいう）の莊哀王が得たこの随兕を強引に奪い取り、三ヶ月たたないうちに死んでしまう。はじめ莊哀王はその無礼を怒るが、随兕を殺した者が三ヶ月以内に死ぬことを知っていた子培による忠義の行動だったことが後に判明するという話である。

同じく『呂氏春秋』の貴直論には、太葆の申が、自らの命をも省みず楚の文王に直諫して行動を改めさせる話が記されるが、「荊文王得茹黃之狗、宛路之嬭、以敗於雲夢、三月不反。得丹之姬淫、期年不聽朝」（荊の文王 茹黃の狗、宛路の嬭を得て、以て雲夢に敗して、三月反らず。丹の姫を得て淫し、期年 朝を聴かず）というように、よい獵犬と道具を得て、雲夢沢で狩猟に夢中になったことも、諫められる原因の一つであった。

また、その容色の美によって楚王に重用されていた安陵君が、狩猟の折りに楚王に「私の亡き後、お前は誰とこの樂しみを共にするだろう」と言われたのに対し、王に殉死する覚悟でいる旨を答えたところ、ますます寵愛されるようになったという有名な故事（『戦国策』楚策一）も、「楚王游於雲夢、結駟千乘、旌旗蔽日」（楚王 雲夢に遊び、結駟 千乘、旌旗 日を蔽う）というように、この雲夢の沢を舞台としている。

陳注は庾信の「哀江南賦」（『庾子山集注』巻二）に「章華望祭之所、雲夢偽遊之地」（章華 望祭の所、雲夢 偽遊の地）と、第一句に見えた「章華」と対にした例を引いている。これは高祖が韓信を捕らえるために、雲夢の沢に遊ぶと口実を付けて韓信を呼び出した故事（『漢書』陳平伝）を踏まえた表現。

唐までの詩においては、顔延之の「始安郡還都、与張湘州登巴陵城樓作」（『文選』巻二七）に「却倚雲夢林、前瞻京臺圍」（却ろは雲夢の林に倚り、前は京臺の圍を瞻る）といい、張正見の「御幸樂遊苑侍宴」（『文苑英華』巻一六九）に「昆明不習戰、雲夢豈遊敗」（昆明 戦いを習わず、雲夢 豈に遊敗

せんや）というなどの用例がある。前者は岳陽の城楼からの眺めを詠じるのに用いた例、後者は天子の行幸を楚王の雲夢での狩猟と比較した例である。

唐詩にも例は多く、先に「章華臺」の【語釈】に引いた揚雄の「羽獵賦」や李百葉の「郢城懷古」（ともに前出）にも見えていたように、楚を詠ずる詩にしばしば見られる。例を挙げれば、太宗の「出獵」（『全唐詩』巻一）にも冒頭で「楚王雲夢沢、漢帝長楊宮」（楚王 雲夢の沢、漢帝 長楊の宮）といい、また、狩猟に関わるものではないが、孟浩然の「望洞庭湖、贈張丞相」（『全唐詩』巻一六〇）に「氣蒸雲夢沢、波撼岳陽城」（氣は蒸す 雲夢の沢、波は撼がす 岳陽城）という例は人口に膾炙する。

杜甫には一例、「夔府書懷四十韻」（『詳註』巻一六）に「綠林寧小患、雲夢欲難追」（綠林 寧ぞ小患ならんや、雲夢 追い難からんと欲す）という。これは呉軍に追われた楚の昭王が雲夢沢で盜賊に襲われた故事（『春秋』定公四年『左伝』）に基づいた句とされる。

張籍にもう二例は、いずれも 437 「楚妃怨」（前出）の例で、先にも引いた冒頭の二句の「湘雲 初めて起こり 江は沈沈たり、君王 遙かに在り 雲夢の林」のほか、末尾の二句に、「西江若翻雲夢中、麋鹿死尽忘還宮」（西江 若し 雲夢の中に翻し、麋鹿 死に尽くせば 応に宮に還るべし）といい、楚王が狩猟に明け暮れる場所として詠じられている。

前の二句と同じ韻でひとまとまり。前の二句で時間と場所が設定されたのを承けて、楚王の雲夢沢から宮殿への帰還が詠じられる。夜になってからの帰還で、騎馬の従者たちが川面に灯火を映しながら、王の車が通る道を照らし出す。外出先が雲夢沢であることから、狩猟に出かけていたことが暗示され、結びの二句に至ってそれが明らかにされる。

5・6 霓旌鳳蓋到双闕、臺上重重歌吹笳

〔霓旌〕虹にかたどった五色の旗。天子の儀仗に用いられる。「霓」はまた「蜺」に作る。

宋玉の「高唐賦」（『文選』巻一九）で、狩猟の成果を見に出かける王を描写する中に「蜺為旌、翠為蓋」（蜺を旌と為し、翠を蓋と為す）という表現があり、楚王に関わることばといえる。『楚辞』劉向「九歎」の「遠逝」に「举霓旌之擘兮、建黄纁之總旆」（霓旌の擘翳たるを挙げ、黄纁の總旆を建つ）というのも、王ではなく屈原に比せられた語り手の出遊の描写に用いられたものではあるが、楚に関わる例といえよう。

李冬生注は、司馬相如の「上林賦」（前出）で、上林苑への天子の出獵の

様子を描写する中に「拖蜺旌、靡雲旗」(蜺旌を拖き、雲旗を靡かす)というのを引いている。

唐以前の詩には用例が見えないようだが、唐に入ると用例が多くなり、李嶠の「奉和初春幸太平公主南莊応制」(『全唐詩』卷六一)に「羽騎參差花外轉、霓旌搖曳日辺回」(羽騎 參差として 花外に轉じ、霓旌 搖曳として 日辺に回る)といい、劉憲の「奉和幸韋嗣立山莊侍宴應制」(『全唐詩』卷七一)に「緹騎分初日、霓旌度曉寒」(緹騎 初日を分かち、霓旌 曉寒を度る)というなどの例が見えるようになる。いずれも天子の行幸の様子を描写した例。

また、先に「章華」の例として引いた陳子昂の「感遇詩三十八首」其二(前出)の直後の句に「霓旌翠羽蓋、射兕雲夢林」(霓旌 翠羽の蓋、兕を射る 雲夢の林)という例は、「高唐賦」に基づき楚王の狩獵を描写した例で、「雲夢」の語も用いられている。

杜甫には二例、そのうち一例は李冬生注が挙げ、先に「江頭」の部分で触れた「哀江頭」(前出)に「憶昔霓旌下南苑、苑中万物生顏色」(憶う 昔 霓旌 南苑に下り、苑中の万物 顏色を生ずるを)という例。玄宗一行が芙蓉苑に行幸する様子を描く中に用いられている。もう一例は陳注が引く「滕王亭子二首」其二(『詳註』卷一二)に「尚思歌吹入、千騎擁霓旌」(尚お思 歌吹入りて、千騎 霓旌を擁するを)という例。かつての滕王の盛んな行列を想像したもので、ここと同じく「歌吹」の語とともに用いている。張籍の例はこれのみ。

〔鳳蓋〕 鳳凰の飾りのついた傘。天子の車などに用いられる。

諸注も引く班固の「西都賦」(『文選』卷一)に、「於是後宮乘輦輅、登竜舟、張鳳蓋、建華旗」(是に於いて後宮は輦輅に乗り、竜舟に登り、鳳蓋を張り、華旗を建つ)という。天子の昆明池の遊びに後宮の女性たちが参加することを描写した部分で、舟の傘をいうもの。李冬生注はこの部分の李善注に引く「桓子新論」(佚文)に「乗車、玉爪華芝及鳳皇三蓋之屬」(車に乗るに、玉爪華芝及び鳳皇三蓋の属あり)という記述を引いている。

李冬生注はさらに顔延之の「三月三日曲水詩序」(『文選』卷四六)に「既而帝暉臨幄、百司定列、鳳蓋俄軫、虹旗委旆」(既にして帝暉は幄に臨み、百司は列を定め、鳳蓋は軾を俄け、虹旗は旆を委る)という記述をも引く。天子の車が停止したことを表現するのに用いたもので、「虹旗」と対にした例である。

唐までの詩においては、宋の謝莊の「侍宴蒜山詩」(『藝文類聚』卷八)に「竜旌弘紆景、鳳蓋起流雲」(竜旌 紆景を払い、鳳蓋 流雲を起こす)と

いい、陳の江総の「秋日侍宴婁苑湖応詔詩」(『文苑英華』卷一六九)に「虹旗照島嶼、鳳蓋繞林塘」(虹旗 島嶼を照らし、鳳蓋 林塘を繞る)というなどの用例がある。いずれも天子の乗り物を描写した例で、前者は山での侍宴の作であるから車蓋の描写、後者は湖での侍宴の作であり舟の蓋の可能性も皆無ではないが、「林塘を繞る」の表現からするとやはり車蓋の描写であろう。前者は「竜旌」、後者は「虹旗」と対にしている(後者を『初学記』卷一四では「紅旗」に作るが、対句からすると「虹旗」の方がよいと思われる)。

唐に入ると用例が少なくなり、張籍以前の例は見当たらないようだ。百家家全集は「鳳輦」に作る。こちらであれば天子の車の意。

「鳳輦」の古い用例は見当たらず、唐までの詩にも、隋の煬帝の「步虚詞二首」其二(『樂府詩集』卷七八)に「翠霞承鳳輦、碧霧翼龍輿」(翠霞 鳳輦を承け、碧霧 龍輿を翼く)という一例が見えるだけのようであるが、このことばは唐詩に多くの用例がある。

そのうち、宋之問の「松山嶺應制」(『全唐詩』卷五二)に「翼翼高旌轉、鏘鏘鳳輦飛」(翼翼として 高旌轉じ、鏘鏘として 鳳輦飛ぶ)といい、沈佺期の「陪幸韋嗣立山莊」(『全唐詩』卷九七)に「虹旗縈秀木、鳳輦弘疏筴」(虹旗 秀木を縈り、鳳輦 疏筴を弘う)という例は、いずれも旗と対にしている。

杜甫に一例、「洗兵行」(『詳註』卷六)に「鶴駕通霄鳳輦備、鷄鳴問寢竜樓曉」(鶴駕 通霄 鳳輦備わり、鷄鳴 寢を問う 竜樓の曉)の句がある。玄宗の車を表現した例。張籍には他に用例がない。

〔双闕〕 宮門の上に左右に並ぶ楼。

古く「古詩十九首」其三(『文選』卷二九)に「兩宮遙相望、双闕百餘尺」(兩宮 遙かに相望み、双闕 百餘尺)という用例がある、常見の語。

李冬生注は曹植の「五遊詠」(『藝文類聚』卷七八)に「閭闔啓丹扉、双闕曜朱光」(閭闔 丹扉を啓き、双闕 朱光を曜かす)という例を引き、陳注は鮑照の「結客少年場行」(『文選』卷二八)に「九塗平若水、双闕似雲浮」(九塗 平らかなること水の若く、双闕 雲の浮かぶに似たり)という例を引く。また、先に「輦道」の【語釈】に引いた徐陵の「長安道」にも見えた。

唐詩においても、『唐詩選』に収められて名高い盧照隣の「長安古意」(『全唐詩』卷四一)に「複道交窓作合歡、双闕連霓垂鳳翼」(複道の交窓 合歡を作し、双闕の連霓 鳳翼を垂る)といい、李白の「鼓吹入朝曲」(王琦注本卷五)に「濟濟双闕下、歛樂樂恩榮」(濟濟たる 双闕の下、歛樂 恩榮を樂しむ)というなど、多くの用例がある。

杜甫に五例あるうち、「寄岳州賈司馬六丈巴州嚴八使君兩閣老五十韻」(『詳註』卷八)に「法駕還双闕、王師下八川」(法駕 双闕に還り、王師 八川に下る)という例は、天子(肅宗)の長安への帰還を表現するのに用いた例。張籍の用例はこれのみ。

〔臺上重重歌吹発〕楼台の上では歌曲が繰り返し演奏される。

「重重」は、12「築城詞」(卷一)に「重重士堅試行錐、軍吏執鞭催作還」(重重として土は堅く 試みに錐を行うも、軍吏 鞭を執り 催して遅しと作す)と見えた。その【語釈】参照。ここでも述べたように、「重重」は宮殿などの重なり合う形容として用いられるので、ここでも上の「臺上」の述語として楼台が重なり合っている形容とも解釈できようが、「臺上」は「上」の文字を伴って主語としては落ち着きが悪いと思われたので、状語として下の「歌吹発」を形容していると考えた。

音楽について「重重」という例は未見だが、「築城詞」にも引いた杜甫の「百舌」(『詳註』卷一二)に「百舌来何処、重重祇報春」(百舌 何れの処よりか来たる、重重として 祇だ春を報ず)と、繰り返し鳴く鳥の形の形容に用いている。また、張籍にはこの詩と「築城詞」のほかに五例あるうち、402「秋山」(卷六)に「草堂不閉石床静、葉間墜露声重重」(草堂閉ざさずして 石床静かに、葉間の墜露 声重重たり)と、露のしたたる音がしきりに聞こえるのを「重重」と表現している。

ここでは楚王の帰還を歓迎して、音楽が繰り返し演奏されることを描写しているであろう。

「歌吹」は、動詞と名詞の用法があるとされるが、ここでは名詞。歌と管楽器、すなわち音楽をいう。16「沙堤行呈裴相公」(卷一)に「路傍高楼息歌吹、千車不行行者避」(路傍の高楼 歌吹を息め、千車は行かず 行者は避く)と見えた。その【語釈】も参照。

この詩と関連する用例を補っておこう。唐までの詩では、齊の丘巨源の「聽隣妓」(『玉臺新詠』卷四)に「貴里臨妝館、東隣歌吹臺」(貴里 妝館に臨み、東隣 歌吹の臺あり)とあるのは、楼台から聞こえてくる音楽について用いた例。

唐に入り、王無競の「銅雀臺」(『全唐詩』卷六七)に「平生事已變、歌吹宛猶昨」(平生 事は已に變ずるも、歌吹 宛も猶お昨のごとし)という例は、懐古の詩で楼台の上の音楽を詠じた例。また、李適の「奉和立春遊苑迎春」(『全唐詩』卷七〇)に「稍覺披香歌吹近、竜驂日暮下城闌」(稍く覺ゆ 披香 歌吹の近きを、竜驂 日暮 城闌に下る)という例は、天子の夕方の帰還を宮殿の歌吹が聞こえてくることによって表現した例。

杜甫には一例のみ、先に「霓旌」の部分で引いた「滕王亭子」(前出)に「尚お思う 歌吹入りて、千騎 霓旌を擁するを」という例。

前の二句で宮殿への帰還が詠じられていたのを承けて、宮殿への到着が詠じられた二句。この二句が一韻で一まとまりになっている。楚王の立派な車が宮殿の門に到着したのを迎えて、楼台の上で音楽が繰り返し演奏される。以下十句にわたって続く宮殿内の描写へと橋渡しする二句である。

7・8 千門万戸開相当、燭籠左右列成行

〔千門万戸〕たくさんの門ととびら。壮大な宮殿や大都会を表現するのに用いられることば。ここでは楚王の宮殿を詠ずるのに用いられている。

25「吳宮怨」(卷一)に「宮中千門復万戸、君恩反復誰能數」(宮中 千門復た万戸、君恩反復して 誰か能く数えん)の句が見えた。その【語釈】参照。

〔開相当〕(たくさんの門が)開いて、天子に対して出迎える。

「相当」は、古書では軍隊が対戦することなどの表現に多く用いられるようだが、『洛陽伽藍記』城内「景樂寺」の条に、この寺の位置を説明して、「閭闔南、御道東、西望永寧寺正相当」(閭闔の南、御道の東、西のかた永寧寺を望んで正に相当たる)というように、後には建物に向かい合うことなどにも用いられたようだ。

この句の場合、長い廊下の両側に多くの門が並んでおり、それらが互に向かい合って開いている描写とも解釈できようが、次の句で左右に居並ぶ灯りが詠じられているのと情景が重なるように思われるので、宮殿の奥深くへと続く何重にも重なった門が全て開いて、楚王の方に向かっていく、すなわち楚王の帰りを迎えていることを描写したと解釈した。

唐までの詩においては、古く宋子侯の「董嬌饒詩」(『玉臺新詠』卷一)に「花花自相對、葉葉自相当」(花花 自ら相對し、葉葉 自ずから相当たる)といい、曹操の「却東西門行」(『樂府詩集』三七)に「長与故根絶、万歳不相当」(長く 故根と絶え、万歳 相当たらず)というなどの例がある。前者は葉と葉が向かい合う例、後者は否定の形で用い、根を離れた転蓬がもとの根と永遠にめぐり逢えないことを述べた例。

唐に入って、王績の「古意六首」其五(『全唐詩』卷三七)に「枝枝自相糾、葉葉還相当」(枝枝 自ずから相糾まり、葉葉 還た相当たる)という例は、宋子侯の表現を桂樹に応用したもの。岑參の「上嘉州青衣山中峰、題

惠浄上人幽居、寄兵部楊郎中」(『校注』卷四)に「蘭若向西開、峨眉正相当」(蘭若 西に向かつて開き、峨眉 正に相当たる)という例は、上の句ではあるが「開」字が用いられており、寺が峨眉山に向かつて建てられていることを表現した例である。

杜甫に一例、「又上後園山脚」(『詳註』卷一九)に「不及祖父塋、累累塚相当」(祖父の塋に及ばず、累累 塚相当たる)の句がある。出征先で死んで先祖の墓に入ることができない人々の墓が重なって向かい合っている様子を描写したものの。

張籍の例はこれのみ。

〔燭籠左右列成行〕灯火が左右に並んで、列を成している。

〔燭籠〕、字義通り解釈すれば、灯火のかご、灯籠ということであろう。ただ、張籍以前には、下記の文字の異同がある例の他には用例が見当たらないようである。

ただ、静嘉堂本や『中晚唐詩叩彈集』では「燭童」に作っており、「燭籠」の表記もこれに通ずるとすれば、別名を「燭陰」という人面蛇身の光の神の名ということになり、ここはそれを借りて灯火を表現した句となるだろう。

〔燭童〕は古く『山海經』大荒北經に「西北海之外、赤水之北、有章尾山。有神、人面蛇身而赤、直目正乘。其瞑乃晦、其視乃明。不食不寝不息、風雨是謁。是燭九陰、是謂燭童」(西北海の外、赤水の北に、章尾山有り。神有り、人面蛇身にして赤く、直目正乗なり。其の瞑するや乃ち晦く、其の視るや乃ち明らかなり。食らわず寝ねず息せず、風雨是れ謁す。是れ九陰を燭らし、是れ燭童と謂う)という。似たような記述は海外北經の鍾山の条にもあり、そこでは「燭陰」と呼ばれているが、郭璞の注では燭童と同じものとされる。

他にも古くから用例があり、『楚辭』天問には「日安不到、燭童何照」(日安くにか到らざる、燭童 何ぞ照らす)といい、王逸も「言天之西北、有幽冥無日之国、有童銜燭而照之也」(天の西北に、幽冥にして日無きの国有り、童の燭を銜んで之を照らす有るを言うなり)と、闇の国を灯火で照らす童としている。他に張衡の「思玄賦」(『文選』卷一五)には「速燭童令執炬分、過鍾山而中休」(燭童を速きて炬を執らしめ、鍾山に過りて中ごろ休む)と用いており、章尾山よりも鍾山に住む神というイメージが強かったことをうかがわせる。

唐までの詩においても、庾闡の「遊仙詩」十首其二(『藝文類聚』卷七八)に「仰盼燭童曜、俯步朝庭」(仰ぎて燭童の曜くを盼、俯して朝庭の庭を歩む)と詠じられるほか、謝朓の「雜詠五首」其一「灯」(『玉臺新詠』卷四)

には「抽莖類仙掌、銜光似燭童」(莖を抽きて 仙掌に類し、光を銜んで燭童に似る)と、灯火の比喩に用いられている。

唐に入っても、李白の「北風行」(王琦注本卷三)に「燭童棲寒門、光耀猶且開」(燭童 寒門に棲み、光耀 猶且に開く)と、神童の名として見えるほか、孟浩然の「同張將薊門觀灯」(『全唐詩』卷一六〇)には、「薊門看火樹、疑是燭童然」(薊門 火樹を看る、疑うらくは是れ燭童の然やすかと)のように、灯火の比喩に用いられている。

ただ、やはり神の名としてのイメージが強いようで、比喩の場合も、謝朓や孟浩然の例のように比喩であることを示す表現を伴うのが一般的のようだ。この句のように、比喩であることを示す表現がない例としては、李賀の「河南府試十二月樂詞」十三首其十「十月」(『全唐詩』卷三九〇)に「碎霜斜舞上羅幕、燭童兩行照飛閣」(碎霜 斜めに舞いて 羅幕に上り、燭童 兩行 飛閣を照らす)という例が挙げられるくらいのものである。なお、この李賀の例は、『樂府詩集』卷八二は「燭籠」に作っており、李賀の集でも「籠」に作るものと「童」に作るものがある。

〔列成行〕の表現は、この三字の並びで以前の用例が見える。

唐までの詩においては、「羅列成行」(羅列して行を成す)の例を除いても、魏の麋元の「詩」(『太平御覽』卷九七〇)に「蒼蒼陵上柏、參差列成行」(蒼蒼たり 陵上の柏、參差として 列なりて行を成す)といい、王融の「棲玄寺聽講畢、遊邸園七韻、応司徒教詩」(『広弘明集』卷三〇)に「芳草列成行、嘉樹紛如積」(芳草 列なりて行を成し、嘉樹 紛として積むが如し)というなど数例の用例がある。

ただ、唐の詩では、他に王績の「過漢故城」(『全唐詩』卷三七。卷九四では吳少微の作とする)に、「餘基不可識、古墓列成行」(餘基は 識るべからざるも、古墓 列なりて行を成す)の例が見えるのみのようだ。

三字の並びは同じではないが、灯火が並んでいることを「成行」と表現した例としては、王維の「早朝」(趙注本卷五)に「銀燭已成行、金門儼駟馭」(銀燭 已に行を成し、金門に 駟馭儼かなり)の句がある。宮中での様子を詠じている点でもことと共通する。

杜甫には「成行」は一例、有名な「贈衛八處士」(『詳註』卷六)に「昔別君未婚、兒女忽成行」(昔 別れしとき 君 未だ婚せざるに、兒女 忽ち行を成す)の句がある。張籍の例はこれのみ。

以下、十句にわたって一韻で一まとまりとなり、宮殿内での楚王の様子が描かれる。その最初となるこの二句は、奥深くまで重なり合った扉が開き、その通路の左右に灯火が並ぶ様子を描くことにより、楚王が宮殿の奥へと進

んでいくことを暗示する。そして次の二句へと繋がっていく。

9・10 下輦更衣入洞房、洞房侍女尽焚香

〔下輦〕車を降りる。輦は第三句に「輦道」の語が見え、第五句「鳳蓋」にも「鳳輦」の異同があった。

〔下輦〕は、張衡「西京賦」(前出)に後宮を訪れる天子の様子を詠じて、「恣意所幸、下輦成燕」(意を恣にして幸する所、輦より下りて燕を成す)といい、左思「蜀都賦」(『文選』卷四)に蜀の歴史を詠じて「公孫躍馬而称帝、劉宗下輦而自王」(公孫は馬を躍らせて帝と称し、劉宗は輦より下りて自ら王とす)というなどの例がある。

唐までの詩においては、江淹の「雜体詩三十首」其二四「顔特進(延之)侍宴」(『文選』卷三一)に「重陽集清氣、下輦降玄宴」(陽を重ねて清氣を集め、輦より下りて玄宴を降す)といい、王僧孺の「侍宴詩」(『藝文類聚』卷三九)に「迴輦避暑宮、下輦迎風館」(輦を迴らす避暑宮、輦より下る迎風館)というなどの例がある。いずれも天子が宴を開くことを表現するのに用いた例。

唐に入り、陳子良の「上之回」(『全唐詩』卷三九)に、天子が宴会を開くことを「下輦便高宴、何如在瑤臺」(輦より下りて便ち高宴すれば、瑤臺に在ると何如)と表現し、王昌齡の「駕幸河東」(『全唐詩』卷一四二)には、行幸した玄宗が山西に到着したことを「下輦迴三象、題碑任六童」(輦より下りて三象を迴らし、碑に題して六童に任す)と表現するなどの例が散見するが、あまり数は多くない。初盛唐に六例、杜甫には例がなく、中唐では張籍のこの例のほかには王涯に一例のみ、晩唐には例がないようだ。

〔更衣〕衣服を着替えること。25「吳宮怨」(卷一)に「吳王醉後欲更衣、座上美人嬌不起」(吳王酔いて後衣を更えんと欲し、座上の美人嬌として起たず)の句が見えた。その【語釈】参照。

そこでも触れたように、漢の武帝が平陽公主の邸で更衣の際に世話をした衛子夫を寵愛した故事に基づいた表現であり、単に着替える意味ではなく、皇帝が宮女を寵愛すること・皇帝がその夜寵愛する宮女を選ぶことをも含んだ表現。ここでも次の句の「洞房侍女」たちを選ぶ意を暗示していよう。

〔洞房〕奥まった部屋、奥深い部屋。以下に見るように、女性の部屋を指すのに用いることが多い。ここでは宮中の奥深く、宮女たちと楽しみを尽くす場所として用いられている。なお、現在では「闇洞房」の語もある通り、主

に新婚夫婦の部屋を呼ぶのに用いられるが、唐代にはまだその意味が中心にはなっていないようだ。

『楚辞』招魂に「娉容修態、緬洞房些」(娉容修態、洞房に緬)とあり、王逸の注に「房、室也」(房は、室なり)といい、洪興祖補注も引く五臣(呂向)の注に「洞、深也」(洞は、深なり)という。大勢の美人が奥深い部屋で待っていることを表現したもの。

ほかに、宋玉の「風賦」(『文選』卷一三)に「躋于羅帷、經于洞房」(羅帷を躋り、洞房を經)と宮殿の奥深い部屋に吹く風を表現し、司馬相如の「長門賦」(『文選』卷一六)に「懸明月以自照兮、徂清夜於洞房」(明月懸かりて以て自ずから照らし、清夜に洞房に徂)と宮殿の奥まった部屋に一人たらずむ陳皇后の様子を表現するなど、古くから多くの詩文に用いられる。

唐までの詩においても多くの用例があり、曹植の「妾薄命行」(『玉臺新詠』卷九)に「日既逝矣西藏、更會蘭室洞房」(日既に逝きて西に藏れ、更に蘭室洞房に會す)といい、先に「燭童」の例として其一を引いた謝朓の「雜詠五首」の連作(前出)の其二「燭」には、「恨君秋月夜、遺我洞房陰」(恨む君が秋月の夜、我を洞房の陰に遺るを)と用いられている。前者は宮中とは限らないようだが、宴会の様子をさまざまに詠ずる詩において、その舞台を「洞房」と表現した例、後者は孤独を嘆く女性を詠じる詩に用いられた例で、その女性の部屋を「洞房」と表現した例。

唐に入っても多くの例がある中、喬備の「長門怨」(『全唐詩』卷八一)に「秋入長門殿、木落洞房虛」(秋に長門殿に入れば、木は落ちて洞房虚し)という例は、「長門賦」に基づいたものと思われ、このこと同じく宮殿の中で女性のいる場所として用いた例。また、崔国輔の「古意二首」其一(『全唐詩』卷一九)に「閨怨の女性を表現して「玉籠薰繡裳、著罷眠洞房」(玉籠繡裳に薰じ、著け罷りて洞房に眠る)という例は、この詩の次の句の表現と似て、香を焚きしめることとともに表現している。

杜甫には詩中に二例、そのうち一例は冒頭に用いたこの語を詩題にも用いる(詩題にはその一例のみ)。その「洞房」(『詳註』卷一七)を挙げれば、「洞房環珮冷、玉殿起秋風」(洞房環珮冷やかに、玉殿に秋風起くる)という。かつての長安の宮中の様子を詠じる中に用いられた例(ただし、『統国訳漢文大成』の鈴木虎雄注は、現在の杜甫と妻の寢室の様子から往時の宮中を連想したものと解する)。

張籍にはこの句と次の句の例のみ。

この「洞房」を百名家集本は下の句とともに「曲房」に作っている。「曲房」も、奥まった、人目につきにくい部屋の意。

「洞房」ほど用例は多くないが、枚叔「七發」(『文選』卷三四)に「往来

游醺、縦恣于曲房隠間之中」(往来して遊び醺しみ、曲房隠間の中に縦恣にす)という例があるなど、古くから用いられることば。楚の太子が病氣になつたのに対し、遊興にふけて贅沢な暮らしをしているのが病氣の原因であると呉の客が述べる部分に、「曲房」の語が用いられている。

唐までの詩においては、陸機の「擬古十二首」其六「擬明月何皎皎」(『文選』卷三〇)に「涼風繞曲房、寒蟬鳴高柳」(涼風 曲房を繞り、寒蟬 高柳に鳴く)といい、湯惠休の「歌詩」(『藝文類聚』卷三)に「秋風嫋嫋入曲房、羅帳含月思心傷」(秋風嫋嫋として 曲房に入り、羅帳 月を含んで思心傷む)というなどの用例がある。いずれも閨怨詩で、男性を思う女性の居場所として「曲房」の語が用いられている。

唐詩においても、喬知之の「從軍行」(『全唐詩』卷八一)に「曲房理針線、平砧擣文練」(曲房 針線を理め、平砧 文練を擣つ)という例は、從軍した夫の帰りを待つ女性の部屋を表現するのに用いた例。また、李頎の「緩歌行」(『全唐詩』卷一三三)に「二八蛾眉梳隴馬、美酒清歌曲房下」(二八の蛾眉 隴馬を梳り、美酒 清歌 曲房の下)といい、岑参の「燉煌太守後庭歌」(『岑参集校注』卷二)に「城頭月出星滿天、曲房置酒張錦筵」(城頭 月 出でて 星 天に滿ち、曲房 置酒して 錦筵を張る)という例では、宴会の場所として「曲房」の語が用いられている。

杜甫には例がなく、張籍にも他に例がない。

「侍女」身の回りの世話をする女性。ここでは、宮女をいう。前の句により、楚王の更衣を手伝い、寵愛の対象となる女性たちであることが想像される。

ごく普通のことばのようなのだが、経書・先秦諸子等の古書に用例がなく、『世説新語』言語に載せられる司馬徽と龐統の逸話に、「何有坐則華屋、行則肥馬、侍女數十、然後為奇」(何ぞ坐するに則ち華屋、行くに則ち肥馬、侍女数十なる有りて、然る後に奇と為さんや)といい、『藝文類聚』卷八四に引く「王孫子(新書)」に、「昔衛靈公坐重華之臺、侍女數百」(昔衛の靈公重華の臺に坐し、侍女數百あり)ということばが見えるあたりが古い用例のようである。

唐までの詩には例が見えないが、唐詩にはかなりの数の例がある。蘇頌の「奉和崔尚書贈大理陸卿鴻臚劉卿見示之作」(『全唐詩』卷七四)に「出曳仙人履、還熏侍女衣」(出でては曳く 仙人の履、還りては熏ず 侍女の衣)といい、岑参の「和刑部成員外秋夜寓直寄臺省知己」(『校注』卷四)に「黃門持被覆、侍女捧香燒」(黃門 被を持ちて覆い、侍女 香を捧げて焼く)というなどの例は、ことごとく香とともに表現している。

また、王維の「洛陽女兒行」(趙注本卷六)に「良人玉勒乘馳馬、侍女金

盤鱸鯉魚」(良人 玉勒 馳馬に乗り、侍女 金盤 鯉魚を鱸にす)といい、崔顥の「邯鄲宮人怨」(『全唐詩』卷一三〇)に「同時侍女見讒毀、後來新人莫敢言」(同時の侍女 讒毀せられ、後來の新人 敢えて言う莫し)という例は、樂府に用いられた例。前者は洛陽の貴族の女性の世話係、後者は宮中の女性に対して用いている。

杜甫には例がなく、張籍には他に二例、いずれも徒詩における例。一例を挙げれば、宝曆元年(八二五)の466「祭退之」(卷七)に「乃出二侍女、合弹琵琶箏」(乃ち二侍女を出だし、琵琶と箏とを合弾せしむ)という。前年の長慶四年(八二四)八月十六日夜、長安靖安坊の韓愈の屋敷を訪れて歓待を受けたことを懐かしんだ句。

「焚香」香を焚く。

これも一般的なことばのようなのだが、古い例は見当たらない。唐までの詩にも例がないようだが、唐に入って、膨大な数の例が現れるようになる。張九齡の「祠紫蓋山、經玉泉山寺」(『全唐詩』卷四九)に「焚香懺在昔、礼足誓来今」(香を焚きて 在昔を懺い、足に礼して 来今を誓う)という例や、『三体詩』にも収める皇甫冉の「送延陵陳法師赴上元」(『全唐詩』卷二五〇)に「遍礼南朝寺、焚香古像前」(遍く南朝の寺に礼し、香を焚く 古像の前)という例のように、仏教または道教に関わる例が多いが、杜甫に三例あるうち、「曲江对雨」(『詳註』卷六)に「竜武新軍深駐輦、芙蓉別殿謾焚香」(竜武の新軍 深く輦を駐め、芙蓉の別殿 謾りに香を焚く)という例などは、宮殿で香を焚く例である。

張籍には他に五例、いずれも仏教または道教に関わる例のようである。一例を挙げれば、114「和裴司空業習静寄所知」(卷二)に「幽室独焚香、清晨下未央」(幽室 独り香を焚き、清晨 未央に下る)の句がある。習静という道教の修養の様子を詠じた例。

十句にわたって宮殿内での楚王の様子を描く部分の第二聯。前の二句で奥へと進むことを暗示したのを承けて、ここでは奥へと到着して車を降り、着物を着替えて宮女たちの待つ部屋へと入る様子が描かれる。入ってみると宮女たちはみな香を焚いており、楚王を迎える準備は整っている。これから楽しい夜のひとときとなるのである。

11・12 玉階羅幃微有霜、齊言此夕樂未央

〔玉階〕玉でできたりつばな階段。宮中の階段。

班固の「西都賦」(『文選』卷一)に、長安城の後宮を描写して「於是玄墀鉞砌、玉階彤庭」(是に於いて玄墀鉞砌、玉階彤庭あり)という例があり、張衡の「思立賦」(『文選』卷一五)には、朝廷で働きたいという思いを「蹈玉階之嶢嶢」(玉階の嶢嶢たるを蹈む)と表現し、その旧注に「玉階、天子階也」(玉階は、天子の階なり)という。

これらの例よりもさらに重要なのは、班婕妤の「自悼(傷)賦」(『漢書』外戚伝下)に「華殿塵兮玉階落、中庭萋兮綠草生」(華殿塵ありて 玉階落むし、中庭萋として 綠草生ず)の句があり、これが例えば陸機の「班婕妤」(『樂府詩集』卷四三)に「寄情在玉階、託意惟团扇」(情を寄せて 玉階に在り、意を託するは 惟れ团扇)といい、謝朓の作(『玉臺新詠』卷一〇)で有名な「玉階怨」の樂府題を生むなど、宮怨詩の詩語として、後世に大きな影響を与えていることであろう。

唐に入っても、単に宮中の階段としての用例のほかに、沈佺期の「長門怨」(『全唐詩』卷九六)に「玉階聞墜葉、羅幌見飛螢」(玉階 墜葉を聞き、羅幌 飛螢を見る)といい、陳注も引く李白の有名な「玉階怨」(王琦注本卷五)に「玉階生白露、夜久侵羅襪」(玉階に 白露生じ、夜久しくして 羅襪を侵す)というなど、宮怨詩における用例も多い。

ここでは宮怨の情ではないが、前の部分で宮女を詠じたのを承けて、それらの女性がいるのにふさわしい場所として「玉階」の語を用いたのである。杜甫には例がなく、張籍にはもう一例。444「惜花」(卷七)に「日暮東風起、飄揚玉階側」(日暮 東風起こり、飄揚す 玉階の側)の句がある。これは宮中には限定されないようだが、やはり女性の思いを詠じた詩のようである。

〔羅幃〕うすぎぬのとばり。「幃」は「帷」に通ずる。

「羅幃」では古い用例はないが、「羅帷」の方は、先に「洞房」の例に挙げた宋玉の「風賦」(前出)にも「羅帷を躋り」の句があり、「傷歌行」古辞(『文選』卷二七)に「微風吹闥闔、羅帷自飄颻」という例があるなど、古くから多くの用例がある。

「羅」を用いる詩語は班婕妤を詠じた詩や宮怨詩によく用いられ、謝朓の「玉階怨」(前出)にも「長夜縫羅衣、思君此何極」(長夜 羅衣を縫う、君を思いて 此に何ぞ極まらん)の句があるが、先に挙げた沈佺期の「長門怨」(前出)には「羅幌」、李白の「玉階怨」には「羅襪」の語が見えていた。

「羅幃」・「羅帷」も、唐までの詩では、梁の元帝の「班婕妤」(『樂府詩集』卷四三)に「婕妤初選入、含媚向羅幃」(婕妤 初めて選ばれて入り、媚を含んで 羅幃に向かう)といい、梁の張率の「擬樂府長相思二首」其二(『玉

臺新詠』卷九)に「玉階月夕映羅帷、羅帷風夜吹」(玉階 月夕べにして 羅帷に映じ、羅帷 風夜に吹く)というなどの例がある。後者はこのこと同じく「玉階」の詩語とともに用いている。

唐に入っても、王維の「班婕妤三首」其一(趙注本卷一三)に「秋夜守羅帷、孤灯耿不滅」(秋夜 羅帷を守り、孤灯 耿として滅せず)といい、権徳輿の「秋閨月」(『全唐詩』卷二八)に「露濃香逕和愁坐、風動羅幃照独眠」(露は香逕に濃やかにして 愁坐に和し、風は羅幃を動かして 独眠を照らす)というなど、多くの例がある。

杜甫には「羅幃」「羅帷」ともに用例がなく、張籍の例はこれのみ。百名家全集本・『唐文粹』・『樂府詩集』・『全唐詩』等は「羅幕」に作っている。

「羅幕」であれば、うすぎぬの垂れ幕。

唐までの詩においては、陸機の「君子有所思行」(『文選』卷二八)に、豪華な邸宅を描写して「邃宇列綺牖、蘭室接羅幕」(邃宇 綺牖を列ね、蘭室 羅幕を接く)といい、王筠の「楚妃吟」(『樂府詩集』卷二九)に「春遊方有樂、沈沈下羅幕」(春遊 方に楽しみ有り、沈沈として 羅幕を下す)というなどの例がある。後者は楚の宮殿を舞台にして宮女の楽しみを詠じた例のようである。

唐に入り、王無兢の「銅雀臺」(『全唐詩』卷六七)に「長袖扞玉塵、遺情結羅幕」(長袖 玉塵を扞い、遺情 羅幕に結ぶ)といい、崔国輔の「怨詞二首」其二(『全唐詩』卷一九)に「織錦猶未成、蛩声入羅幕」(錦を織るも 猶お未だ成らざるに、蛩声 羅幕に入る)というなどの用例がある。前者は魏の銅雀台の宮女の思いを詠じた宮怨詩の例、後者は夫を思いつつ冬の衣を織る女性を詠じた閨怨詩の例である。また、先に「燭籠」の語釈に引いた李賀の詩にも見えていた。

杜甫には例がなく、張籍には他に例がない。

〔微有霜〕かすかに霜が降りている。百名家集本および『全唐詩』注に引く異本では「似有霜」に作る。こちらであれば、霜が降りているようだ、の意となる。

班婕妤が秋になって捨てられる团扇に思いを託した「怨歌行」(『文選』卷二七)に、その素材を「新裂齐纨素、皎潔如霜雪」(新たに齐の纨素を裂けば、皎潔にして 霜雪の如し)と詠じており、また、团扇が不要になる秋の風物であることもあつてか、霜も班婕妤を詠じた詩や宮怨詩によく用いられる題材である。

唐までの詩においては、梁の簡文帝の「秋閨夜思」(『玉臺新詠』卷七)に

「初霜隕細葉、秋風驅乱蛩」(初霜 細葉を隕とし、秋風 乱蛩を驅る)と
いい、同じく簡文帝の「怨歌行」(『玉臺新詠』卷七)に「秋風吹海水、寒霜
依玉除」(秋風 海水を吹き、寒霜 玉除に依る)というなどの例がある。
いずれも宮怨詩の例で、後者は「玉除」すなわち玉の階段とともに詠じてい
る。

唐詩においても、王昌齡の「長信秋詞五首」其一(『全唐詩』卷一八四)に
「金井梧桐秋葉黃、珠簾不捲夜來霜」(金井の梧桐 秋葉黄ばみ、珠簾捲
かずして 夜來霜あり)といい、李白の「長信宮」(王琦注本卷二五)に「月
皎昭陽殿、霜清長信宮」(月は皎し 昭陽殿、霜は清し 長信宮)というな
ど、多くの用例がある。

杜甫は詩中に「霜」字の用例がおよそ百例あるが、詩題中に「怨」字の用
例がないことからもうかがえるように、閨怨詩をほとんど残していないため
か、宮中の女性と関連させて霜を詠じた例はないようだ。ただ、「大曆二年
九月三十日」(『詳註』卷二〇)に「瘴餘夔子国、霜薄楚王宮」(瘴は餘る
夔子の国、霜は薄し 楚王の宮)という例は、楚の宮殿と関連させて詠じた
例。

張籍には「霜」字の用例は一一例、宮女と関連する例はこれのみ。なお、
「霜草」の詩語が27「関山月」(卷一)に、「霜滿路」・「車上霜」の表現が32
「羈旅行」(卷一)に見えた。

「齊言」ここでは、等しく言う、皆が口をそろえて言うの意であろう。

『春秋』襄公二十七年の『左伝』に「是夜也、趙孟及子皙盟、以齊言」(是
の夜や、趙孟及び子皙盟し、以て言を齊う)という例は、晋の趙孟と楚の
子皙が、正式の盟の時に結ぶことばを前もって調整したことを述べた例。こ
ことは少しニュアンスが異なるが、「齊」を等しい(等しくする)の意味で
用いている点では共通している。

その他の用例は、「齊言行」の形で言行を一致させるという意味の例を除
けば、齊の地方のことばを話すという用例がほとんどである。また、唐以前
の詩・『全唐詩』を通じて、この例以外には用例が見当たらない。

「此夕樂未央」今夜の楽しみは尽きることがない。

「夕」は夕方だけでなく広く夜を指す。「此夕」の表現、よく見られそう
な表現であるが、よく似た「今夕」の表現が唐風「綢繆」に「今夕何夕、見
此良人」(今夕 何の夕べぞ、此の良人を見る)というほか『毛詩』の中に
数例見えるなど、古くから多くの詩に用いられているためか(特に杜甫の「贈
衛八処士」(『詳註』卷六)に「今夕復何夕、共此灯燭光」(今夕 復た何の

夕べぞ、此の灯燭の光を共にす)という例は名高い)、あまり例が見えない。

唐までの詩では、梁の鄧鏗の「月夜閨中詩」(『藝文類聚』卷三二)に「誰
能当此夕、独処類倡家」(誰か能く 此の夕べに当たり、独り処ること 倡
家に類せん)といい、北齊の魏収の「月下秋宴詩」(『初学記』卷一四)に「此
夕具言宴、月照露華浮」(此の夕べ 具えて言に宴し、月照らし 露華浮か
ぶ)というほか数例が見える。前者は閨怨詩における例。

唐に入るとやや用例が増え、鄭世翼の「看新婚」(『全唐詩』卷三八)に「姮
娥对此夕、何用久裴回」(姮娥 此の夕べに對し、何ぞ用いん 久しく裴回
するを)といい、崔顥の「七夕」(『全唐詩』卷一三〇)に「班姬此夕愁無限、
河漢三更看斗牛」(班姬 此の夕べ 愁い限り無し、河漢 三更 斗牛を看
る)というなどの例がある。後者は班婕妤の故事を詠じている。

杜甫には用例がないが、『詳註』の校語によれば、先に引いた「贈衛八処
士」の例は一本「此夕」に作るといふ。張籍にはもう一例、73「山中秋夜」
(卷二)に「西峰採葉伴、此夕恨無期」(西峰 採葉の伴、此の夕べ 期無
きを恨む)の句がある。

「未央」は李冬生注に、『毛詩』小雅「庭燎」に「夜如何其、夜未央」(夜如何、
夜未だ央けず)といい、その毛伝に「央、且也」(央は、且なり)というの
を引いて、夜が明けなことをし、さらに『楚辞』離騷に、「及年歲之未晏
兮、時亦猶其未央」(年歳の未だ晏からず、時も亦た猶お其れ未だ央ぎざる
に及ぶ)といい、王逸注に、「央、尽也」(央は、尽きるなり)というのを引
いて、尽きないの意味でも解せるとする。後の例にみるように、夜に限らず
用いられているので、楽しみが尽きないの意で解する方がよいようだ。

陳注は、劉楨の「公讌詩」(『文選』卷二〇)に「永日行遊戲、歡樂猶未央」
(永日 行くゆく遊戲するも、歡樂 猶お未だ央ぎず)という例を引くが、
「樂未央」の形の例も古くから数多く見える。

いくつか例を挙げれば、「怨詩行」古辞(『樂府詩集』卷四一)に「人間樂
未央、忽然歸東嶽」(人間 楽しみ未だ央ぎざるに、忽然として 東嶽に歸
す)といい、曹丕の「大牆上蒿行」(『樂府詩集』卷三九)に「今日樂、不可
忘、樂未央」(今日の楽しみ、忘るべからず、楽しみ未だ央ぎず)という。
後者の例は直前まで宴席の描写が続いており、この詩や劉楨の例と同じよう
に、宴席の楽しみが尽きないことをいう例。

他に、鮑照の「代白紵辭二首」其一(『玉臺新詠』卷九)に「北風驅雁
天雨霜、夜長酒多樂未央」(北風 雁を驅り 天霜を雨らすも、夜長く 酒
多くして 楽しみ未だ央ぎず)といい、王融の「秋夜」(『玉臺新詠』卷一〇)
に「秋夜長復長、夜長樂未央」(秋夜 長く復た長く、夜長くして 楽しみ
未だ央ぎず)というなどの例は、夜宴の楽しみをいう例である。

唐に入ると用例の数は少なくなるが、盧照隣の「登封大酺歌四首」其一（『全唐詩』卷四二）に「九州四海常無事、万歳千秋樂未央」（九州四海 常に事無く、万歳千秋 樂しみ未だ央きず）といい、馬懷素の「奉和幸安樂公主山莊心制」（『全唐詩』卷九三）に「主家臺沼勝平陽、帝幸欽娛樂未央」（主家の臺沼 平陽に勝り、帝幸して欽娛し 樂しみ未だ央きず）というなどの例が見えている。いずれも天子の樂しみをいう例。杜甫には用例がなく、張籍の例はこれのみ。

十句にわたって宮殿内での楚王の様子を描く部分の第三聯。すでに触れたように、前の句には宮怨詩によく用いられる詩語が多用されているが、宮女の孤独や寂しさを象徴する霜が「微かに有り」または「有るに似たり」と表現されているように、ここでは「怨」の情は稀薄であり、宮怨詩を背景に持つことを重視して解釈するならば、怨みつつ待っていた王がやってきた喜びへと転換されているといえるだろう。夜が更けて玉階に霜は降りていても、羅幃（幕）の中は暖かで心地よいのである。後の句はそれを承け、宮女たちが口をそろえて、今宵の樂しみはまだ終わりではないと述べることを詠ずる。「お樂しみはこれからだ」というわけで、美女との樂しみを詠じたこの二句は、次の句の酒宴の描写へと繋がっていく。

13・14 玉酒湛湛盈華觴、糸竹次第鳴中堂

〔玉酒〕古くは東方朔の『十洲記』（『後漢書』張衡列伝注・『藝文類聚』卷九・七二等に引く）に「瀛洲、在東海之東。上生神芝仙草、有玉石膏出泉如酒味。名之為玉酒、飲之令人長生」（瀛洲は、東海の東に在り。上に神芝仙草を生じ、玉石膏の泉を出でて酒の味の如き有り。之を名づけて玉酒と為し、之を飲めば人をして長生せしむ）と見える、一種の仙酒の名称だが、ここでは酒の美称として用いられている。美酒、うまざけ。

古い詩文には用例が見えないように、陳注も引く陳の張正見の「對酒」（『文苑英華』卷一九五）に「當歌對玉酒、匡坐酌金壘」（當に歌うべし 玉酒に對す、匡坐して 金壘を酌む）という例や、同じく陳の江總の「為姬人怨服散詩」（『藝文類聚』卷三二）に「金丹欲成猶百鍊、玉酒新熟幾千年」（金丹成らんと欲して 猶お百鍊し、玉酒 新たに熟して 幾んど千年）というなどの例が古いものようである。後者は仙酒のイメージで用いられているようだ。唐までの詩にはこの二例のみ。

唐に入っても、あまり用例は見当たらず、『全唐詩』にも六例が見えるのみ。張籍に先立つものとしては、太宗の「帝京篇十首」其八（『全唐詩』卷

一）に「玉酒泛雲壘、蘭殺陳綺席」（玉酒 雲壘に泛かべ、蘭殺 綺席に陳ぬ）といい、李適の「侍宴安樂公主新宅心制」（『全唐詩』卷七〇）に「銀河半倚鳳皇臺、玉酒相伝鸚鵡杯」（銀河 半ば倚る 鳳皇の臺、玉酒 相伝う 鸚鵡の杯）というなどの例が挙げられる。ともに皇帝や皇族の宴席の酒を「玉酒」と表現した例。杜甫には用例がなく、張籍にはこの例のみ。

〔湛湛〕さまざまな形容に用いられるようだが、ここでは液体が深く満ちている形容、または清らかに澄んでいる形容であろう。

古くは陳注も引く『毛詩』小雅「湛露」に「湛湛露斯、匪陽不晞」（湛湛たる露、陽に匪ずんば晞かず）という。これは毛伝に「露茂盛貌」（露の茂盛なる貌）というように、露が盛んに降りている形容。また、『楚辭』にも、招魂に「湛湛江水兮上有楓、目極千里兮傷春心」（湛湛たる江水 上に楓有り、目は千里を極めて 春心を傷ましむ）というなど、数例が見える。この例の場合、王逸注が「湛湛江水、浸潤楓木、使之茂盛」（湛湛たる江水、楓木を浸し潤し、之をして茂盛ならしむ）と言い換えるように、川が水を深くたたえている形容のようである。

李冬生注は陸機の「大暮賦」（『藝文類聚』卷三四）に、「肴饌其不毀、酒湛湛而每盈」（肴は饌として 其れ毀たず、酒は湛湛として 毎に盈つ）というのを引いている。酒を描写した例。

唐までの詩においては、阮籍の「詠懷詩十七首」其一七（『文選』卷二三）に、招魂に基づいて「湛湛長江水、上有楓樹林」（湛湛たり 長江の水、上に楓樹の林有り）と、水をたたえた長江を詠ずる句があるほか、沈約の「梁三朝雅樂歌」の「介雅」三曲其三（『隋書』音樂志上）に「玉壘信湛湛、金卮頗搖漾」（玉壘 信に湛湛たり、金卮 頗る揺漾たり）という例は、酒に関して表現した例である。

唐に入り、陳子良の「讀德上越國公楊素」（『全唐詩』卷三九）に「金樽酌湛湛、歌扇掩盈盈」（金樽 酌みて湛湛たり、歌扇 掩いて盈盈たり）といい、韋応物の「酬李儋」（『韋応物集校注』卷五）に「湛湛樽中酒、青青芳樹園」（湛湛たり 樽中の酒、青青たり 芳樹の園）というなどの例は、酒について用いた例である。

この「湛湛」について、李冬生注と李建崑注は、ともに清らかに澄み切った形容としており、以上の例も、澄んでいる形容とも深くたたえている形容とも解しうるようだ。ただ、確かに清らかに澄んでいるからこそ、底が見えて深さを感じることができるのであるが、川底を浅く流れる川や、杯に少しだけついた酒を表現するにはふさわしくないことばのようであり、やはり

満々とたたえている方に中心があると思われる。ここでは、その意味で訳しておいた。

杜甫には一例、「梅雨」(『詳註』巻九)に「湛湛長江去、冥冥細雨來」(湛湛として 長江去り、冥冥として 細雨來たる)の句がある。ただし、『詳註』の校語に「一作黓黓」(一に黓黓に作る)といい、文字の異同がある例である。張籍にはほかに用例がない。

〔盈華觴〕美しい杯を満たしている。

「華觴」は杯の美称であろう。「觴」はさかずき。李冬生注が『礼記』投壺に「命酌曰、請行觴」(酌に命じて曰く、請う 觴を行えと)という例を引くように、古くから用いられる文字。

ただ、「華觴」の語は珍しいようで、唐以前の用例は見当たらないようだ。『全唐詩』にも六例のみ、張籍より前の例は、韋応物に四例見えるのみ。一例を挙げれば、「贈馮著」(『韋応物集校注』巻二)に「華觴発歎顔、嘉藻播清風」(華觴 歎顔を発し、嘉藻 清風を播く)という句がある。馮著とともに酌み交わす酒を「華觴」と表現したものの。

張籍にはこの例のみ、『全唐詩』のもう一例は後の許渾の例。

〔糸竹〕管楽器と弦楽器、また管弦の調べ。

李冬生注も引く『礼記』楽記に「金石糸竹、樂之器也」(金石糸竹は、樂の器なり)と見える、古くから用いられる常見の語。

唐までの詩にも、蘇武の作とされる「詩四首」其二(『文選』巻二九)に、「糸竹厲清声、慷慨有餘哀」(糸竹は 清声を厲しくし、慷慨して 餘哀有り)といい、鮑照の「東門行」(『文選』巻二八)に「糸竹徒満坐、憂人不解顔」(糸竹 徒らに坐に満つるも、憂人 顔を解かず)というなど、数多くの用例が見える。

唐に入っても、太宗の「元日」(『全唐詩』巻一)に「霜戟列丹陛、糸竹韻長廊」(霜戟 丹陛に列なり、糸竹 長廊に韻く)といい、張謂の「送盧奉使河源」(『全唐詩』巻一九七)に「長路関山何日尽、満堂糸竹為君愁」(長路 関山 何れの日にか尽きん、満堂の糸竹 君が為に愁う)というなど、用例は非常に多い。前者はこと同じく宮中の音楽を「糸竹」で表現した例、後者は『唐詩選』にも収められて名高い例(ただし、『全唐詩』注によれば「糸管」に作るテキストもあるようだ)。

ただし、杜甫には用例がないようで、張籍にはもう一例のみ、436「送遠曲」(巻七)に「吟糸竹、鳴笙簧、酒酣性逸歌猖狂」(糸竹を吟ぜしめ、笙簧を鳴らし、酒酣に 性逸にして 歌いて猖狂す)という。別離の宴で演奏さ

れる音楽に用いた例。

〔次第〕順序。ここでは順序よく、順番に従つての意。

経書や先秦諸子の書には見えないようだが、『戦国策』韓策一に見える、昭侯が申不害に述べたことばに「子嘗教寡人循功勞、視次第」(子嘗て寡人に功勞に循い、次第を視よと教う)とあるなど、古くから用いられることば。ただ、唐までの詩には二例、劉楨の「贈徐幹」(『文選』巻二三)に「起坐失次第、一日三四遷」(起坐 次第を失い、一日 三四たび遷る)といい、周捨の「上雲樂」(『樂府詩集』巻五一)に「乃欲次第説、老耄多所忘」(乃ち次第に説かんと欲するも、老耄 忘るる所多し)という例があるのみ。後者はこと同じく順序だてての意。

唐に入つて用例が増え、王維の「過廬四員外宅、看飯僧共題」(趙注本巻一一)に「身逐因縁法、心過次第禪」(身は因縁の法を逐い、心は次第の禪を過ぐ)といい、李白の「寄東魯二稚子」(王琦注本巻一三)に「念此失次第、肝腸日憂煎」(此を念えば 次第を失い、肝腸 日に憂い煎む)というなどの例が見えるようになる。前者はいわゆる漸悟を「次第の禪」と表現した例、後者は劉楨の表現に基づいた例。

杜甫に一例、「哭李常侍嶧二首」其二(『詳註』巻二二)に「次第尋書札、呼兒檢贈詩」(次第 書札を尋ね、兒を呼びて 贈詩を檢せしむ)という。こと同じく順番通りにの意。

張籍にはほかに一例、95「舟行寄李湖州」(巻二)に「客愁無次第、川路重辛勤」(客愁 次第無く、川路 辛勤を重ね)という。こちらは順序の意味の例。

〔鳴中堂〕宮殿の中央で鳴らされる。

「中堂」は『儀礼』聘礼に「公側襲、受玉于中堂与東楹之間」(公側り襲し、玉を中堂と東楹との間に受く)と見える古いことば。この場合は、諸侯が使者を迎える儀式が行われる場所を表現した例。

また、張衡の「西京賦」(『文選』巻二)にも、天子が後宮の女性と楽しむにふけることを描写する部分に「促中堂之陋坐、羽觴行而無筭」(中堂の陋坐を促し、羽觴行りて筭うる無し)という表現があり、その薛綜の注には「中堂、中央也」(中堂は、中央なり)という。

唐以前の詩にも用例が多く見えるうち、劉楨の「贈五官中郎將四首」其一(『文選』巻二三)に「清歌製妙声、万舞在中堂」(清歌 妙声を製し、万舞 中堂に在り)といい、陳注も引く謝瞻の「九日従宋公戲馬臺集送孔令詩」(『文選』巻二〇)に「四筵霑芳醴、中堂起系桐」(四筵 芳醴に霑い、中

堂（糸桐を起こす）という例は、いずれも宮中（謝瞻の場合は行宮としての戯馬台）における宴会の描写で、歌舞が行われる場所として「中堂」の語が用いられている。

唐に入ると、あまり用いられなくなるようだが、元万頃の「奉和春日二首」其二（『全唐詩』巻四四）に「中堂促管淹春望、後殿清歌開夜扉」（中堂 管を促して 春望を淹しくし、後殿 清歌して 夜扉を開く）といい、李白の「門有車馬客行」（王琦注本巻五）に「呼兒掃中堂、坐客論悲辛」（兒を呼びて 中堂を掃わしめ、客を坐せしめて 悲辛を論ず）というなどの用例が見える。後者は士大夫の家という例だが、前者は宮中をいう例で、歌舞の催される場所として用いられている。

杜甫は白居易と並んで『全唐詩』中に最多の四例を残す。そのうち大作「自京赴奉先県詠懷五百字」（『詳註』巻四）に「中堂有神仙、煙霧蒙玉質」（中堂に 神仙有り、煙霧 玉質を蒙う）という例は、「有」を「舞」に作るテキストがあり、こちらの方が優れるとされるが（吉川幸次郎『杜甫詩注』第一冊、五四四頁。筑摩書房、一九七七年）、そうであれば、貴族の家ではあるが歌舞の場所として詠じた例ということになる。

張籍にもう一例、446「学仙」（巻七）に「先生坐中堂、弟子跪四廂」（先生 中堂に坐し、弟子 四廂に跪く）という。仙道を学ぶ人物の家についていう例。

十句にわたって宮殿内での楚王の様子を描く部分の第四聯。前の二句で宮女たちが楽しみは終わらないと述べたのを承け、酒と音楽が詠じられた二句。美酒がりっぱなさかずきに注がれ、宮殿の中央で音楽が順序通りに演奏される。美しい詩語が用いられ、豪華な楽しみが描かれた二句といえよう。ここで音楽の演奏が描かれて、次の二句の踊りの描写を引き出している。なお、「次第」という表現は、前の「楽未央」を承け、順序通り長々と演奏されて、夜の楽しみが続くということを暗示しているのかもしれない。

15・16 巴姫起舞向君王、迴身垂手結明璫

「巴姫」巴の国の美女。後に引く詩文の例に見えるように、歌舞の巧みな女性というイメージがあったようである。

李冬生注が『読史方輿紀要』四川・夔州府の「禹貢荊・梁二州之域、春秋為庸国地、後属巴国、戦国時属楚」（禹貢の荊・梁二州の域、春秋には庸国の地為り、後に巴国に属し、戦国の時は楚に属す）という記述を引いているように、巴は楚に属していた。

ここでは『春秋』昭公十三年の『左伝』に見える、楚の共王と巴姫の逸話を意識していると思われる。嫡子のいなかった共王は、寵妾の産んだ五人の子のうち誰を世継ぎとするか迷い、璧を供えて山川を祭り、その璧の上に立つ者を世継ぎにすることを祈った。そして、「既乃与巴姫密理璧於大室之庭、使五人齐而长入拜」（既にして乃ち巴姫と密かに璧を大室の庭に埋め、五人をして斉して長より入りて拜せしむ）。こうして五人の子が大庭すなわち祖廟で拜したが、後の康王は璧をまたいで通り過ぎ、後の靈王は拜したひじが璧に触れ、子干と子皙の二人は璧から遠く、平王は拜するたびに璧の中心の紐に触れた。それぞれの動作が後の五人の運命を表していたという話である。

この話は『史記』楚世家にも見えるもので、ここで巴姫は大した役割は果たしていないが、『左伝』杜預の注にも『史記集解』に引く賈逵の注にも「共王妾」（共王の妾なり）と注されており、楚の王が寵愛した女性ということに張籍は用いたのであろう。

巴姫が文学作品に用いられた例としては、左思の「蜀都賦」（『文選』巻四）に、蜀の豪族たちの遊宴を描写して、「巴姫弾弦、漢女撃節」（巴姫 弦を弾じ、漢女 節を撃つ）という部分がある。

唐までの詩においては、沈約の「君子有所思行」（『藝文類聚』巻四一）に「巴姫幽蘭奏、鄭女陽春絃」（巴姫 幽蘭の奏、鄭女 陽春の絃）といい、蕭子顯の「代美女篇」（『玉臺新詠』巻八）に「邯鄲豔輟舞、巴姫請罷絃」（邯鄲 豔く舞いを輟め、巴姫 絃を罷めんことを請う）という、二例の用例が見える。いずれも音楽を演奏する女性を表現した例。

ただ、唐に入ると用いられなくなり、『全唐詩』にはこの例一例のみのものである。

「起舞向君王」立ち上がり、楚王に向かって踊る。

「起舞」は立ち上がって舞うこと。21「讌客詞」（巻一）に「人人齐醉起舞時、誰覺翻衣与倒幘」（人人 齊しく酔い 起ちて舞う時、誰か覺えん衣を翻すと幘を倒すとを）の句があった。その【語釈】にいくつか用例を引いたが、その内容に合わせて男性の例のみを挙げたので、ここでは女性について用いた例を一例補っておこう。戴叔倫の「白苧詞」（『全唐詩』巻二七三）に呉王の宮殿で舞う女性を描いて、「美人不眠憐夜永、起舞亭亭乱花影」（美人 眠らず 夜の永きを憐れみ、起ちて舞うこと亭亭として 花影を乱す）という句がある。

「君王」はすでに第四句に見えた。

〔迴身〕身をめぐらす。体を回転させる。ここでは踊る時の動作。

古く後漢の傅毅の舞賦(『文選』卷一七)に、「及至迴身還入、迫於急節」(身を迴らして還り入り、急節に迫るに及至ぶ)という、舞いの描写に用いられた例がある。

唐までの詩における用例のうち、古く王粲の「從軍詩五首」其三(『文選』卷二七)に「迴身赴床寝、此愁当告誰」(身を迴らして床寝に赴き、此の愁い 当誰にか告げん)という例があるが、舞いの表現ではない。舞いの表現としては、梁の劉孝儀の「又和(和舞)詩」(『藝文類聚』卷四三)に「度行過接手、迴身乍斂裾」(行を度りて過ぎて手を接ね、身を迴らして乍ち裾を斂む)の句がある。

唐に入ってから、初唐には例がないようだが、盛唐では、王昌齡の「城傍曲」(『全唐詩』卷一四一)に「射殺空營兩騰虎、迴身卻月佩弓弰」(空營に射殺す 兩騰の虎、身を迴らして 卻月 弓弰を佩ぶ)といい、李白の「送長沙陳太守二首」其二(王琦注本卷一七)に「定王垂舞袖、地窄不迴身」(定王 舞袖を垂れ、地窄くして 身を迴らさず)というなどの例がある。後者は否定の形ではあるが、舞いについての例。

杜甫に一例、「送李校書二十六韻」(『詳註』卷六)に「迴身視綠野、慘澹如荒沢」(身を迴らして 緑野を視れば、慘澹として 荒沢の如し)という。張籍の例はこれのみ。

〔垂手〕手を垂れることであるが、動作と舞曲の名をかけた表現となっている。陳注も、樂府に大小の垂手があると述べた後、「言舞状也」(舞いの状を言うなり)という。すぐ上に「迴身」とあるのを承けて、手を垂れるという動作を表すと同時に舞曲の名を表現しているよう。

『樂府詩集』卷七六、雜曲歌辭「大垂手」の条に引く『樂府解題』に「大垂手・小垂手、皆言舞而垂其手也」(大垂手・小垂手は、皆な舞いて其の手を垂るるを言うなり)と説明している。なお、『樂府詩集』には梁の吳均の「大垂手」(『玉臺新詠』卷七は梁の簡文帝の「賦樂府得大垂手」とする)と唐の聶夷中の同題の作、吳均の「小垂手」を載せている。

この曲名が詩中に用いられた例としては、唐までの詩では、北周の王褒の「高句麗」(『樂府詩集』卷七八)に「傾杯覆盃灌灌、垂手奮袖娑娑」(杯を傾け 盃を覆して 灌灌たり、手を垂らし 袖を奮いて 娑娑たり)といひ、陳の江総の「婦病行」(『樂府詩集』卷三八)に「夫婿府中趨、誰能大垂手」(夫婿 府中に趨く、誰か大垂手を能くす)というなどの例がある。前者は単に手を垂れる動作をいうものとも考えられるが、作者の王褒には別の詩で明らかに曲名と思われる例があるので(『樂府詩集』卷二八「日出東南

隅行)」、ここと同じく動作と曲名をかけた表現と解してみた。

唐に入り、曲名と思われる例には、王翰の「子夜春歌」(『全唐詩』卷一五六)に「行行小垂手、日暮渭川陽」(行き行きて 小垂手し、日は暮る 渭川の陽)といひ、李白の「經亂離後、天恩流夜郎、憶旧遊書懷、贈江夏韋太守良宰」(王琦注本卷一一)に「对客小垂手、羅衣舞春風」(客に対す 小垂手、羅衣 春風に舞う)という例などがある。杜甫には例がなく、張籍の例はこれのみ。

〔結明璫〕きれいな耳飾りをしている。「璫」は耳飾り、イヤリング。「結」はイヤリングを耳につけていることを指しているのだから、踊りの描写の中にイヤリングが詠じられているということは、踊りによってそれが揺れることを暗示していると思われるので、口語訳では上とのつながりから「揺れる」としておいた。

李冬生注も引く曹植の「洛神賦」(『文選』卷一九)に「無微情以效愛兮、献江南之明璫」(微情の以て愛を效す無ければ、江南の明璫を献ず)といひ、李善は服虔の『通俗文』に「耳珠曰璫」(耳の珠を璫と曰う)といひのを引く。

唐までの詩においては、漢の「艶歌」(『古詩類苑』卷三三)に「姮娥垂明璫、織女奉瑛珞」(姮娥 明璫を垂れ、織女 瑛珞を奉ず)といひ、陳注も引く江総の「宛轉歌」(『樂府詩集』卷六〇)に「宿处留嬌隨黃珮、鏡前含笑弄明璫」(宿る处 嬌を留めて 黄珮を墮とし、鏡前 笑いを含んで 明璫を弄す)というなどの用例がある。

唐詩においては、董思恭の「三婦艶」(『全唐詩』卷六三)に「大婦裁紈素、中婦弄明璫」(大婦は 紈素を裁ち、中婦は 明璫を弄す)といひ、李端の「襄陽曲」(『全唐詩』卷二八四)に「雀釵翠羽動明璫、欲出不出脂粉香」(雀釵 翠羽 明璫を動かし、出でんと欲して出でず 脂粉香る)というなどの例が見える。

杜甫には例がなく、張籍の例はこの例のみ。

十句にわたって宮殿内での楚王の様子を描いた部分の最後の聯。前の部分で音楽が描写されたのを承けて、それに合わせて巴の美女が踊る様子が描かれる。「向君王」の表現は、楚王だけのために踊られることが強調されているようだ。身をくねらせ、手を垂れて、耳飾りを揺らす様子は、巴姫の艶麗さを表現しているよう。

17・18 願君千年万年壽、朝出射麋夜飲酒

〔願君千年万年壽〕王の千年万年の長寿を願う。

皇帝の治世や歓樂が長く続くことを願って千年と万年を組み合わせる表現する場合、「千年」と「万年」の語を用いることはあまりないようだ。唐までの詩では、この二つの語を同時に用いる例も見当たらない。『全唐詩』においては、「千年」と「万年」とを同時に用いる例は五例あるが、中唐以前の例はなく、同時期の例が二例、朱湾の「題段上人院壁画古松」〔全唐詩〕卷三〇六に「掃成三寸五寸枝、便是千年万年物」〔掃いて成る 三寸五寸の枝、便是是れ 千年万年の物〕といい、孟郊の「望夫石」〔全唐詩〕卷三七三に「行人悠悠朝与暮、千年万年色如故」〔行人悠悠たり 朝と暮れと、千年万年 色故の如し〕という句があるが、それぞれ松の木と望夫石の永遠性を表現したものである。残る二例も（一例は晩唐の詩人の例、もう一例は五代の時期に出土した年代不明の石刻の例）、皇帝の御代や喜びの継続を願うものではない。

このような場合、先に「未央」の例として引いた盧照隣の「登封大酺歌四首」其一（前出）に「万歳千秋」の語が見えていたように、「万歳」と「千秋」の語を組み合わせて用いることが多いようであり、古く漢の鼓吹曲辞「上之回」〔宋書〕樂志四に「令從百官疾驅馳、千秋万歳樂無極」〔百官をして疾く驅馳せしめ、千秋万歳 樂しみ極まり無し〕という句があり、また張説が「舞馬千秋万歳樂府詞三首」〔全唐詩〕卷八七をを作るなど、その例は枚挙にいとまがない。

ただ、「千年」または「万年」の語のどちらかを用いた例は残されている。

「千年」の方はあまり例は多くないようだが、陳注も引く傳玄の「前有一樽酒行」〔樂府詩集〕卷六五に「同享千年寿、朋来会此堂」〔同に千年の寿を享け、朋来たりて 此の堂に会す〕という例がある。ただし、これは皇帝ではなく友人同士の長寿をいう例。ほかに唐までの詩では、庾信の「周祀円丘歌」の「皇夏（皇帝飲福酒）」〔庾子山集注〕卷六に「洽斯百礼、福以千年」（斯の百礼を洽わせ、福いするに千年を以てす）という例があり、唐詩では「百千年」の形であるが、宗楚客の「奉和聖製喜雪应制」〔全唐詩〕卷四六に「共荷神功万庾積、終朝聖寿百千年」（共に神功を荷いて 万庾積み、終朝 聖寿 百千年なれ）という例がある。

「万年」の方は古くから多くの例があり、『毛詩』では大雅「江漢」に「虎拜稽首、天子万年」（虎 拜稽首す、天子万年）の句があるほか、「君子万年」の句が小雅「瞻彼洛矣」などに繰り返し見え、唐までの詩においても、北魏の節閔帝と薛孝通との聯句（薛孝通担当部分）『北史』薛孝通伝に「既逢堯舜君、願上万年寿」（既に堯舜の君に逢い、上の万年の寿を願う）といい、

隋の「凱樂歌辭三首」其一「述帝德」〔隋書〕音樂志下に「長歌凱樂、天子万年」（凱樂を長歌す、天子万年）というなどの例がある。唐に入っても、劉憲の「奉和聖製幸韋嗣立山莊」に〔全唐詩〕卷七一に「天藻緣情兩曜合、山巖獻寿万年餘」（天藻 情に縁りて 両曜合し、山巖 寿を獻ずること 万年餘り）といい、武平一の「奉和正旦賜幸臣柏葉应制」〔全唐詩〕卷一〇二に「願持柏葉寿、長奉万年歡」（願わくは 柏葉の寿を持し、長く 万年の歡を奉ぜんことを）というなどの例がある。

杜甫には「千年」が四例、「万年」が一例。皇帝の寿命などについて用いた例はないようだ。一例を挙げれば、「赤霄行」〔詳註〕卷一四に「丈夫垂名動万年、記憶細故非高賢」（丈夫 名を垂れて 万年を動かす、細故を記憶するは 高賢に非ず）という句がある。新題樂府の中に用いた例。

張籍にはほかに「千年」が二例、そのうち一例は34「妾薄命」〔卷一〕に「与君一日為夫婦、千年万歳亦相守」（君と 一日 夫婦と為り、千年万歳 亦た相守らん）とよく似た形で見えていた。その【語釈】も参照。「万年」はほかに「千万年」の形で一例、425「短歌行」〔卷七〕に「玉卮盛酒置君前、再拜勸君千万年」（玉卮 酒を盛り 君の前に置き、再拜して 君に勸む 千万年）という例であり、友人に対するものであるが、ことよく似た例である。

〔朝出射麋〕朝には出かけて麋を射る。

麋は大型のシカ。13「猛虎行」〔卷一〕に「向晚一身当道食、山中麋鹿尽無声」（晩に 向として 一身 道に当たりて食らえば、山中の麋鹿 尽く声無し）の句があった。その【語釈】も参照。

「射麋」の語は、用例数はあまり多くないが、古く『春秋』宣公十二年の「左伝」に、「麋興於前、射麋麗龜」（麋 前に興ち、麋を射て龜に麗く）という用例がある。楚の樂伯が晋の鮑癸の軍に追撃される中、たった一本残った矢を、前に立ちふさがった麋に射て、その龜（背骨）に命中させ、この麋を鮑癸に献上することにより追撃を逃れることができたという話でことになる。

また、司馬相如の「子虛賦」〔文選〕卷七では、齊王の狩獵を「掩兔麟鹿、射麋脚麟」（兔を掩い鹿を麟き、麋を射て麟を脚る）と表現している。

唐までの詩には用例がない。『全唐詩』にもほかに三例しか見当たらないようである。張籍以前には二例。崔顥の「贈王威古」〔全唐詩〕卷一三〇に「射麋入深谷、飲馬投荒泉」（麋を射て 深谷に入り、馬に飲いて 荒泉に投ず）といい、杜甫の「從馭次草堂、復至東屯茅屋二首」其二〔詳註〕卷二〇に「山家蒸栗暖、野飯射麋新」（山家 蒸栗暖かく、野飯 射麋新たなり）

という。前者は詩題にいう王戚古とともに狩りをした楽しさを詠じた例、後者は山中における質素だがうまい食事を詠じた例。『全唐詩』における後の一例は、【補】の部分で挙げることにする。

なお、「雲夢」の部分に引いた張籍の⁴³⁷「楚妃怨」(前出)の末尾の二句に、「西江 若し 雲夢の中に翻し、麋鹿 死に尽くせば 応に宮に還るべし」の二句があった。また、「麋」ではないが、同じく「雲夢」の例として引いた陳子昂の「感遇詩三十八首」其二八(前出)に「罌を射る 雲夢の林」の句があった。

〔夜飲酒〕夜には酒を飲む。

「飲酒」の語は口「送遠曲」(巻一)に「戲馬臺南山簇簇、山辺飲酒歌別曲」(戲馬臺の南山簇簇たり、山辺に酒を飲みて 別れの曲を歌う)と見えた。その【語釈】も参照。

「夜飲酒」という表現は、古く『春秋』襄公三十年の『左伝』に「鄭伯有者酒、為窟室、而夜飲酒擊鐘焉」(鄭の伯有 酒を著み、窟室を為りて、夜に酒を飲み鐘を撃つ)と見えるが、唐までの詩・『全唐詩』を通じて、このほかに用例を見ない。

「夜」に「飲」むということについては、先に「湛湛」の用例に引いた『毛詩』小雅「湛露」の直後の句に、「厭厭夜飲、不醉無歸」(厭厭たる夜飲は、酔わずんば 帰る無かれ)の句がある。

唐までの詩においては、夜に形容詞がつく形で謝靈運の「擬魏太子鄴中集詩」八首其二「王粲」(『文選』卷三〇)に「既作長夜飲、豈顧乘日養」(既に長夜の飲を作せば、豈に日に乗ずるの養しみを顧みんや)と見え、また「夜飲」の形でも梁元帝の「劉生詩」(『藝文類聚』卷三三)に「榴花聊夜飲、竹葉解朝醒」(榴花 聊か夜に飲み、竹葉 解く朝に醒む)というなどの例がある。

唐に入ると、宋之問の「夜飲東亭」(『全唐詩』卷五一)・張説の「幽州夜飲」(『全唐詩』卷八七)のように、特に詩題の用例が多く見られるようになる。詩中においても、李頎の「春送從叔遊襄陽」(『全唐詩』卷一三二)に「春衣采洲路、夜飲南陽城」(春衣 采洲の路、夜飲 南陽の城)といい、王昌齡の「長信秋詞五首」其四(『全唐詩』卷一四三)に「火照西宮知夜飲、分明複道奉恩時」(火は西宮を照らして 夜飲を知る、分明なり 複道に恩を奉ずるの時)というなどの例が見えている。

杜甫には「夜飲」の例はなく、張籍にはもう一例、149「和左司元郎中秋居十首」其六(巻二)に「秋茶莫夜飲、新自作松漿」(秋茶 夜に飲む莫かれ、新たに自ら松漿を作らん)という。酒ではなく茶を飲む例で、否定の形で用

いられている。

換韻されて二句一まとまりとなった結び。前の部分全体を承けて、楚王の寿命が幾千年幾万年と続き、朝には出かけて鹿狩りを行い、夜には帰ってきて酒宴を開くというこの楽しみを、永遠に続けてほしいという願いが述べられる。前の部分から続いて、楚王の宮女たちの願いとも解釈しうるし、換韻されて独立した、詩の語り手の願いとも解釈できよう。この二句が何を表現しようとしているかについては、【補】の部分で触れることとした。

【補】

一 「楚宮行」の構成

この詩は換韻に従えば四つの部分に分けられる。

- 1 4 場所・季節・時間・状況などを記した場面設定
- 5 6 楚王の宮殿への帰還
- 7 16 宮殿内での楚王の飲樂の様子
- 17 18 楚王の長寿とこの生活が永遠に続くことを願った結び

このうち、宮殿内での楚王を描いた7 16の十句は、毎句押韻がなされており、これまで注釈を施した張籍の楽府と比較して特殊な形式といえるだろう。

二 「楚宮行」のテーマ

この詩に関して最も問題とすべきは、張籍がこの詩によって何を述べたかったのか、言い換えれば、この詩のテーマは何かということであろう。

先に述べたように、張修蓉氏は、この詩を楚王の宴会の楽しみを詠じた詩とする。陳注や李冬生注・李建崑注は特に何も述べていないようだが、それはこの詩を張修蓉氏と同じように、そのまま受け取ったからではないかと思われる。主に風刺をテーマとした楽府を収める徐注や李樹政注が、すでにしばしば触れた⁴³⁷「楚妃怨」(前出。全文は後掲)を、君王の腐敗した生活を批判したものとして採録しながら、この詩は採らないのも、楚王の宴会の楽しみを詠じた楽府と判断したからではないだろうか。

しかし、この詩は単に楚王の楽しみを述べただけのものであろうか。確かに詩の表面上、この詩は楚王の楽しみを詠じたものとなっている。し

かし、これまでの楽府に見られたように、張籍は末尾の二句で内容を大きく転換させることが多く、それはしばしば換韻を伴っていた。この詩の末尾の二句も換韻されている。この二句をよく見ると、この詩には強い批判の意図が込められているのではないかと思われるのである。

この詩の末尾の二句は、楚王が千年万年の間、昼間は狩りをして夜は宴会を開けることを願っているが、王たるものが毎日ただ遊んでばかりいてよいものだろうか。末尾の二句を楚王の宮女の願いと解すれば、宮女としてはそれを願うということであるが、実際には、「章華」や「雲夢」の語釈に引いた『国語』や『史記』『晏子春秋』などの古書でも、陳子昂の「感遇詩三十八首」其二八などの詩でも、楚王の奢侈は批判的に取り上げられていた。後に引く晩唐の例も同様であるし、張籍自身の437「楚妃怨」(前出)も、麋鹿が死に絶えるまで帰って来ないだろうと、狩猟に明け暮れる様子が描かれている。

楚王は淫楽にふけて国を滅ぼすことになっており、雲夢沢での狩りも、章華台での遊びも、滅びへとつながる道だったのである。この詩が楽しい生活が永遠に続いてほしいという願いで終えられているのは、その願いが決して叶えられるものではなかったことを強調しているのではないだろうか。

もちろん、王者の楽しみが続くことを願うという形で、王をたたえることもあるだろうし、実際に「千年万年」の例に見えた如く、時の天子に対しては、そのような作品も多く作られている。張籍自身も、当時の天子にたてまつるのであれば、そのような作品を作ったかもしれない。

しかし、ここで張籍は新題の楽府を作って、楚の国について詠じている。わざわざ新題楽府を作って、過去の滅びた国を詠じながら、その国王の楽しみを描き、長久を祈る必要があるだろうか。たとえ以前の歴史書や詩の中に楚の滅亡を批判する類例がなかったとしても、張籍がこの詩を作らなければならなかった理由を推測すれば、この詩を単に楚王の楽しみを詠じた詩とすることはできないのではないか。

張籍は、楚王の豪華な遊びを批判し、千年先万年先までおもしろおかしく暮らしたいという愚かな願いが、もろくも崩れ去ってしまった皮肉な運命を描こうとしたのである。

その意味でこの詩は、極めて痛切な諷諭の詩であり、張籍の鋭い批判精神が表現された詩といえるだろう。

三 張籍「楚妃怨」

この詩と関わりの深い437「楚妃怨」(巻七)の全文をここに掲げておこう。

湘雲初起江沈沈	湘雲	初めて起こり	江は沈沈たり	
君王遙在雲夢林	君王	遙かに在り	雲夢の林	
江南雨多旌戟暗	江南	雨多くして	旌戟暗く	
臺下朝朝春水深	臺下	朝朝	春水深し	
章華殿前朝下国	章華殿前	下国朝するも		
君心独自無終極	君心	独自	終極無し	
楚兵满地兼逐禽	楚兵	地に満ちて	兼ねて禽を逐い	
誰用一身騁筋力	誰か	用いん	一身	筋力を騁ぶるを
西江若翻雲夢中	西江	若し	雲夢の中に翻し	
麋鹿死尽応還宮	麋鹿	死に尽くせば	応に宮に還るべし	

楚王が雲夢での狩猟に明け暮れて宮殿に帰らないことを詠じたもので、末尾の二句で換韻し、西江の氾濫によって獲物がいなくなならない限り帰って来ないだろうと結ぶ。諸注の指摘する通り、君王の遊興を諷諭した詩である。

四 後世への影響

張籍の「楚宮行」は、晩唐の詩人に大きな影響を与えているようである。先に述べたように、薛奇童の不安定な例を除けば、この詩は詩題に「楚宮」を用いた詩が多く作られるようになり、許渾に「楚宮怨」二首(『全唐詩』巻五三八)があり、李商隱に七律「楚宮」(『玉谿生詩集箋注』巻一)・七絶「過楚宮」(同巻二)・五律「楚宮」(巻三)・七絶「楚宮」(同巻三)の作品がある。特に李商隱は好んで題材として「楚宮」を取り挙げた詩人といえるだろう。そして、これらの作品の中には次のようなものがある。

許渾「楚宮怨」二首(『全唐詩』巻五三八)

(其一)

十二山晴花尽開	十二山は晴れて	花尽く開き	
楚宮双闕对陽臺	楚宮の双闕	陽臺に対す	
細腰争舞君沈醉	細腰は争って舞い	君は沈酔し	
白日秦兵天上来	白日	秦兵	天上より来たる

(其二)

獵騎秋來在內稀	獵騎	秋來	内に在ること稀なり
渚宮雲雨濕霓衣	渚宮の雲雨	霓衣を濕す	

騰騰戰鼓動城闕 騰騰たる戦鼓 城闕を動かすも
江畔射麋殊未帰 江畔 麋を射て 殊に未だ帰らず

李商隱「楚宮」(『玉谿生詩集箋注』卷三)

復壁交青瑣 復壁 青瑣を交え

重簾挂紫繩 重簾 紫繩に掛かる

如何一柱観 如何ぞ 一柱の観に

不礙九枝灯 礙げず 九枝の灯

扇薄常規月 扇は薄くして 常に月に規のり

釵斜只鏤氷 釵は斜めにして 只だ氷を鏤ちりばむ

歌成猶未唱 歌成りて 猶お未だ唱わざるに

秦火入夷陵 秦火 夷陵に入る

これらの詩は、いずれも末尾の二句で、酒宴や狩獵の楽しみにふけつて
る間に、滅びの時が迫ってきていることを詠じており、張籍と同じく、楚王
の奢侈を批判した内容となっているといえるだろう。特に許渾の作は、「双
闕」「射麋」の語が共通しており、先に触れたように、「射麋」の方は『全唐
詩』にわずかしかな用例がないことばであることからしても、張籍の「楚宮行」
の影響が強いのではないかと想像される。

なお、許渾の二首のうち其の一は『全唐詩』巻四七七では張籍とほぼ同時期
の李涉の「竹枝詞」とするが、許渾の作とすべきこと、羅時進氏『丁卯集箋
証』(三三四～五頁。江西人民出版社、一九九八年)に詳しい。(橋)

38 江南曲

【題解】

江南の曲。一に「江南行」に作る。古辞は、「江南可采蓮」といい、南朝
期まで歌辞が伝えられた数少ない漢代の民間歌謡の一つ。『宋書』樂志一に
「凡樂章古詞、今之存者、並漢世街陌謡謠、江南可采蓮・烏生・十五、白頭
吟之属是也」(凡そ樂章の古詞、今の存する者、並びに漢の世の街陌謡謠、
江南可采蓮・烏生・十五、白頭吟の属是れなり)とあり、樂志三には、古辞
の歌辞が相和歌の一つとして載録されている。『樂府詩集』卷二六は、古辞
を相和歌辞・相和曲に属し、解題には次のように言う。

『樂府解題』曰、「江南古辞、蓋美芳晨麗景、嬉遊得時。若梁簡文『桂楫

晚応旋』、唯歌遊戯也。」按梁武帝作「江南弄」以代西曲、有「採蓮」「採菱」、
蓋出於此。唐陸龜蒙又復古辞為五解云。

『樂府解題』に曰く、「江南の古辞は、蓋し芳晨麗景、嬉遊の時を得るを美
す。梁簡文の『桂楫は晚に応に旋らんとす』の若きは、唯だ遊戯を歌うのみ
なり」と。按ずるに梁武帝は「江南弄」を作りて以て西曲に代うるに、「採
蓮」「採菱」有るは、蓋し此に出づ。唐陸龜蒙又古辞を広くして五解と為す
と云う。

『樂府解題』には「江南の古辞は春の時節麗らかな日に、遊樂が時を得て
いることを讃える。梁簡文帝の『夕暮れ時に桂の楫をめぐらす』などは、た
だ遊び戯れることを歌うだけである」と言う。考えるに梁の武帝は「江南弄」
として西曲の替え歌を作り、それに「採蓮」「採菱」などの曲があるのは、
おそらく「江南」から生まれたのであろう。唐の陸龜蒙はさらに古辞の内容
を拡大して五解(五曲)とした。

古辞は、江南採蓮の景を詠じたものであり、蓮の葉の間を魚が戯れ泳ぐさ
まをリフレインするところに歌謡としての性格がうかがえる。この古辞の摸
擬作として、『樂府詩集』卷二六の相和歌辞・相和曲には、劉宋・湯惠休、
梁・簡文帝の「江南思」を収め、次いで梁・柳惲、唐・宋之問、劉・
虚、丁仙芝、劉希夷、于鵠、李益、李賀、李商隱、韓翃、温庭筠、張籍、羅
隱、陸龜蒙の「江南曲」、更に梁・劉綏の「江南可采蓮」を収める。唐より
前の作例はいずれも五言。唐に至って、劉希夷「江南曲八首」は其六までが
五言、其七と其八が七言であり、その他、韓翃、張籍、陸龜蒙(但し、陸龜
蒙には二首作例があり、もう一つは五言)が七言。その他は五言である。

また解題に拠れば、梁の武帝が西曲を基に新たに制作した「江南弄」があ
り、特にその中の「採蓮」「採菱」なども「江南」の古辞から派生したもの
とされる。『樂府詩集』巻五十の清商曲辞・江南弄に、梁武帝「江南弄」七
首をはじめとして、梁簡文帝三首、沈約四首を収め、唐代では王勃に「江南
弄」がある。こちらはいずれも七言を基調とする。なお、この「江南」古辞
から派生した「採蓮曲」については、市川桃子氏「樂府詩「採蓮曲」の誕生」
(前出)に詳しい。

張籍以前の「江南曲」は、江南の男女、特に女性の恋情を詠む。これに対
して、張籍は江南の風物を詠み、その内容が大きく異なる。姚合「贈張籍太
祝」(『全唐詩』巻四九七)に「絶妙江南曲、淒涼怨女詩」(絶妙なり江南曲、
淒涼たり怨女の詩)といい、張籍の江南の曲と怨女の詩を特に取りあげて賞

賛する。姚合の言う「江南曲」が本詩であるかどうかは定かではないが、張籍の「江南曲」は、それ以前の「江南曲」とは内容が大きく異なり、「江南」の新たな魅力を描こうとしているようである。このことについては、【補】で述べることとしたい。

【本文・書き下し文】

- 1 江南人家多橋樹 江南の人家 橋樹多く
- 2 吳姫舟上織白苧 吳姫 舟上に白苧を織る
- 3 土地卑濕饒蟲蛇 土地 卑湿にして 蟲蛇饒く
- 4 連木爲牌入江住 木を連ねて牌と爲し 江に入りて住む
- 5 江村亥日長爲市 江村 亥日 長に市を爲し
- 6 落帆度橋來浦裏 帆を落し 橋を度りて 浦裏に來たる
- 7 清莎覆城竹爲屋 清莎 城を覆い 竹を屋と爲し
- 8 無井家家飲潮水 井無く 家家 潮水を飲む
- 9 長干午日沽春酒 長干 午日 春酒を沽る
- 10 高高酒旗懸江口 高高たる酒旗 江口に懸かる
- 11 娼樓兩岸臨水柵 娼樓 兩岸 水柵に臨み
- 12 夜唱竹枝留北客 夜には竹枝を唱いて 北客を留む
- 13 江南風土歡樂多 江南の風土 歡樂多し
- 14 悠悠處處盡經過 悠悠 处处 尽く經過せん

【押韻】

樹―上声九麌・苧―上声八語・住―去声十遇（同撰内の上を通押）
 市・裏―上声六止・水―上声五旨（同用）
 酒―上声四有・口―上声四厚（同用）
 柵・客―入声二〇陌
 多―下平七歌・過―下平八戈（同用）

【口語訳】

- 1 江南の民家には 橋の樹が多く植えられ
- 2 吳の美女は舟の上で 白紵の布を織る
- 3 土地は低く湿潤で 害虫多く

- 4 木を繋げて筏をつくり 川の上で生活している
- 5 川沿いの村では 亥の日にいつも市が開かれ
- 6 (その日は) 舟が帆を下ろして集まり 浮き橋を渡って人々が岸へとやってくる
- 7 莎草が城の周りに生い茂り 民家の屋根は竹葺き
- 8 井戸が無いので どの家も岸によせる潮水を汲んで飲み水としている
- 9 長干の里では 端午の日に春の酒が売り出され
- 10 天高くあがる酒店の旗が 川の入り口にかかっている
- 11 水路の両側には妓楼が並び 水中の柵と向かい合い
- 12 夜には竹枝の歌を歌って 北來の客を引き留める
- 13 江南の風俗には 心喜ばせるものが多い
- 14 はるかに遠く あちこちへ行き すべてを見尽くしたいものだ

【語釈】

- 1・2 江南人家多橋樹、吳姫舟上織白苧
- 〔江南〕長江下流域の地を言う。5「寄遠曲」（卷一）にも見え、その【語釈】も参照。5「寄遠曲」及び437「楚妃怨」（卷七）は湘水下流域を指すようであるが、ここでは後の句に「吳姫」「長干」とあり、長江下流域を意識するようである。

「江南」の用例は、古く『春秋』宣公十二年の「左伝」に、「鄭伯肉袒牽羊以逆、曰、孤不天、不能事君。使君懷怒、以及敝邑、孤之罪也。敢不唯命是聽。其俘諸江南、以実海浜、亦唯命」（鄭伯肉袒して羊を牽ぎ以て逆えて、曰く、孤は不天にして、君に事うる能わず。使君 怒りを懷き、以て敝邑に及ぶは、孤の罪なり。敢えて唯だ命を是れ聽かざらん。其れ諸を江南に俘とし、以て海浜に実てしも、亦た唯だ命なるのみと）とある。ここは鄭伯が楚王に服従することを誓う場面であり、「江南」は楚国以南の土地を言う。

唐より前の詩にも用例は多く、いま長江下流域の例を挙げれば、謝朓「鼓吹曲」（『文選』卷二八）に「江南佳麗地、金陵帝王州」（江南 佳麗の地、金陵 帝王の州）とあり、揚州一帯の地の素晴らしさを称える。『爾雅』釈地に「江南曰楊州」（江南を楊州と曰う）とあり、これは長江下流域を言う。

唐詩にも例は多く、江南の地の風物や環境について言う例を挙げれば、陳子昂「送客」（『全唐詩』卷八四）に「江南多桂樹、歸客贈生平」（江南 桂樹多く、歸客 生平に贈る）、盧象「竹里館」（『全唐詩』卷一二二）に「江南冰不開、山沢氣潜通。臘月聞山鳥、寒崖見蟄熊」（江南 氷は閉じず、山沢 氣は潜かに通ず。臘月 山鳥を聞き、寒崖 蟄熊を見る）とある。前者

は江南には桂樹が多いことを言い、後者は江南の温暖な気候について言う。

杜甫の用例は五例。「夢李白二首」其一(『詳注』巻七)に「江南瘴癘地、逐客無消息」(江南は瘴癘の地、逐客 消息無し)とあるのは、あまり良い意味では用いられていないようだが、「江南逢李龜年」(『詳注』巻二三)に「正是江南好風景、落花時節又逢君」(正に是れ江南の好風景、落花の時節又君に逢う)は、江南の春の良き時節に李龜年に出会えたことを喜ぶもの。張籍の用例は九例。43「江南春」(巻二)は江南の温暖な春の景物を詠み、58「思江南旧游」(巻二)に「江皋三月時、花發石楠枝」(江皋 三月の時、花は発く石楠の枝)とあり、70「寄友人」(巻二)には「憶在江南日、同遊三月時」(憶う 江南に在りし日、同に遊ぶ 三月の時)とあり、いずれもかつて春に江南の地を周遊したことを詠む。また419「江村行」(巻七)は江南の村の人々の生活、その苦勞を詠む。羅聯添「張籍年譜」によれば、張籍は貞元十五年二月に進士に登第した後、当時徐州に居た韓愈のもとを訪れ、次いで湖州、杭州に遊んだとある。これらの作品はこの時期のことに基づくものか。

〔人家〕 民家、人家を言う。ここでは江南の人々の生活の有り様を言う。

唐詩よりの前の詩には、傅玄「美女篇」(『樂府詩集』巻六三)に「美人一何麗、顔若芙蓉花。一顧乱人国、再顧乱人家」(美人 一に何ぞ麗なる、顔は芙蓉の花の若し。一たび顧みれば人の国を乱し、再び顧みれば人の家を乱す)とあるが、これは他人の家の意。

唐詩には用例も多く、「橋」とともに用いられる例には、徐昌「送友人尉蜀中」(『全唐詩』巻七五)に「人家多種橋、風土愛弹琴」(人家 多く橋を種え、風土 弹琴を愛す)とあり、韓翃「送元洗還江東」(『全唐詩』巻二四四)に「客路随楓岸、人家掃橋林」(客路は楓岸に随い、人家は橋林を掃く)とある。前者は蜀の人々は多く橋樹を植えることを言い、後者は江東の人家が橋の木の近くに在ることを言う。なお、徐昌の詩を『全唐詩』巻七〇二は晩唐の張蠙の作とするが、佟培基編『全唐詩重出誤収考』(陝西人民出版社、一九九六年)は、『国秀集』が徐昌の作とするのに従うべきと言う。

杜甫の用例は四例。「風雨看舟前落花戲為新句」(『詳注』巻二三)に「江上人家桃樹枝、春寒細雨出疏籬」(江上の人家 桃樹の枝、春寒く細雨に疏籬を出づ)とあり、湘江のほとりの民家に植えられた桃の木を詠む。

張籍の用例は四例。289「蛮州」(巻六)に「瘴水蛮中入洞流、人家多住竹棚頭」(瘴水 蛮中 洞に入りて流れ、人家 多く竹棚の頭に住む)とあり、南蛮の人が竹で作った棚の上で暮らすことを詠む。

〔多橋樹〕 橋は古くから南方の果実として知られる樹。37「楚宮行」(巻一)の【語釈】を参照。

唐より前の詩においても、橋は南方を象徴する樹木として散見し、例えば謝朓「酬王晋安」(『文選』巻二六)に「南中榮橘柚、寧知鴻雁飛」(南中には橘柚榮えるも、寧ぞ知らん鴻雁の飛ぶを)とある。また江淹「雜體詩三十首 劉文学感遇」(『文選』巻三一)では「橘柚在南国、因君為羽翼」(橘柚は南国に在るも、君に因りて羽翼を為す)と、自ら動くことのできない南国の橘柚は君の力を借りることで活躍できることを言い、君主に対する感謝の思いを表す。

唐詩に於いても江南の景物として橋を描くことは多く、岑参「郡齋望江山」(『校注』巻四)に「庭樹純栽橘、園畦半種茶」(庭樹は純ら橘を栽え、園畦は半ば茶を種う)とある。これは蜀の嘉州での作ではあるが、その地の住居は庭に橋を植えていることを言う。

張籍の「橋」の用例は、本詩と37「楚宮行」の他に三例、75「宿江店」(巻二)では「野店臨西浦、門前有橋花」(野店 西浦に臨み、門前に橋花有り)と、江沿いの店の門前に橋花が咲くことを言い、178「贈殷山人」(巻三)では「已種千頭橘、新開數脈泉」(已に種う 千頭の橘、新たに開く 數脈の泉)と、『史記』貨殖伝を踏まえて山人の充実した暮らしぶりを表し、379「春別曲」(巻六)では「江頭橋樹君自種、那不长繫木蘭船」(江頭の橋樹 君の自ら種うるに、那ぞ長く木蘭の船に繫がざる)と、旅立つ人が植えた江辺の橋に自らを準え、旅立つ人を繫ぎとめようとする。

〔吳姬〕 吳地方の美女。詩の用例は唐よりも前には稀だが、魏の韋誕「景福殿賦」(『藝文類聚』巻六二)に「然後御龍舟兮翳翠蓋、吳姬擢歌、越女鼓柁、詠採菱之清謳、奏淥水之繁会」(然る後に龍舟に御し翠蓋を蓋われ、吳姬は擢歌し、越女は柁を鼓し、採菱の清謳を詠い、淥水の繁会を奏す)とあり、江南の歌を唱う女性として、「吳姬」が「越女」とともに見える。また「採菱清謳」とあるように、「吳姬」には舟に乗り菱(蓮)を採る女性のイメージも重なる。

唐詩には初唐から例が見え、王勃「採蓮曲」(『全唐詩』巻五五)では「裴回蓮浦夜相逢、吳姬越女何丰茸」(蓮浦を裴回し夜に相逢う、吳姬越女 何ぞ丰茸たる)とあり、「吳姬」を「越女」とともに採蓮の婦とする。盛唐において、王昌齡「采蓮曲二首」其一(『全唐詩』巻一四三)に「吳姬越艷楚王妃、争弄蓮舟水湿衣」(吳姬 越艷 楚王妃、蓮舟に争い弄れ 水衣を湿す)は、「吳姬」と「蓮舟(採蓮)」とが共に見え、また王昌齡「重別李評事」(『全唐詩』巻一四三)は、「吳姬緩舞留君醉、随意青楓白露寒」(吳

姫緩舞して君が酔うを留め、随意なり 青楓白露寒し」と、送別の席上で舞う呉姫を詠む。

杜甫には用例無し。張籍の用例は他に一例あり、424「烏棲曲」(巻七)に「呉姫採蓮自唱曲、君王昨夜船中宿」(呉姫 蓮を採りて自ら曲を唱い、君王 昨夜船中に宿す)と、「呉姫」が歌を唱いながら蓮を採るさまを詠む。このように「呉姫」には舟に乗って蓮を採り且つ歌う美女というイメージがあり、「呉姫舟上」は江南のイメージを象徴するもの。

「白苧」「白紵」は白紵に同じ。呉の地方特産の白い布地を言う。『宋書』樂志一に「又有白紵舞、按舞詞有巾袍之言。紵本吳地所出、宜是吳舞也。晋俳歌又云、皎皎白緒、節節為双。吳音呼緒為紵、疑白紵即白緒」(又白紵舞有り、按ずるに舞詞に巾袍の言有り。紵は本と吳地の出だす所、宜しく是れ呉の舞いなるべし。晋の俳歌に又云う、皎皎たる白緒、節節 双と為す、と。吳音 緒を呼びて紵と為す。疑うらくは白紵は即ち白緒ならんと)とある。同様の記事は『晋書』樂志にも見え、また『宋書』樂志四には「白紵舞歌詩三篇」が載録されている。「白紵」が呉の産物として詩文の素材となるのは、この晋宋の間に「白紵舞」が宮廷音楽に採用されて以後のようであり、劉宋の劉燦、鮑照、湯惠休に「白紵歌(曲)」があり、梁の武帝、張率、沈約らにも類題の作がある。張籍にも8「白紵歌」(巻一)が有り、夫に送る衣を仕立てようとする若い妻の姿を描く。その【語注】も参照。

唐代の「白紵」の例は歌曲の名を指す場合が多く、白紵を織る例としては、李白「湖邊採蓮婦」(王琦注本巻二五)に「小姑織白紵、未解將人語」(小姑 白紵を織り、未だ人と語るを解せず)とある。これは採蓮の婦の夫は不在で、小姑は話し相手にはならないことをいう。また劉禹錫「插田歌」(『箋証』巻二七)では「農婦白紵裙、農父綠簑衣」(農婦は白紵の裙、農父は緑簑の衣)と、連州城下では女性が白紵の衣服を着ていることをいう。

張籍の用例は、先の8「白紵歌」(既引)の冒頭に「皎皎白紵白且鮮、將作春衣称少年」(皎皎たる白紵 白く且つ鮮なり、將て春衣の少年に称うを作る)と生地の色を言い、もう一例は、42「蘄北旅思」(巻二)に「日日望郷国、空歌白苧歌」(日日 郷国を望み、空しく歌う 白苧の歌)とあり、故国呉地の歌として用いられている。

「呉姫」が「白紵」を歌うという例は、張籍より前には見当たらないが、先に示したように「呉姫」は「舟上」で歌を唱う女性であり、また「白紵」は呉の舞曲の名でもある。或いは、「呉姫舟上織白紵」とは、船上で歌う呉の女性のイメージと機を織る呉の女性のイメージを併せて成るものかもしれない。

冒頭の二句は、江南を象徴する風物を描くことから始まる。「橘」は古来より江南の果実とされ、白紵は呉の特産品。また「舟上」の「呉姫」もまた江南を象徴する女性である。しかし、「呉姫」は蓮を採る女性、又は舞い踊る女性であったのが、ここでは「舟上」で機織りする。この意外な結びつきが、この詩がこれまでの「江南のうた」とは異なることを予感させるようである。

3・4 土地卑湿饒蟲蛇、連木為牌入江住

〔土地卑湿〕土地が低いために湿気が多いことを言う。「土地」について、陳注は『孟子』尽心の「孟子曰、諸侯之宝三。土地・人民・政事。宝珠玉者、殃必及身」(孟子曰く、諸侯の宝は三。土地・人民・政事なり。珠玉を宝とする者、殃必ず身に及ぶ)という孟子の言葉を引く。ここで孟子は諸侯の大切にすべきは土地と人民と政治であると言う。趙岐注によれば、「土地」は国の領地、領域を指す。

『史記』貨殖伝に「江南卑湿、丈夫早夭。多竹木」(江南卑湿にして、丈夫早夭す。竹木多し)とある。また『史記』賈誼伝に「賈生既辞往行、聞長沙卑湿、自以寿不得長。又以適去、意不自得。及渡湘水、為賦以弔屈原」(賈生既に辞して往き行くに、長沙の卑湿なるを聞き、自ら以て長きを得ずと。又以て適き去くに、意は自ら得ず。湘水を渡るに及び、賦を為して以て屈原を弔う)、また「賈生既以適居長沙、長沙卑湿、自以為寿不得長、傷悼之、乃為賦以自広」(賈生既に長沙に適居し、長沙卑湿なるを以て、自ら以て寿は長きを得ずと為し、之を傷み悼みて、乃ち賦を為して以て自ら広くす)とある。この記事は『漢書』にも踏襲され、また後者は「鵬鳥賦」の序文として『文選』にも収められる。このため、「卑湿」は「長沙」又は賈誼の故事とも結びつき易い語でもある。

唐より前の詩に「卑湿」の語は見えないようであり、唐詩では杜甫「北風」(『詳注』巻二二)に「爽携卑湿地、声拔洞庭湖」(爽をば携う 卑湿の地、声は抜く 洞庭湖)と、北風がはじめじめした土地に爽をもたらずことを言う。また白居易「八月十五日夜禁中独直对月寄元九」(七二四)に「猶恐清光不同見、江陵卑湿足秋陰」(猶お恐る 清光 見るを同じくせざるを、江陵卑湿にして秋陰足らん)とあり、同じく白居易の「自蜀江至洞庭湖口有感而作」(三五四)には「水族窟穴多、農人土地窄」(水族 窟穴多く、農人 土地窄し)とある。前者は賈誼伝を踏まえて、江陵の氣候が不安定であること(註)を言い、後者は洞庭湖の水量は秋夏に増し、周囲の沼沢を飲み込み、ために

農地が狭くなることを言う。

張籍には、468「岳州晚景」(巻八)に「長沙卑湿地、九月未成衣」(長沙卑湿地、九月 未だ衣を成さず)と「長沙」と共に用いられる例がある。但し、『全唐詩』は同じ詩を張説の子である張均のものとし、更にその題下に「一作父説詩」と注す。佟培基編『全唐詩重出誤收考』(前出)は、更にこの詩を張渭の作とする説を挙げ、同詩は張渭の作である可能性を指摘する。

〔饑蟲蛇〕「蟲蛇」は有害な昆虫や蛇などの生き物。『韓非子』五蠹に「上古之世、人民少而禽獸衆、人民不勝禽獸蟲蛇、有聖人作、搆木為巢以避群害、而民悅之」(上古の世、人民少くして禽獸衆く、人民 禽獸蟲蛇に勝らず、聖人の作り、木を搆えて巢を為し以て群害を避くる有りて、民 之を悦ぶ)とある。次句に江南の民が水上に住むと続けることは、この『韓非子』の記事を念頭に置いてのことか。また『漢書』賈捐之伝に「顯顯獨居一海之中、霧露氣湿、多毒草蟲蛇水土之害、人未見虜、戰士自死」(顯顯として独り一海の中に居り、霧露氣湿、毒草蟲蛇水土の害多く、人未だ虜ならざるに、戰士自ら死す)と、南方の駱越の人は海上に居り、その辺りは有害な植物や生き物が多いことを言う。

唐よりも前の詩には用例は見当たらず、唐詩には、高適「東平路中遇大水」(『全唐詩』巻二二二)に「蟲蛇擁獨樹、麋鹿奔行舟」(蟲蛇は獨樹を擁ぎ、麋鹿は行舟に奔る)とあり、洪水のために蟲蛇が樹に集まって難を避けることを言う。

また白居易の「得微之到官後書、備知通州之事、悵然有感、因成四章」(八五四)に「蟲蛇白昼攔官道、蚊蚋黄昏撲郡樓」(蟲蛇は白昼に官道を攔り、蚊蚋は黄昏に郡樓を撲つ)とあり、通州は昼間も蟲蛇がうろちよろしていることを言う。

杜甫の用例は一例、「諸葛廟」(『詳注』巻一九)に「蟲蛇穿画壁、巫覡綴蛛糸」(蟲蛇 画壁を穿ち、巫覡 蛛糸を綴る)とあり、荒れ果てた廟に蟲蛇がはびこり、蜘蛛が巣を張ることを言う。

張籍の用例はこの一例のみ。

〔連木為牌入江住〕陳注は「牌」は「籩」に作るべきとし、諸注はこれに従う。「籩」は「箒」に同じ、木を編んで作った箒を言う。江南の人々が、江上に筏を組んで生活することを言う。『後漢書』西南夷伝に「建武二十三年、其王賢栗遣兵乘箒船、南下江・漢、擊附塞夷鹿蒞」(建武二十三年、其王賢栗 兵をして箒船に乗らしめ、南のかた江・漢に下りて、塞夷鹿蒞を撃附す)とあり、范曄の注に「縛竹木為箒、以当船也」(竹木を縛りて箒と為し、以

て船に当つるなり)とある。

唐より前の詩に「牌」「箒」を用いた例はないようであり、唐詩にも張籍以外の用例は見当たらないようである。江南の人々が水上で生活することは、張九齡「登郡城南弄」(『全唐詩』巻四七)に「江陵城周辺の様子を述べて、邑人半艦艦、津樹多楓橘」(邑人は半ば艦艦、津樹は多く楓橘なり)と、民衆の多くは舟の上で生活をし、水辺には楓や橘が多いと言う。

前の句で、「吳姬」が「舟上」で機を織るとしたことを承けるように、この二句は、江南の人々が水上で生活することを言う。しかし、それは江南の奇異な風俗を否定的に捉えているのではなく、むしろその風俗に理解を示し、そのような生活を余儀なくされていることを説明するかのようである。

5・6 江村亥日長為市、落帆度橋来浦裏

〔江村〕川沿いの村。

唐より前の詩には用例が少なく、謝朓「高齋視事詩」(『校注』巻三)に「暖暖江村見、離離海樹出」(暖暖として江村見え、離離として海樹出づ)とあるのが早い例であり、霧が晴れて川沿いの村が見えることを言う。

唐詩には用例も多く、陳注の引く孟浩然「夜歸鹿門山歌」(『全唐詩』巻一五九)に「人随沙路向江村、余亦乘舟歸鹿門」(人は沙路に随いて江村に向かい、余も亦た舟に乗りて鹿門に歸る)と、舟で帰ってきた人々が川沿いの砂地を通って村へと帰って行く様子を詠む。これは鹿門山(襄陽周辺)に歸る途次、沔水流域の村について詠む。長江沿いの村を言う例には、張九齡「当塗界寄裴宣州」(『全唐詩』巻四九)に「日夕遵前渚、江村投暮煙」(日夕前渚に遵い、江村 暮煙に投ず)とあり、夕暮れに江村に投宿することを言う。

杜甫の用例は詩中に用いるものが九例、詩題に用いるものが三例。蜀中生活の幸福なひとときを綴った「江村」(『詳注』巻九)は有名。また「暇日小園散病、將種秋菜、督勸耕牛、兼書觸目」(『詳注』巻一九)に「江村意自放、林木心所欣」(江村 意は自ら放たれ、林木 心の欣ぶ所)とあり、江村を心の開放されるところとする。これは夔州での作とされ、長江またその支流沿いの村を言う。

張籍には詩中での用例は一例のみ、詩題の用例は先にも引用した419「江村行」(既引)が一例のみ。

〔亥日長為市〕江南地方で亥の日ごとに開かれていた市(亥市)のことを言

う。亥市については、清・呉景旭『歴代詩話』卷五に「呉旦生曰、青箱雜記、荊吳俗有寅・申・巳・亥日集於市、故謂亥市。蜀有亥市。間日一集、如瘡之癢。其俗又以冷熱癢歌為市喻。徐筠水志云、分寧縣本常州。亥市也、西蜀曰瘡。如瘡疾間日復作也。江南人惡以疾稱、故止曰亥耳。豫章漫抄云、南中每以丑・卯・酉日為市、故曰兔場・牛場・鷄場。豈用亥日為市、故謂之亥。余按月令広義云、亥音皆。積名亥核也。收藏百物、核取其好惡真偽也。市之以亥、或取此義。當從亥日為正」（呉旦生曰く、青箱雜記に、荊吳の俗に寅・申・巳・亥日、市に集まる有り、故に亥市と謂う。蜀に瘡市有り。間日に一たび集まること、瘡癢の癢るが如し。其の俗又冷熱の癢歌するを以て市の喻と為す。徐筠水志に云う、分寧縣は本常州なり。亥市や、西蜀、瘡と曰う。瘡疾の間日に復た作るが如きなり。江南の人、疾を以て稱すを惡み、故に止だ亥と曰うのみと。豫章漫抄に云う、南中は毎に丑・卯・酉日を以て市を為し、故に兔場・牛場・鷄場と曰う。豈に亥日を用て市と為し、故に之を亥と謂わんやと。余按ずるに月令広義に云う、亥音は皆と。積名に亥は核なりと。百物を收藏し、核は其の好惡真偽を取るなり。市の亥を以てするは、或いは此の義を取る。當に亥日に從うを正と為すべし」とあり、これに続けて、亥日に市を開くので「亥市」とする例として、張籍の「江南曲」、白居易の「得微之到官後書、備知通州之事、悵然有感、因成」などを引く。

中唐以前には、亥市に言及するものは見当たらず、中唐の詩からこれに言及するものが見えはじめ。白居易「得微之到官後書、備知通州之事、悵然有感、因成」（既引）に「寅年籬下多逢虎、亥日沙頭始売魚」（寅年には籬下に多く虎に逢い、亥日には沙頭始めて魚を売る）、白居易「東南行一百韻 寄通州元九侍御、澧州李十一舍人、果州崔二十二使君、開州韋大員外、庾三十二補闕、杜十四拾遺、李二十助教員外、宝七校書」（九〇八）に「水市通關、煙村混舳舻。吏徵漁戶稅、人納火田租。亥日饒蝦蟹、寅年足虎羆」（水市、關關に通じ、煙村、舳舻を混じう。吏は漁戶の稅を徵し、人は火田の租を納む。亥日、蝦蟹饒く、寅年、虎羆足る）とあり、江南地方の珍しい習俗として、亥日に水辺で市場が開かれることを言う。

また「亥市」であれば、白居易「江州赴忠州、至江陵已來舟中示舍弟五十韻」（二一〇四）に「亥市魚鹽聚、神林鼓笛鳴。壺漿椒葉氣、歌曲竹枝聲」（亥市、魚鹽聚まり、神林、鼓笛鳴る。壺漿、椒葉の氣、歌曲、竹枝の聲）とある。これは忠州に赴く途次に目撃した亥市の様子を描き、また祭祀を行う林の中からは竹枝の歌が聞こえてくることを言う。他に、顧況「歷陽苦雨」（『全唐詩』卷二六六）にも「亥市風煙接、隋宮草路深」（亥市、風煙接し、隋宮草路深し）とあり、亥市の賑わいを人氣もない隋宮と對比させる。

「落帆度橋」「落帆」は、舟が帆を下ろして停泊することをいう。ここは亥市にやってくる舟が集まってくるさまを言うのであろう。

唐より前の詩には、湛方生「天晴詩」（『初學記』卷二）に「落帆修江湄、悠悠極長昞」（帆を落して江湄に修め、悠悠、長昞を極む）とあり、何遜「宿南洲浦詩」（『古詩紀』卷八三）に「解纜及朝風、落帆依暝浦」（纜を解くは朝風に及び、帆を落すは暝浦に依る）とある。前者は帆を下ろして岸に停泊し、しばし眺めを楽しむことを言い、後者は夕方に帆を下ろして浦に帰ることを言う。

唐詩にも用例多く、杜甫「秋日夔府詠懷奉寄鄭監李賓客一百韻」（『詳注』卷一九）に「落帆追宿昔、衣褐向真詮」（帆を落して宿昔を追い、褐を衣て真詮に向かう）とあり、旅の身を落ち着けて仏の教えを求めるとを言い、劉禹錫「隄上行三首」其三（『箋証』卷二六）に「日晚上樓招估客、軻峨大編落帆來」（日晚れて樓に上りて估客を招き、軻峨たる大編、帆を落して來たる）と、夕暮れに大堤に集ってくる舟の様子を描く。

「度橋」は、舟を下りた人々が浮き橋を渡って岸辺に向かうことを言う。「橋」は、水上の浮き橋、又は船着き場のような場所を言うのであろう。謝朓「之宣城出新林浦向版橋」（『文選』卷二七）の李善注に引く『水經注』の佚文に「江水經三山、又幽浦出焉。水上南北結浮橋渡水、故曰版橋」（江水三山を経て、又幽浦出づ。水上南北に浮橋を結びて水を渡り、故に版橋と曰う）とある。

また杜甫「倚杖」（『詳注』卷一一）に「看花雖郭內、倚杖即溪邊。山果早休市、江橋春聚船」（花を看るは郭内なりと雖も、杖に倚るは即ち溪邊なり。山果は早に市を休め、江橋は春に船を聚む）とあり、この「江橋」は船着き場のようなものを指すのであろうか。「江橋」は、白居易「楊柳枝詞八首」其四（三一四一）にも「紅板江橋青酒旗、館娃宮暖日斜時」（紅板の江橋青き酒旗、館娃、宮暖かにして、日斜めなる時）とある。これは船着き場なのかは分からないが、紅の板で作られた橋と「酒旗」が共に用いられた例。張籍には、426「泗水行」（卷七）に「春冰消散日華滿、行舟往來浮橋斷。城邊漁市人早行、水煙漠漠多棹聲」（春冰消散して日華滿ち、行舟往來して浮橋断たる。城邊の漁市、人早に行き、水煙漠漠として棹声多し）とあり、舟の往來が激しいために浮橋の一部を開けて舟を通し、朝早くから市場に人が集まってくる様子を描く。

「來浦裏」「浦裏」は水辺、川岸のこと。

唐より前の詩には用例は見当たらないようであり、唐詩にも用例は少ない。李端「荊門歌送兄赴夔州」（『全唐詩』卷二八四）に「騷騷變變聲漸繁、浦裏

人家収市喧(騒騒變變として声は漸く繁く、浦裏の人家は市の喧しきを取む)とあり、また于鵠「舟中月明夜聞笛」(『全唐詩』卷三一〇)に「浦裏移舟候信風、蘆花漠漠夜江空」(浦裏に舟を移して信風を候ち、蘆花漠漠として夜江空し)とある。前者は船着き場周辺がとてにぎやかで、岸辺の民家の辺りでは市場も開かれていることを言い、後者は岸辺に舟を止めて風待ちすることを言う。

杜甫には用例が無く、張籍にもこの一例のみ。

この二句は、江村で行われる亥日の市のにぎわいを描く。前四句で水上での生活を描き、ここから四句は水辺での生活を描く。従来の「江村」はのどかで静かな場所であり、「落帆」も多く夕暮れに帆を下ろして休む様子であった。これに対して、ここは「江村」の市場に舟や人々が集まり活況を呈する様子を描く。また「亥日」の市は中唐頃から詩に見えはじめる新鮮な素材である。

7・8 清莎覆城竹為屋、無井家家飲潮水

〔清莎覆城〕「莎」は、はますげ。乾燥にも強く砂地でも生育する雑草。「覆城」は莎草が城壁を覆うようにその周囲に生えていることを言う。

〔清莎〕の用例は、張籍以前の詩には見出せない。静嘉堂本・百家家集本・四庫全書本は「青莎」に作る。「青莎」であれば、古くは『楚辞』招隠士に「青莎雜樹兮、蘋草蠹靡」(青莎 樹に雜り、蘋草蠹靡たり)とあり、雑草が生い茂る様子を描く。六朝期には、梁詩に「青莎」の用例が多く、謝朓「三日侍華光殿曲水宴代人忠詔」(『校注』卷一)に「紅樹巖舒、青莎水被」(紅樹 巖に舒び、青莎 水に被う)、沈約「被褐守山東」(『玉臺新詠』卷九)に「岸側青莎被、巖間丹桂叢」(岸側 青莎被い、巖間 丹桂叢がると、青莎が岸を被うさまを詠む)。

唐詩には盛唐以前には例は少なく、李白「同王昌齡送族弟襄陽桂陽二首」其二(王琦注本卷一七)に「爾家何在瀟湘川、青莎白石長江邊」(爾が家は何くにか在る 瀟湘の川、青莎白石 長江の邊)など数例にすぎない。中唐から用例が増え始め、南方のことに限らずに青く茂った草地を指す例も見える。例えば、白居易「池上閑詠」(三〇八〇)では洛陽での生活を描いて、「青莎臺上起書樓、綠藻潭中繫釣舟」(青莎臺上 書樓を起こし、緑藻潭中 釣舟を繫ぐ)とあり、張籍にも148「和左司元郎中秋居十首」其五(卷二)に「莎臺乘晚上、竹院就涼眠」(莎臺 晚上に乗り、竹院 涼眠に就く)とある。

南方の風物としては、122「送嚴大夫之桂州」(卷二)に「莎城百越北、行路九疑南」(莎城 百越の北、行路 九疑の南)とあり、「莎城」とは莎草が

周囲を生い茂る城を言うのであろう。また419「江村行」(既引)では、「田頭刈莎結為屋、婦來繫牛還獨宿」(田頭 莎を刈り結びて屋を為し、婦來 牛を繫ぎて還た独り宿る)とあり、江村では田のほとりに「莎」を刈り取って屋根となすことを言う。

〔竹為屋〕竹で屋根を葺くこと。南方では竹や茅などで屋根を葺いていたことは、『旧唐書』宋璟伝に「広州旧俗、皆以竹茅為屋、屢有火災。璟教人燒瓦、改造店肆、自是无復延燒之患、人皆懷惠、立頌以紀其政」(広州の旧俗、皆竹茅を以て屋と為し、屢しば火の災い有り。璟は人に瓦を燒くを教え、店肆を改造せしめ、是に自りて復た延燒の患い無く、人は皆な恵を懐い、頌を立てて以て其の政を紀す)とある。

また元稹「酬翰林白学士代書一百韻」(『元稹集』卷一〇)に「仰竹藤纏屋、苦茆荻補籬」(仰竹 藤もて屋を纏い、苦茆 荻もて籬を補う)とあり、原注に「南人以大竹為瓦。用荻為籬也」(南人は大竹を以て瓦と為す。荻を用て籬と為すなり)とある。

〔無井家家〕「無井」は井戸がないこと。唐詩より前には詩の素材としてとりあげられることはないようだが、杜甫には二例の用例が有り、杜甫「引水」(『詳注』卷一五)に「月峽瞿塘雲作頂、乱石崢嶸俗無井」(月峽瞿塘 雲は頂と作り、乱石崢嶸として俗に井無し)と、夔州の習俗では井戸が無いことを言う。また「溪上」(『詳注』卷一九)では、「塞俗人無井、山田飯有沙」(塞俗 人に井無く、山田 飯に沙有り)とあり、夔州には井戸は無く、農作業の食事時には水辺で水を飲むことを言う。

「家家」はどの家もみな。7「征婦怨」(卷一)、22「永嘉行」(卷一)にも見える。その【語釈】も参照。揚雄「解嘲」(『文選』卷四五)に「天下之士、雷動雲合、魚鱗雜襲、咸當于八区。家家自以為稷契、人人自以為皐陶」(天下の士は、雷のごとく動き雲のごとく合し、魚鱗のごとく雜襲して、咸く八区に當す。家家自ら以て稷契と為し、人人自ら以て皐陶と為す)とあり、「人人」と対となり、どの家も、誰もがの意。同様の例として、曹植「与楊德祖書」(『文選』卷四二)にも「當此之時、人人自謂握靈蛇之珠、家家自謂抱荆山之玉」(此の時に当たりて、人人自ら謂えらく靈蛇の珠を握れりと、家家自ら謂えらく荆山の玉を抱くと)とある。

唐詩にも用例は多く、孟浩然「賦得盈盈楼上女」(『全唐詩』卷一六〇)に「燕子家家入、楊花处处飛」(燕子 家家に入り、楊花 处处に飛ぶ)とあり、「处处」と対し、どの家にも燕が飛来することをいう。

杜甫の用例は七例。「处处」と対をなす例が三例と多く、例えば「寄司馬

山人十二韻」(『詳注』卷一三)に「家家迎薊子、处处識壺公」(家家 薊子 迎え、处处 壺公を識る)とある。

〔潮水〕潮の満ち引きによって起こる水流。江南を象徴する風物の一つ。

古くは『楚辞』九章・悲回風に「悲霜雪之俱下兮、聽潮水之相擊」(霜雪の俱に下るを悲しみ、潮水の相撃つを聴く)とある。また左思「呉都賦」(『文選』卷五)に「結輕舟而競逐、迎潮水而振縉」(輕舟を結びて競い逐い、潮水を迎えて縉を振るう)とあり、南方の風物として見える。

唐詩にも用例は多く、張若虛「春江花月夜」(『全唐詩』卷一七)に「春江潮水連海平、海上明月共潮生」(春江の潮水 海に連なりて平らかに、海上の明月 潮と共に生ず)とある。

杜甫には用例なし。張籍の用例は他に二例。423「春江曲」(卷七)の「春江無冰潮水平、蒲心出水鳧雛鳴」(春江は氷無く、潮水は平らかに、蒲心は水より出でて鳧雛鳴く)は張若虛の句に基づくもの。59「夜到漁家」(卷二)に「漁家在江口、潮水入柴扉」(漁家は江口に在り、潮水は柴扉に入る)とあり、江口の漁家は門扉近くまで潮が寄せてくることを言う。

この二句は、「莎」「竹」「無井」「潮水」という江南をイメージさせる風物を織り込んで、水辺の江村の様子、そこに暮らす人々の家やその生活を詠む。前二句は江村の遠景であったが、この二句は舟を降りて「浦裏」へとやってきたかのように、江村の近景を描く。

9・10 長干午日沽春酒、高高酒旗懸江口

〔長干〕建康(南京)の南、丘陵の狭間にあつた里巷の名。吏民が入り交じり繁華な場所であつたようである。左思「呉都賦」(『文選』卷五)に「長干延属、飛甍舛互」(長干 延属し、飛甍舛互す)とあり、劉逵注に「建業南五里有山崗、其間平地、吏民雜居。東長干中有大長干・小長干、皆相連。大長干在越城東、小長干在越城西、地有長短、故号大・小相干」(建業の南五里に山崗有り、其の間の平地、吏民雜居す。東長干の中に大長干・小長干有りて、皆相連なる。大長干は越城の東に在り、小長干は越城の西に在り、地に長短有り、故に大・小相干と号す)とある。

樂府に「長干曲」があり、『樂府詩集』は古辞、崔顥の歌辞を収め、「長干行」として、李白の歌辞二首を収める。長江を往来する舟人の妻を歌うものが多く、李白「長干行」は長干の幼なじみの男性と結婚した女性が、そのなれそめから今に至るまでの二人の関係を歌い、現在なかなか帰ってこない

夫への思いを述べる。

唐より前の詩の用例は少なく、吳均「和蕭洗馬子顯古意詩六首」其六(『玉臺新詠』卷六)に「妾家橫塘北、發艷小長干」(妾は家す 横塘の北、艷は発す 小長干)とあり、小長干に住む美しい女性を詠む。

唐詩では「長干曲」「長干行」を詩題とするもの以外に、李白「越女詞五首」其一(王琦注本卷二五)に「長干吳兒女、眉目艷星月」(長干 吳の兒女、眉目 星月より艷なり)とあり、長干の女性の美しさを詠む。また元稹「送王協律游杭越十韻」(『元稹集』卷一一)に「長干迎客闌、小市隔煙迷」(長干 客を迎えて闌がしく、小市 煙を隔てて迷う)とあり、長干に旅の人が集まり、活況を呈していたことが分かる。

杜甫に用例はなく、張籍の他の例は一例。423「春江曲」(卷七)に「長干夫婦愛遠行、自染春衣縫已成」(長干の夫婦 遠行を愛し、自ら春衣を染めて縫已に成れり)とあり、これは「長干曲」に基づくもの。

〔午日〕五月五日端午の節。

この日はもともと不祥の日とされる。孟嘗君がこの日に生まれたために殺されそうになったことは有名だが、『史記』孟嘗君伝の索隱に引く『風俗通』に「俗説五月五日生子、男害父、女害母」(俗説に五月五日に子を生めば、男は父を害し、女は母を害す)とある。そのため、この日は邪気を払う行事が古くから行われており、『後漢書』礼儀志中には「仲夏之月、万物方盛。日夏至、陰氣萌作、恐物不榘。……故以五月五日、朱索五色印為門戶飾、以難止惡氣」(仲夏の月、万物方に盛んなり。日の夏至、陰氣は萌し作り、物の榘らざるを恐る。……故に五月五日を以て、朱索・五色印を門戶の飾と為し、以て悪気を難み止む)とある。

またこの日は草の上で踊ったり、鬪草をしたり、また競渡や採葉などの行事も行われていた。『荆楚歲時記』の五月五日の条には「四民並鬪百草。又有鬪百草之戲。採艾以為人、懸門戶上、以禳毒氣」(四民並びに百草を鬪む。又百草を鬪むの戲有り。艾を採りて以て人と為し、門戶の上に懸け、以て毒氣を禳う)、また「是日競渡、採雜葉」(是の日競渡して、雜葉を採る)とある。「競渡」は俗に屈原を弔うために行われたとされ、この日は見物の人々が方々から集まって、かなりの賑わいであつたようである。『隋書』地理志下に「屈原以五月望日赴汨羅。土人追至洞庭不見、湖大船小、莫得濟者。乃歌曰、何由得渡湖。因爾鼓櫂爭歸、競會亭上。習以相伝、為競渡之戲。其迅楫齊馳、櫂歌亂響、喧振水陸。觀者如雲、諸郡率然、而南郡・襄陽尤甚」(屈原は五月望日を以て汨羅に赴く。土人追いて洞庭に至りて見えず、湖は大にして船は小、濟るを得る者莫し。乃ち歌いて曰く、何に由りてか湖を渡るを

得んと。爾れに因りて權を鼓して争いて歸り、亭上に会するを競う。習いて以て相伝え、競渡の戲を為す。其れ迅楫ひびと疾しく馳せ、權歌乱れ響き、水陸に喧振す。觀る者は雲の如く、諸郡率おほむね然るも、南郡・襄陽尤も甚し」とある。また、この日の賑わいについては、『太平広記』卷二七八に引く『逸史』にも「王播少貧賤、居揚州。……端午日、盛為競渡之戲。諸州徵伎樂、兩県争勝負。綏樓看棚、照耀江水、数十年未之有也」(王播 伎樂を徵し、兩県争に居る。……端午の日、盛んに競渡の戲を為す。諸州 伎樂を徵し、兩県争い勝負す。綏樓看棚、江水に照耀し、数十年未だ之れ有らざるなり)とある。

唐より前の詩には、「午日」の用例はないようであり、唐代に至っても「端午日」を詩題に用いる例はあるものの、詩中での用例は少なく、張籍以外には、常建「鄂渚招王昌齡張債」(『全唐詩』卷一四四)に「午日逐蛟龍、宜為弔冤文」(午日 蛟龍を逐い、宜しく弔冤の文を為すべし)とある。これは、端午の日が屈原を弔う日であることを踏まえて冤罪の不满を述べるもの。杜甫には詩題に用いるものが一例。端午の日には衣服を賜ったことを詠む。

張籍にはこの他に一例。312「答開州章使君寄車前子」(卷六)に「開州午日車前子、作菓人皆道有神」(開州の午日 車前の子、菓を作す人 皆道に神有り)とある。「車前子」は眼病に効く菓草であり、これは端午の日の菓草を採る行事を踏まえたもの。

なお、「午日」の語は見えないものの、「競渡」を詠む詩は唐詩に用例は多い。盛唐以前は江南よりも宮池で行われるものを詠じるものが多く、中唐以降は江南の「競渡」を詠むものが多くなり、白居易、元稹、劉禹錫にそれぞれ江南の「競渡」を詠む詩がある。

「春酒」「春酒」には二種類あり、一つは冬に醸して春に熟成する酒、もう一つは春に醸して秋冬に熟成する酒。ここは冬に醸した酒。

古くは『詩経』豳風「七月」に「為此春酒、以介眉寿」(此の春酒を為り、以て眉寿を介く)とあり、毛伝に「春酒、凍醪也」(春酒は、凍醪なり)とある。「凍醪」は冬に醸した酒。また清・馬瑞辰「毛詩伝箋通釈」卷一六に「周制蓋以冬釀、經春始成。因名春酒」(周制 蓋し冬を以て醸し、春を経

て始めて成る。因りて春酒と名づく)と言う。唐より前の詩にも用例はあり、例えば陶淵明「讀山海經」(『文選』卷三〇)に「飲言酌春酒、擿我園中蔬」(飲び言りて春酒を酌み、我が園中の蔬を擿めり)は、冒頭に「孟夏」とあり、初夏に「春酒」を飲む例。また庾信「山齋詩」(『集注』卷四)に「遙想山中店、懸知春酒濃」(遙かに想う山中の店、懸かに知る春酒の濃きを)とある。これは時期は分からないが、山中の酒屋の「春酒」もそろそろ濃くなってきた頃だろうと推測するもの。酒屋で売ら

れる「春酒」は、張籍の詩とも関連する。

唐詩に用例は多く、店で売られる「春酒」の例としては、賀朝「贈酒店胡姬」(『全唐詩』卷一一七)に「胡姬春酒店、弦管夜鏘鏘」(胡姬 春酒の店、弦管 夜鏘鏘たり)とある。また岑参「酬成少尹駱谷行見呈」(『校注』卷四)に「成都春酒香、且用俸錢沽」(成都 春酒香らば、且く俸錢を用て沽わん)とあり、これは春酒を買う例。

杜甫には四例(そのうち一例は「春色」に作るテキストもある)の用例があり、そのうち「遭田父泥飲美嚴中丞」(『詳注』卷一一)に「田翁逼社日、邀我嘗春酒」(田翁 社日逼りて、我を邀えて春酒を嘗む)とあり、社日(春分前後の戌日)の頃に土地の老翁に誘われて春酒を飲むことを詠む。

また白居易には九例と用例が多く、先に「亥日」の語釈にも引いた「東南行一百韻 寄通州元九侍御、澧州李十一舍人、果州崔二十二使君、開州韋大員外、庾三十二補闕、杜十四拾遺、李二十助教員外、宝七校書」(既引)に「夜船論鋪賃、春酒斷餅酷」(夜船は 鋪を論じて賃り、春酒は 餠を断ちて酷る)と、江南の習俗を詠んで、夜の舟上では敷物の値を定めて借り、酒甌を割って酒を売り買ひする様を詠む。

張籍には他に用例なし。

「高高」旗が高く掲げられるさま。古くは『詩経』周頌「敬之」に「無曰高高在上」(曰う無かれ高高として上に在りと)とあり、鄭箋に「無謂天高又高在上」(言う無かれ天高く又高く上に在りと)と言うように、天は高い上に更に高いことを形容する。

唐よりも前の詩には、曹植「雜詩」(『文選』卷二九)に「高高上無極、天路安可窮」(高高として上がるに極まり無く、天路 安んぞ窮むべけんや)とあり、また謝靈運「登臨海嶠初發疆中作与從弟惠連見羊何共和之」(『文選』卷二五)に「高高入雲霓、還期那可尋」(高高として雲霓に入り、還期 那ぞ尋ぬべき)とある。前者は転蓬が風に吹かれて高く遙かに吹き上がることを、後者は峰が遙かに雲や霓に突き入っていくことを形容する。

唐詩には用例は多く、遙か高くに有るものを形容する例としては、鮑氏君徽「閔山月」(『全唐詩』卷七)に「高高秋月明、北照遼陽城」(高高たる秋月明らかに、北のかた遼陽城を照らす)、岑参「西亭子送李司馬」(『校注』卷三)に「高高亭子郡城西、直上千尺与雲齊」(高高たる亭子 郡城西、直上千尺 雲と齊し)とある。前者は辺城を照らし出す月を、後者は遙か山上にある亭子(見張り所)を形容する。

杜甫には用例が一例、「帰雁」(『詳注』卷一三)に「腸断江城雁、高高正北飛」(腸断す 江城の雁、高高と正に北に飛ぶ)と、空高く飛ぶ雁の姿を

形容する。

中唐では元稹と白居易に用例が多く、例えば、元稹「松樹」(『元稹集』卷一)には「華山高幢幢、上有高高松」(華山 高きこと幢幢として、上に高たたる松有り)とあり、白居易「宿靈巖寺上院」(二四八九)には「高高白月上青林、客去僧歸深夜深」(高高たる白月 青林に上り、客は去り僧は歸りて深夜深し)とある。元稹の例はそびえる華山の上にある高松を、白居易の例は青林の上に高くのぼる月を形容する。

張籍の用例は他に一例、³³³「使行望悟真寺」(卷六)に「採玉峰連仏寺幽、高高斜對驛門樓」(採玉の峰は仏寺の幽なるに連なり、高高 斜めに驛門樓に向かう)と、峰の高くそびえるさまを形容する。

〔酒旗〕酒屋の掲げる旗。

古くは酒旗という星座があり、『三国志』魏書・崔琰伝に引く張璠の『漢紀』に「太祖制酒禁、而融書嘲之曰、天有酒旗之星、地列酒泉之郡、人有旨酒之德。故堯不飲千鍾、無以成其聖。且桀紂以色亡國、今令不禁婚姻也」(太祖 酒禁を制し、而して融 書して之を嘲りて曰く、天には酒旗の星有り、地には酒泉の郡を列ね、人には旨酒の徳有り。故に堯 千鍾を飲まざれば、以て其の聖を成す無し。且つ桀紂は色を以て國を亡えれば、今令して婚姻を禁ぜずやと)とある。

このように星座に象られることから酒旗は古くからあつたようだが、唐より前の詩には「酒旗」の用例は見えないようである。

唐詩では、中唐より前には例が少なく、中唐から用例が増え始めるようである。中唐より前では、陶岷「西塞山下迴舟作」(『全唐詩』卷二二四)に「從此舍舟何所詣、酒旗歌扇正相迎」(此より舟を捨てて何くの所にか詣る、酒旗 歌扇 正に相迎う)とあり、夕方に舟人に向かう酒店を酒旗を以て表現する。この他に、劉長卿「春望寄王涪陽」(『全唐詩』卷一五一)に「依微水成聞鉦鼓、掩映沙村見酒旗」(依微たり 水成 鉦鼓を聞き、掩映たり 沙村 酒旗を見る)と、江村に翻る酒旗を描く例が見える(但し劉長卿の本集にはこの詩を収めず、『劉長卿詩編年箋注』はこの詩は晩唐の李群玉のものであろうとする)。

中唐には用例が多く、江南の風物の一つとしてもしばしば取りあげられる。孟郊「送李翺習之」(『校注』卷八)に「湖榜輕褰裏、酒旗高寥寥」(湖榜軽くして褰裏たり、酒旗高くして寥寥たり)、劉禹錫「隄上行三首」其一(『箋証』卷二六)に「酒旗相望大隄頭、隄下連檣隄上樓」(酒旗相望む 大隄の頭、隄下の連檣 隄上の樓)とある。前者は高々と旗がはためくさまを、後者は大隄の辺に酒樓が立ち並ぶさまを酒旗をもって表現する。この後、晩唐にも

用例は多く、杜牧の「江南春絶句」(『全唐詩』卷五二二)の「千里鶯啼緑映江、水村山郭酒旗風」(千里 鶯啼き 緑 江に映ゆ、水村山郭 酒旗の風)は広く人口に膾炙するもの。

杜甫には用例はなく、張籍にはこの他に用例なし。

この二句は、「江村」から繁華街の「長干」へと視点が移る。五月五日端午の日にもなれば、酒屋の旗が高々と上がり、客を誘い込もうとするかのよう。ここでも「長干」「午日」「酒旗」と江南をイメージさせる風物を織り込みつつ、「長干」の賑わいを表現する。

11・12 娼樓兩岸臨水柵、夜唱竹枝留北客

〔娼樓兩岸〕妓樓、妓館。「娼樓」に同じ。28「少年行」(卷一)にも見える。その【語釈】も参照。

「娼樓」の語は、梁の詩から多く見られるようになり、梁簡文帝「東飛伯勞歌二首」其二(『樂府詩集』卷六八)に「西飛迷雀東羈雉、娼樓秦女乍相隨」(西に飛ぶ迷雀 東羈の雉、娼樓の秦女乍ち相隨う)とあり、旅する者が娼樓の女性に心ひかれることを言う。また梁簡文帝には「娼樓怨節」(『玉臺新詠』卷九)があり、訪れぬ男性を思う女性の思いを詠む。なお「娼樓」に近い語であれば、「古詩十九首」其二(『文選』卷二九)に「昔為娼家女、今為蕩子婦」(昔は娼家の女為るも、今は蕩子の婦為り)と、「娼家」の語が見える。但し、この「娼家」は音楽や技芸を業とすることを言い、必ずしも妓樓、妓館を言うものではないようである。

唐詩にも初唐から例があり、盧照隣「折楊柳」(『全唐詩』卷四二)の「娼樓啓曙扉、楊柳正依依」(娼樓 曙扉を啓き、楊柳 正に依依たり)は、梁簡文帝「娼樓怨節」を踏まえるもの。中唐からは用例も増え、陳羽「広陵秋夜対月即事」(『全唐詩』卷三四八)の「相看醉舞娼樓月、不覺隋家陵樹秋」(相看て醉舞す娼樓の月、覺えず 隋家陵樹の秋)は、広陵(揚州)の夜、娼樓での楽しいひとときを詠む。

杜甫には用例はなく、張籍の用例は本詩と28「少年行」の二例のみ。

「兩岸」は妓樓が水路の兩岸に立ちならぶことを言う。金陵の南部には秦淮河があり、長江からの荷を運ぶ舟が通り、沿岸には長干などの繁華な地域があつた。李白「玩月金陵城西孫楚酒樓、達曙歌吹、日晚乘醉著紫綺裘烏紗巾、与酒客数人棹歌秦淮、往石頭訪崔四侍御」(王琦注本卷一九)に「兩岸拍手笑、疑是王子猷。酒客十数公、崩騰醉中流」(兩岸 手を拍ちて笑う、疑うらくは是れ王子猷ならん。酒客 十数公、崩騰して中流に酔う)とあり、秦淮河沿いを舟で通るさまを詠む。李白には他に「魏郡別蘇明府、因北遊」

(王琦注本卷一五)に「青樓夾兩岸、万室喧歌鍾」(青樓 兩岸を夾み、万室 歌鍾 喧し)とあり、これは秦淮のことではないが、兩岸に青樓が立ちならぶことを詠む。また劉禹錫「隄上行三首」其一(既引)の「酒旗相望大隄頭、隄下連橋隄上樓」(酒旗相望 大隄の頭、隄下の連橋 隄上の樓)は、酒店が川岸にならぶことを言う。

なお、秦淮河岸の妓館については、杜牧「泊秦淮」(『全唐詩』五二三)の「煙籠寒水月籠沙、夜泊秦淮近酒家。商女不知亡國恨、隔江猶唱後庭花」(煙は寒水を籠め月を籠む、夜に秦淮に泊すに酒家近し。商女は知らず亡國の恨、江を隔てて猶唱う後庭の花)が有名。

〔水柵〕舟の侵入を防ぐための柵。或いはこの手前、又はここに舟を係留して岸に上がることになり、その上がり口辺りに娼樓があるということか。

〔南齊書〕周山図伝に「山図断取行旅船板、以造樓櫓、立水柵、旬日皆辦」(山図 行旅の船板を断ち取りて、以て樓櫓を造り、水柵を立て、旬日にして皆辦う)とあり、周山図が反乱軍の侵攻を防ぐために、短期間で樓櫓と水柵を作ったとある。この他にも『梁書』及び『陳書』には攻防の要として水柵がしばしば見える。建康(金陵)及び秦淮河周辺の水柵については、『梁書』侯景伝に「僧辯焚景水柵、入淮、至禪靈寺渚。景大驚、乃緣淮立柵、自石頭至朱雀航。(僧辯 景の水柵を焚き、淮に入り、禪靈寺の渚に至る。景大いに驚き、乃ち淮に縁りて柵を立て、石頭自り朱雀航に至る)とある。

詩の用例は張籍以前には見当たらないが、中唐では李頻「送德清・明府」(『全唐詩』卷五八七)に「水柵横舟閉、湖田立木分」(水柵は舟を横えて閉じ、湖田は木を立てて分かつ)とあり、舟を並べて水柵を閉じることを言う。また晩唐の齊己「江行早發」(『全唐詩』卷八四〇)に「鳥乱村林迴、人喧水柵横」(鳥乱れて 村林迴かに、人喧しく 水柵横たわる)とあり、朝に水柵の周辺は人々の声で騒がしくなることを言う。

〔夜唱竹枝留北客〕「竹枝」は、もと巴蜀地方の民歌で、広く荆楚地方でも行われた民間歌謡。この民間歌謡を、白居易が忠州で聞いて「竹枝詞」を制作し、のちに劉禹錫も夔州で新歌詞を制作し、広く人々に知られるようになったという。

この「竹枝詞」の起源及び唐以後の「竹枝詞」については、山寺三知氏(『竹枝詞』の起源)(『國學院中國學會報』第四二集、一九九六年)に詳しい。それによれば「竹枝」が詩に詠まれ始めるのは、杜甫の「奉寄李十五秘書文疑二首」其一(『詳注』卷一五)に「竹枝歌未好、画舸莫遲回」(竹枝 歌未だ好からず、画舸 遅回する莫かれ)とあるのが、早い例とされる。以後、中

唐期の詩には用例が俄に増加し、「楚人・巴人が歌う(竹枝)の歌詞によって、郷愁がそそられ」、また「旅の途上のエキゾチックな風物として(竹枝)を詠み込」んでいる。一方、唐人が制作した「竹枝詞」については、顧況・白居易は南方の自然風土の中に、竹枝のことや曲のもたらす情感を詠むのに対して、劉禹錫「竹枝詞」は女性の恋情を詠みこみ、艶詩的な内容が加えられるという。

ここでは「竹枝」が夜に唱われる例のみを挙げると、まず顧況「竹枝曲」(『全唐詩』卷二六七)は「巴人夜唱竹枝後、腸断曉猿声漸稀」(巴人 夜に竹枝を唱いし後、腸断曉猿 声漸く稀なり)とあり、巴人が夜唱う竹枝の歌は旅人の望郷の思いを駆りたてるものとされている。また劉商「秋夜聽嚴神巴童唱竹枝歌」(『全唐詩』卷三〇三)にも「思婦夜唱竹枝歌、庭槐葉落秋風多」(思婦を思い夜に竹枝の歌を唱えば、庭槐 葉落ちて秋風多し)と、同じく望郷の思いを駆りたてるものとして見える。

一方、女性の恋情を詠むものに、劉禹錫「隄上行三首」其二(『箋証』卷二六)に「桃葉伝情竹枝怨、水流無限月明多」(桃葉 情を伝う竹枝の怨、水流限り無く月明多し)とある。「桃葉」は晋の王献之の愛妾。彼女のような女性が竹枝歌に思いを込めて歌うことを言う。また張登「上巳泛舟得遲字」(『全唐詩』卷三二三)は「竹枝遊女曲、桃葉渡江詞」(竹枝 遊女の曲、桃葉 渡江の詞)と、竹枝を舟上や水のほとりで歌う女性の曲とする。

張籍のその他の用例は二例。ひとつは先に劉禹錫の作として引いた「隄上行二首」の其二、もう一例は203「送枝江劉明府」(卷四)に「向南漸漸雲山好、一路唯聞唱竹枝」(南に向かえば漸漸と雲山好く、一路唯だ聞く竹枝を唱うを)と、江南に向かう旅の途上で「竹枝」の歌が聞こえてくると言う。なお張籍の本集は、この作品を張籍の「竹枝詞五首」として収録する。

「北客」は北方からきた旅人。経書や唐より前の詩には用例が無いようである。

唐詩では、崔国輔「題豫章館」(『全唐詩』卷一一九)に「雲留西北客、氣歇東南帝」(雲のごと留まる西北の客、氣は歇く東南の帝)とある。「西北客」は長安から来た旅人。浮雲のごとく南方に留まる詩人自らを指す。また岑参「峨眉東脚臨江聽猿懷二室旧廬」(『校注』卷四)に「哀猿不可聽、北客欲流涕」(哀猿 聴くべからず、北客 流涕せんと欲す)とあり、ここでも「北客」は詩人自らを指し、猿声に望郷の思いを駆りたてられることを言う。

杜甫の用例は一例、「最能行」(『詳注』卷一五)に「此郷之人器量窄、誤競南風疏北客」(此の郷の人 器量窄く、誤りて南風を競いて北客を疏んず)とあり、夔州の人に受け入れられない詩人自らを言う。

中唐の詩には用例多く、例えば、元稹「花栽二首」其一(『元稹集』卷一

九)に「欲知北客居南意、看取南花北地来」(北客の南に居る意を知らんと欲せば、看取せよ南花の北地に來たるを)、白居易「送客之湖南」(九四八)に「年年漸見南方物、事事堪傷北客情」(年年 南方の物を漸く見れば、事北客の情を傷ましむるに堪えん)とある。前者は「北客」は南方に留まることができないことを言い、後者は南方の事物を見ることは「北客」の心を傷ましめることを言う。

以上の例は、「北客」が南方の事物を厭うことを言い、これは「北客」の用例の多くに共通するものである。しかし、白居易には「留北客」(一一三二)と題する詩があり、ここでは「北客」との別れに臨んで「楚袖蕭條舞、巴弦趣数弾」(楚袖 蕭條たる舞、巴弦 趣数たる弾)と、楚の舞や巴の曲によって「北客」を歓待しようとしている。但し、次の二句に「笙歌随分有、莫作帝郷看」(笙歌 分に随う有り、帝郷の看を作す莫かれ)と、都のものとは比べてくれるなど、江南の樂曲を積極的に肯定してのものではない。それに対して、同じく白居易「郡樓夜宴留客」(一一三三〇)は「北客勞相訪、東樓為一開。襄簾待月出、把火看潮來。艶聽竹枝曲、香伝蓮子盃。寒天殊未曉、歸騎且遲迴」(北客 勞いて相訪い、東樓 為に一たび開く。簾を褰げて月の出づるを待ち、火を把りて潮の來たるを看る。艶は竹枝の曲を聴き、香は蓮子の盃に伝う。寒天 殊に未だ曉かず、歸騎 且く遲迴せよ)と、慰勞に訪れてくれた北客を、竹枝の曲を以てしばし留めようとしている。

「留客」の用例は、古く『楚辞』大招に見え、「粉白黛黒、施芳沢只。長袂扞面、善留客只」(粉白く黛黒く、芳沢を施せり。長袂 面を扞いて、善く客を留む)とある。これは長い袖の女性の巧みな舞が客の心をひきとめることを言う。唐よりも前の詩では、費昶「和蕭洗馬画屏風詩二首・陽春発和氣」(『玉臺新詠』卷六)に「扞袖当留客、相逢莫相難」(袖を扞いて当に客を留むべし、相逢うこと相難しとする莫かれ)とあり、『楚辞』大招を踏まえる。

唐詩に「留客」の例は多く、女性や歌舞音曲によって客を留める例を求めれば、孟浩然「催明府宅夜觀妓」(『全唐詩』卷一六〇)に「長袖平陽曲、新声子夜歌。從來慣留客、茲夕為誰多」(長袖 平陽の曲、新声 子夜の歌。從來 客を留むるに慣るるに、茲の夕 誰が為に多かる)とあり、白居易「戲和賈常州醉中二絶句」(二四四八)に「越調管吹留客曲、吳吟詩送暖寒盃」(越調 管は吹く 留客の曲、吳吟 詩は送る 暖寒の盃)とある。

前の句が長干の昼の顔とすれば、この二句は夜の顔を描く。「水柵」は【語釈】でも述べたように、舟の侵入を防ぐ柵であり、或いはそこで舟は停泊して人々が岸に上がるので、その兩岸に旅人を待ち受けるように妓楼が兩岸に

立ちならぶことを言うか。

13・14 江南風土歛樂多、悠悠処処尽經過

〔江南風土歛樂多〕「風土」は土地の習俗や環境を言う。『後漢書』張堪伝に「帝嘗召見諸郡計吏、問其風土及前後守令能否」(帝嘗て召して諸郡の計吏を召して、其の風土及び前後の守令の能否を問う)とある。

唐詩より前の詩に用例は稀。陸雲「答張士然」(『文選』卷二五)に「百城各異俗、千室非良隣。飲旧難飯合、風土豈虛親」(百城 各の俗を異にし、千室 良隣に非ず。旧を飲びては飯に合するは難く、風土 豈に虚しく親しまんや)とある。これは異郷の風土に親しめないことを言う。

唐詩には用例も多い。杜審言「贈崔融二十韻」(『全唐詩』卷六二)に「雲天斷書札、風土異炎涼」(雲天 書札を断ち、風土 炎涼を異にす)とあり、駱賓王「從軍中行路難二首」其一(『全唐詩』卷七七)に「中外分区宇、夷夏殊風土」(中外 区宇を分かち、夷夏 風土を殊にす)とある。前者は互いに環境の異なる土地に居ることを言い、後者は中華と蠻夷では習俗や環境が異なることを言う。

また劉長卿「奉送盧員外之饒州」(『全唐詩』卷一四七)に「風土無勞問、南枝黄葉稀」(風土 勞問する無く、南枝 黄葉稀なり)とあり、饒州ではねぎらいの言葉をかけられることもないことを言う。これは土地の氣質の意に近いようである。劉長卿にはもう一例、「自江西歸至旧任官舍贈袁賛府」(『全唐詩』卷一五一)に「南方風土勞君問、賈誼長沙豈不知」(南方の風土 君を勞して問う、賈誼の長沙 豈に知らざらん)とあり、こちらは賈誼が長沙に苦しんだように、南方の風土に合わなかったことをいう。

杜甫の用例は四例、「鄭典設自施州婦」(『詳注』卷二〇)には「乃聞風土質、又重田疇闢」(乃ち聞く風土の質、又重ねて田疇闢く)とあり、杜甫「寄柏学士林居」(『詳注』卷一八)に「荆揚春冬異風土、巫峽日夜多雲雨」(荆揚 春冬 風土を殊にし、巫峽 日夜 雲雨多し)とある。前者は施州がどのような土地であるかを聞いており、後者は荆州や揚州の氣候が北方とは異なることを言う。

張籍の用例は一例のみ。「歛樂」は楽しいこと、心を喜ばすこと。ここでは江南の色々な風俗や景物を見て楽しむことを言う。

古くは『孟子』梁惠王上に「文王以民力為臺為沼、而民歛樂之、謂其臺曰靈臺、謂其沼曰靈沼、樂其有麋鹿魚鼈。古之人与民偕樂、故能樂也」(文王は民の力を以て臺を為し沼を為すも、民は之を歛樂し、其の臺を靈臺と曰い、其の沼を靈沼と曰い、其の麋鹿魚鼈の有るを樂しめり。古の人は民と偕に樂

しむ、故に能く楽しむなり」とある。

唐詩以前の用例も多く、「古詩十九首」其四(『文選』卷二九)に「今日良宴会、歡樂難具陳」(今日 良宴会、歡樂 具に陳べ難し)とあり、劉楨「公讌詩」(『文選』卷二〇)に「永日行遊戯、歡樂猶未央」(永日 行く遊戯するも、歡樂 猶お未だ央きず)とある。前者は宴会の楽しみを、後者は色々な場所を遊覧する楽しみを言う。

唐詩では盛唐以前には意外に少なく、崔知賢「上元夜效小庾体」(『全唐詩』卷七二)に「歡樂無窮已、歌舞達明晨」(歡樂 窮まり已む無く、歌舞 明晨に達す)とあり、これは宴席の楽しみが尽きないことを言う。

杜甫の用例は二例だが、一例は「歡樂」で一語ではないようであり、残る一例の「七月三日亭午已後、較熱退晚加小涼穩睡有詩、因論壯年樂、戲呈元二十曹長」(『詳注』卷一三)に「少壯跡頗疏、歡樂會倏忽」(少壯 跡は頗る疏にして、歡樂 會ち倏忽たり)と、若き日の歡樂がすぐに過ぎ去ることをいう。

張籍の用例は三例。325 「和崔駙馬聞蟬」(卷六)に「鳳凰樓下多歡樂、不覺秋風暮雨天」(鳳凰樓下 歡樂多く、覺えず 秋風 暮雨の天)とあり、本詩と類似の表現が見える。

「悠悠処処」「悠悠」ははるか遠くまで行くさま。「悠悠」の示す意味は多岐にわたるが、ここは次の「処処」が経過する場所の多さを示すので、ここは経過する範囲の広さを示すと解したい。

『詩経』小雅「黍苗」に「芄芄黍苗、陰雨膏之。悠悠南行、召伯勞之」(芄芄たる黍苗、陰雨 之を膏す。悠悠たる南行、召伯 之を勞う)、毛伝に「悠悠行貌」(悠悠は行く貌)とある。またこれを踏まえる王粲「從軍行五首」其五(『文選』卷二七)に「悠悠涉荒路、靡靡我心愁」(悠悠として荒路を涉り、靡靡として我心愁う)とあり、荒れはてた道を遠く從軍してゆくことを詠む。

唐詩の用例は多く、遠くにゆくさまの用例を幾つか掲げれば、初唐では、宋之問「自洪府舟行直書其事」(『全唐詩』卷五一)に「悠悠南溟遠、採掇長已矣」(悠悠 南溟遠く、採掇 長えに已みぬ)、盧照隣「晚渡滑橋寄示京邑遊好」(『全唐詩』卷四二)に「我行背城闕、驅馬獨悠悠」(我行 城闕に背き、馬を驅りて獨り悠悠たり)とある。前者は、遠く南方の地に行くことを言い、後者は獨り都城を離れて遠く行くことを言う。また盛唐以降では、王維「送徐郎中」(趙注本卷一一)に「東郊春草色、驅馬去悠悠」(東郊 春草の色、馬を驅りて去ること悠悠)、韋応物「送李侍御益赴幽州幕」(『校注』卷四)に「悠悠行子遠、眇眇川途分」(悠悠と 行子遠く、眇眇と 川途分

かる)とある。これらの用例は、いずれも遠くに旅立つ者を見送る詩であり、遠く行くことを肯定的には捉えていないようである。

杜甫の用例は二十一例、このなかで注目されるのは、「過南岳入洞庭湖」(『詳注』卷二二)の「悠悠迴赤壁、浩浩略蒼梧。帝子留遺恨、曹公屈壯圖」(悠悠 赤壁を迴り、浩浩 蒼梧を略す。帝子 遺恨を留め、曹公 壯図を屈す)。これは南岳(衡山)に向かうため洞庭湖を訪れたときのものであり、引用部分は赤壁や蒼梧などの史跡をめぐることをいう。「悠悠」を、鈴木虎雄「杜甫全詩集」は赤壁の岸が遙かに回転するさまと解するようだが、これは杜甫自身が赤壁の岸に沿って遠くまで進み行くことも言うのではあるまいか。

張籍の用例は十一例、60 「送辺使」(卷二)の「寒沙陰漫漫、疲馬去悠悠」(寒沙陰きこと漫漫、疲馬去ること悠悠)は遠く辺境の地を行くさま、92 「送新羅使」(卷二)の「悠悠到鄉国、還望海西天」(悠悠 郷国に到り、還て望む海西の天)は、新羅の使者が遠く故国に帰りつくことを言う。また41 「懷別」(卷七)の「古道隨水曲、悠悠繞荒村」(古道 水の曲に隨い、悠悠 荒村を繞る)は、古道が荒廢した村をぐるりと廻っている様子を言い、杜甫の「過南岳入洞庭湖」に類似する表現。

「処処」はあちこち。いたるところ。30 「將軍行」(卷一)にも見え、その【語釈】を参照。

「尺經過」「經過」はあちこちを訪れて、遊覧すること。

唐詩より前の詩では、曹操「步出夏門行」(『宋書』樂志)に「不知當復何從。經過至我碣石、心惆悵我東海」(知らず 當に復た何にか從うべき。經過して我が碣石に至り、心惆悵として我東海す)とある。また、謝混「遊西池」(『文選』卷二二)「逍遙越城肆、願言屢經過。回阡被陵闕、高臺眺飛霞」(逍遙して城肆を越え、願いて言に屢しば經過す。回れる阡 陵闕を被え、高臺 飛霞を眺む)とあり、西池のあたりをあちこちと遊覧することをいう。阮籍「詠懷詩一七首」其八(『文選』卷二三)に「西遊咸陽中、趙李相經過」(西のかた咸陽の中に遊び、趙李と相經過せり)とあるのは、趙飛燕や李夫人のような美女のもとをしばしば訪問することを言う。

唐詩にも用例は多いが、江南の地を遊覧する例は、沈佺期「少遊荆湘因有是題」(『全唐詩』卷九六)に「憶昨經過処、離今二十年」(昨の經過せし処を憶えば、今を離れること二十年なり)とあり、孟郊「旅次湘沅有懷靈均」(『校注』卷六)に「經過湘水源、懷古方脚躡」(湘水の源を經過し、古を懷いて方に脚躡す)とある。前者はかつて荆湘地方を遊歴したことを思い、後者は湘水の源を訪れ屈原の事を思い出すことを言う。

杜甫の用例は十一例、人を訪問する(される)例が多いが、「懷瀟上遊」(『詳

注】卷一八）に「悵望東陵道、平生瀟上遊。春濃停野騎、夜徹宿雲樓。離別人誰在、經過老自休。眼前今古意、江漢一扁舟」（悵望す 東陵道、平生瀟上の遊。春濃くして野騎を停め、夜徹かにして雲樓に宿る。離別 人誰か 在らん、經過 老いて自ら休む。眼前 今古の意、江漢 一扁舟）とあり、これはかつて瀟上を遊覧したことを思い起こすも、今は年老いて再びそこを經過することを自らあきらめることを言う。

張籍の用例は十二例、やはり誰かのもとを訪問する例が多いが、310「送僧往全州」（卷六）に「聞道谿陰山水好、師行一一徧經過」（聞道く 谿陰は山水好く、師は行きて一一徧く經過すと）と類似の表現が見える。

末二句は、江南には心を喜ばせるものが多く、それらを全て見尽くしたいものだと願望を述べて結ぶ。

【補】

一 「江南行」の構成

「江南行」は、四句でひとつのまとまりで、末二句が結びとなっているようである。

- 1 〵 4 江南の風景と水上生活
- 5 〵 8 江村の亥市の賑わいと水辺の暮らし
- 9 〵 12 長干の昼と夜
- 13 〵 14 江南の遊覧の楽しみ

冒頭の1〵4句は、江南の風景から江南特有の水上生活を描き、5〵8句で亥市でにぎわう江村と水辺での生活が描かれる。そして9〵12句で、端午で賑わう繁華な「長干」の昼と夜を描いている。「江南」から「江村」、そして「長干」へと、場所が移ってゆき、まるで実際に舟に乗って、長江沿岸の「江村」を過ぎり、そして秦淮河へと入って「長干」へと至るかのようである。

二 同題樂府との比較

解題でも述べたように、張籍の「江南曲」は従来の同題樂府とはその内容

が異なる。

古辞は江上に蓮の葉が広がり、その間を魚が泳ぎ戯れる景を詠じたものである。そこには戯れる男女の姿が託されているとする説もあるけれども、江南の好ましい風景を描くことは、張籍の「江南曲」にも通うところがある。

これに対して、宋の湯惠休「江南思」と梁の簡文帝「江南思」二首は、前者は、旅人が春草を見て故郷を思うことを、後者は、其一は淮南王の故事を踏まえて仙術のことを、其二は江上での遊びを終えて、夕暮れに帰るときのことを詠む。これらは、古辞の歌辞からは離れ、「江南思」という題名から連想されることを詠んだものようである。

一方、張籍と同題の「江南曲」は、梁の沈約と柳惲に作例がある。いま両者の作品を挙げると、以下のようである。

沈約「江南曲」〔樂府詩集〕卷二六

- 1 櫂歌発江潭 櫂歌 江潭に発し
- 2 采蓮渡湘南 蓮を采りて 湘南を渡る
- 3 宜須間隱処 宜しく間隱の処を須むべし
- 4 舟浦予自諳 舟浦 予自ら諳んず
- 5 羅衣織成帶 羅衣 織成の帶
- 6 墮馬碧玉簪 墮馬 碧玉の簪
- 7 但令舟楫渡 但だ舟楫をして渡らしむるのみ
- 8 寧計路嶄嵌 寧ぞ路の嶄嵌を計らん

柳惲「江南曲」〔玉臺新詠〕卷五

- 1 汀洲采白蘋 汀洲に白蘋を採る
- 2 日落江南春 日は落つ 江南の春
- 3 洞庭有婦客 洞庭に婦客有り
- 4 瀟湘逢故人 瀟湘に故人に逢うと
- 5 故人何忘返 故人 何ぞ返らざる
- 6 春華復心晚 春華 復た心に晩るるべし
- 7 不道新知樂 道わず 新知の樂しきを
- 8 祇言行路遠 祇だ言う 行路の遠きを

沈約は、男性と楽しく戯れる採蓮の女性を詠み、その女性が後の苦勞を知らぬことを述べて結び、柳惲は、帰ってこない男性を待つ採蓮の女性が、旅人から男性の消息を聞くという内容である。前者が、男性と女性との出会いを描き、後の別れを予感させて結ばれるのに対して、後者は、別れた後に帰

ってこない男性を待つ女性を描いており、別れの前か後かという違いはあるものの、いずれも採草の女性を詠んでいる。

これ以降の「江南曲」は、この両者に登場する女性、特に離別後に男性を待つ女性が描かれるようになり、唐代の宋之問、劉昫虚、丁仙芝、劉希夷、于鵠、李益らの「江南曲」は、いずれも帰らぬ男性、又は訪れるべき男性を待つ江南の女性を描いている。

これに対して、張籍の「江南曲」は、江南の風景や環境、そして人々の生活やその習俗を描き、そのような江南を遊覧する楽しみが述べられており、従来の「江南曲」とは大きく異なる。

また、その用語は、これまでも詩に用いられていた江南を象徴する風物(橘樹)「吳姬」「白苧」「江村」「落帆」「(青)莎」「潮水」「長干」を詠み込むとともに、中唐ごろから詩に用いられはじめたもの(「卑湿」「亥日」「午日」「酒旗」「竹枝」)や、まだ詩語としては熟してはいないもの(「牌」「無井」「水柵」)を織りまぜて、江南の新たな魅力を描き出そうとしているようである。

またそれらの風物は、例えば、「舟上」の「吳姬」は、従来の「江南曲」で描かれてきた採草の女性を想起させながら、その「吳姬」が機織りをするというようにイメージを転換している。同じように、のどかな「江村」は、

亥市で賑わう村に、「北客」の望郷の思いを駆りたてる「竹枝」の歌は、逆に「北客」の心をひきとめる歌へと、その設定やイメージを転換して、それぞれに新しい価値が与えられているようである。

このように張籍の「江南曲」は、同題の楽府や従前の「江南」のイメージを転換し、従前のイメージと新しい要素を巧みに織りまぜながら、「江南」の新しい魅力を描きだそうとしたものではないだろうか。南方の異文化を詩に描くことは、中唐期から盛んになり始めたことのようにあり、好川聡氏「蠻夷の光景―中唐の異文化受容史―」(『中国文学報』第七二冊、二〇〇六年)は、中唐期には「積極的に蠻夷の異なる風土風俗の面白さを見出そうとする姿勢」が見られ、「蠻夷という中原とは全く異なる存在にその個性的な価値を認めようとする認識の変化」があったと指摘する。張籍の「江南曲」も、そのような中唐期の異文化受容の一つの現れなのかもしれない。しかし、韓愈、柳宗元、劉禹錫、元稹、そして白居易らが、左遷の悲哀から、或いはそれを乗り越えようとして、異文化と向きあうのに対して、張籍の「江南曲」は、左遷の悲哀とは無縁のようである。張籍の「江南曲」は、むしろ純粹に江南の奇なる風俗を楽しもうとするようであり、この辺りにも彼の楽府詩の新鮮さがあるのかもしれない。

(佐藤)